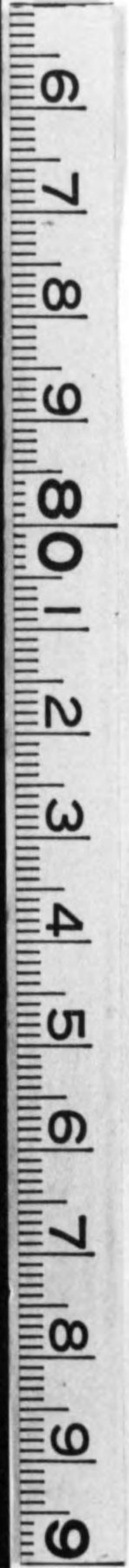


60-983



1200501272417

60
3



始



談餘學醫方漢



京東
梓房書西中



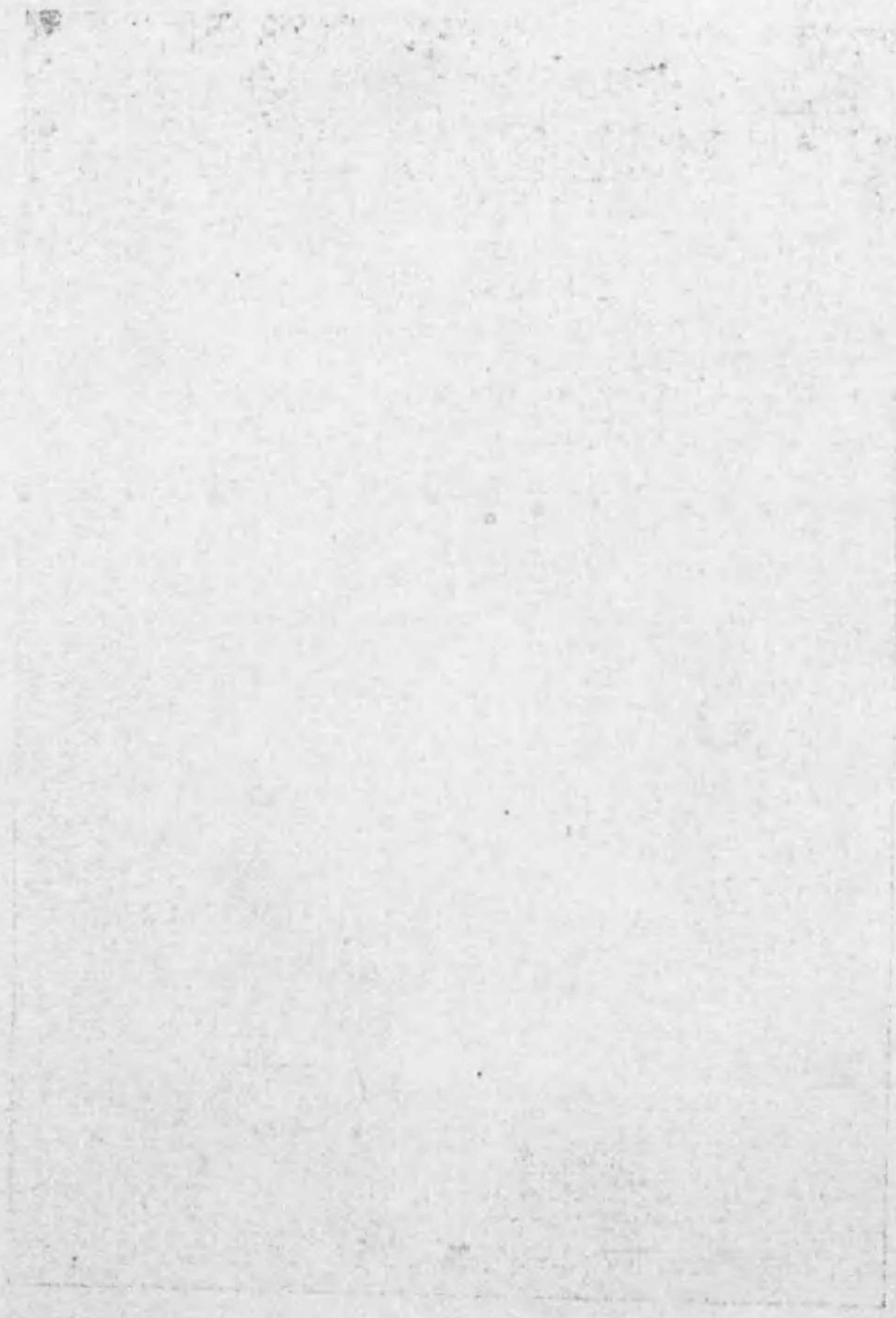
中山研究所寄贈本



手助者著るす躰に頭隠し立ちの樺村藤口落漣の嚴華

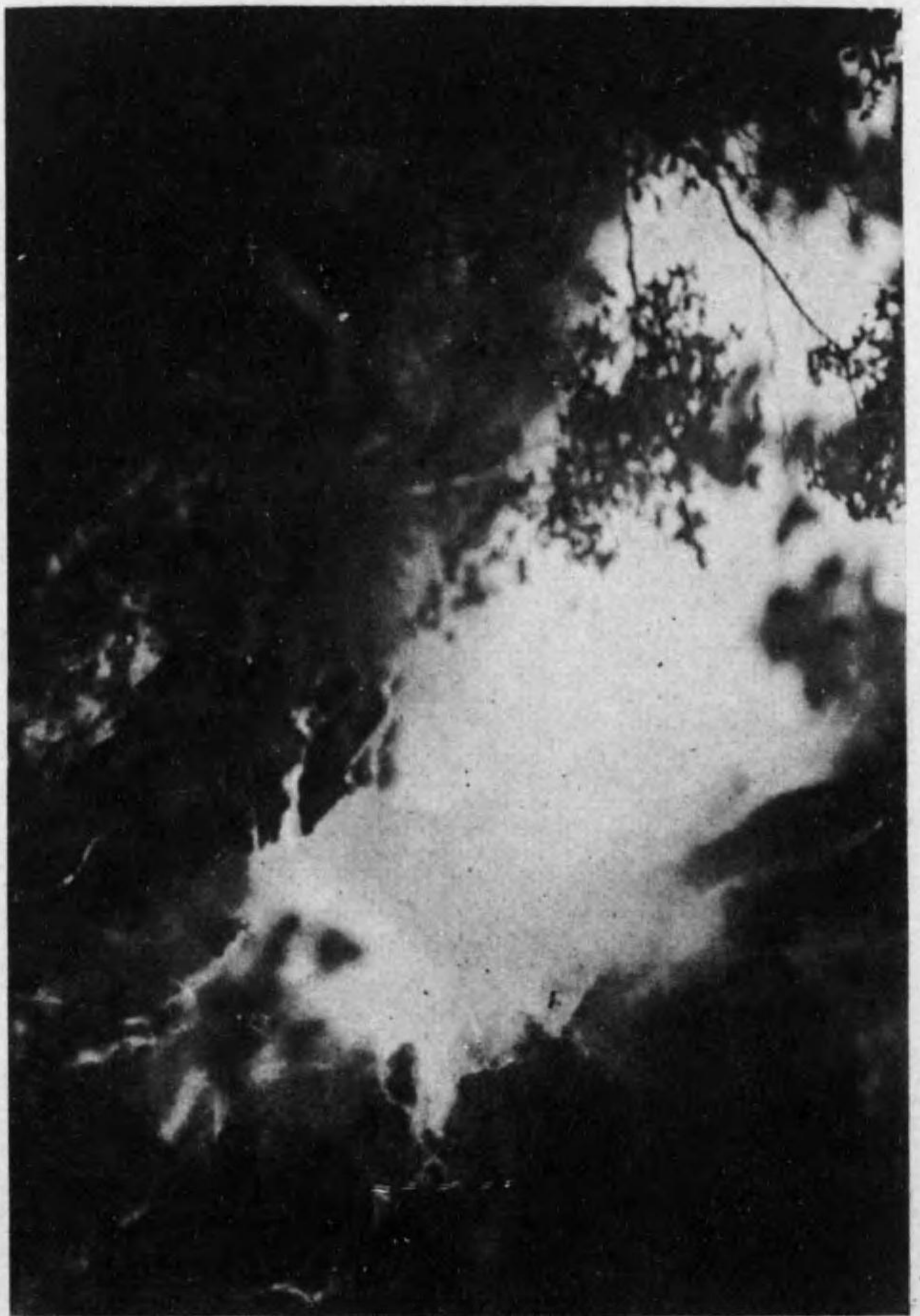
屋茶見漣
↓

帯狀は大谷川
←



三ノ口

中央の滝
↓

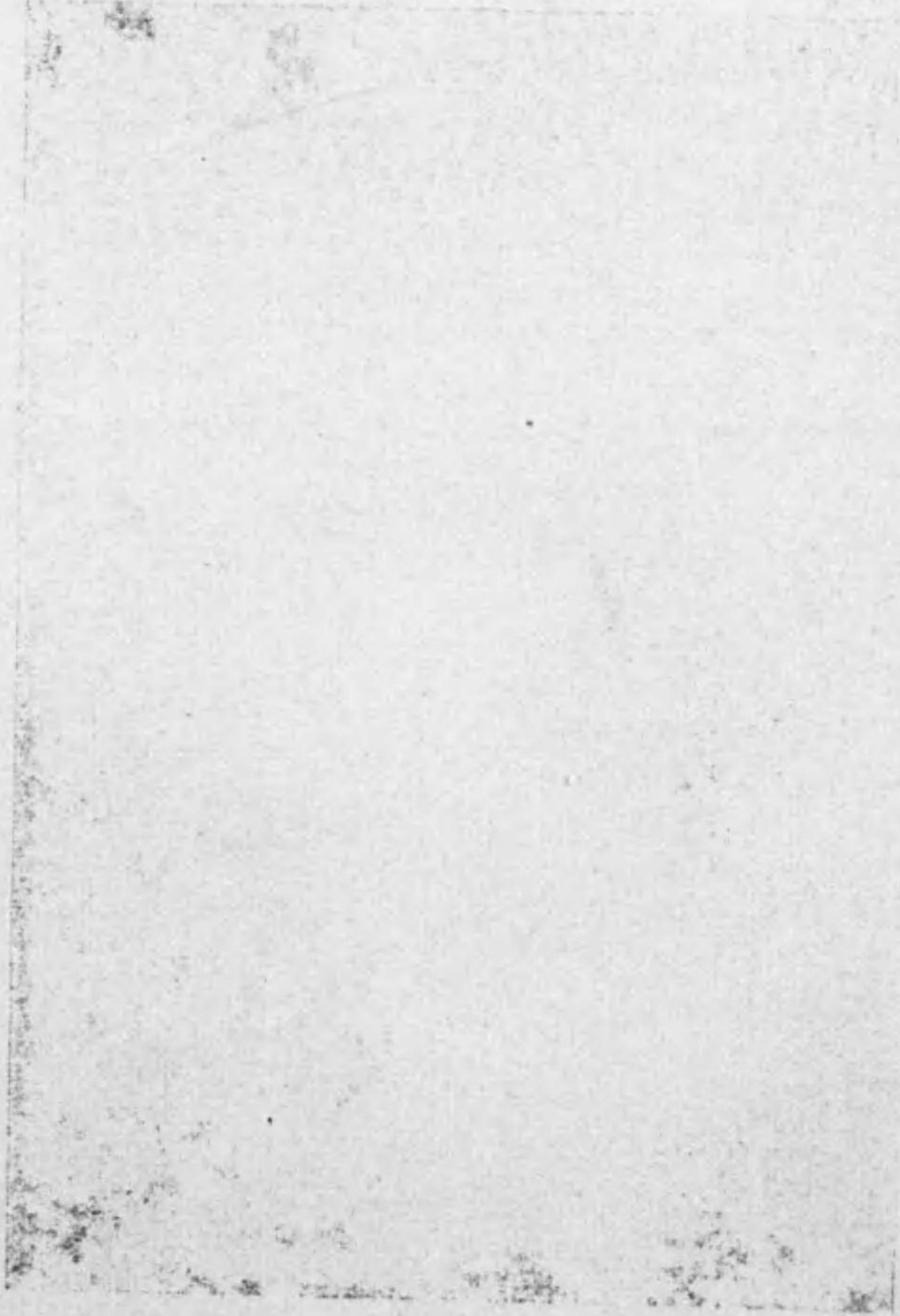


滝の落ち口
→

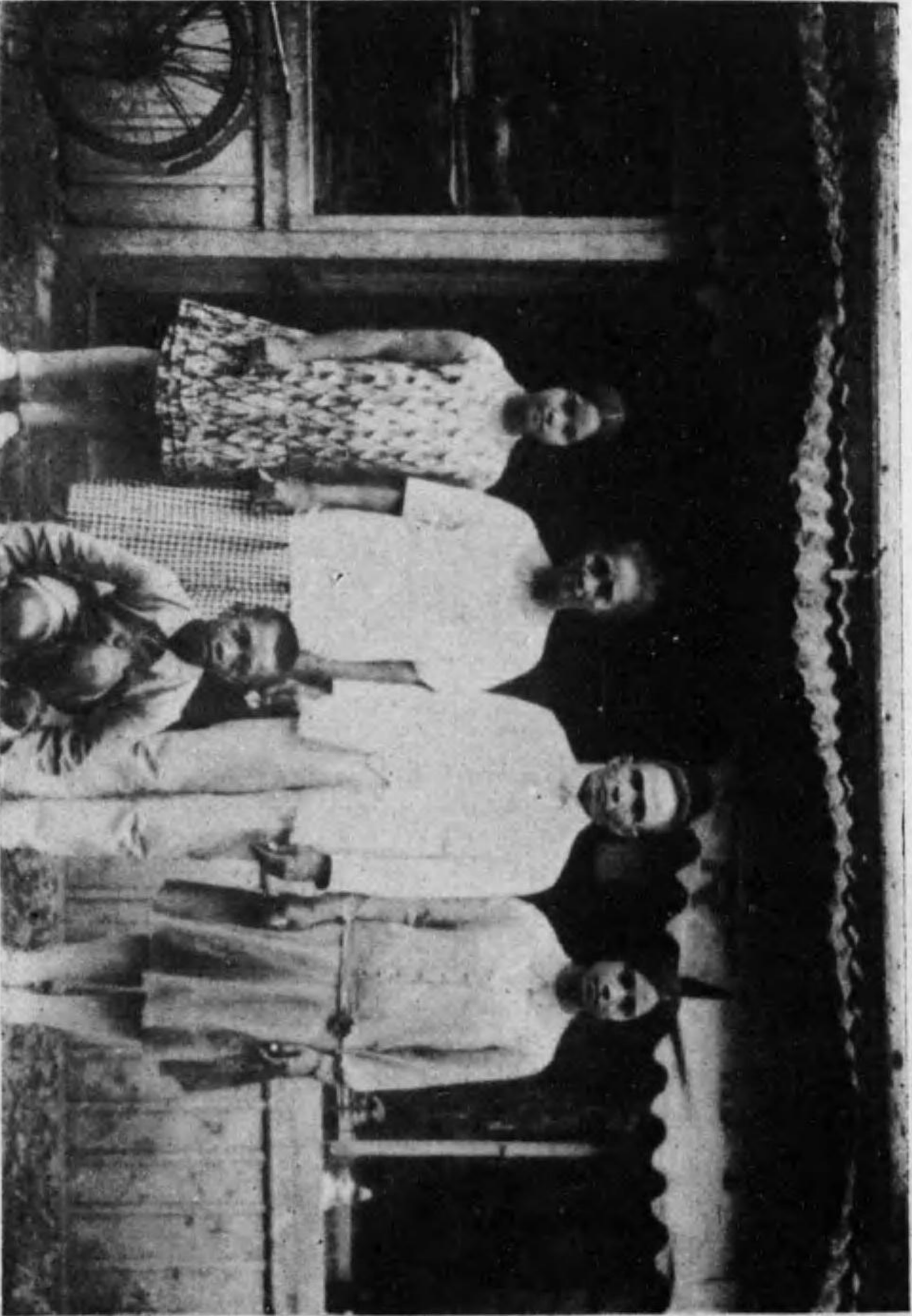
↑
壺

眞窟険冒しせ暇俯を壺瀧でりおに上掛るせ出突に上の壺瀧りよ頭巖

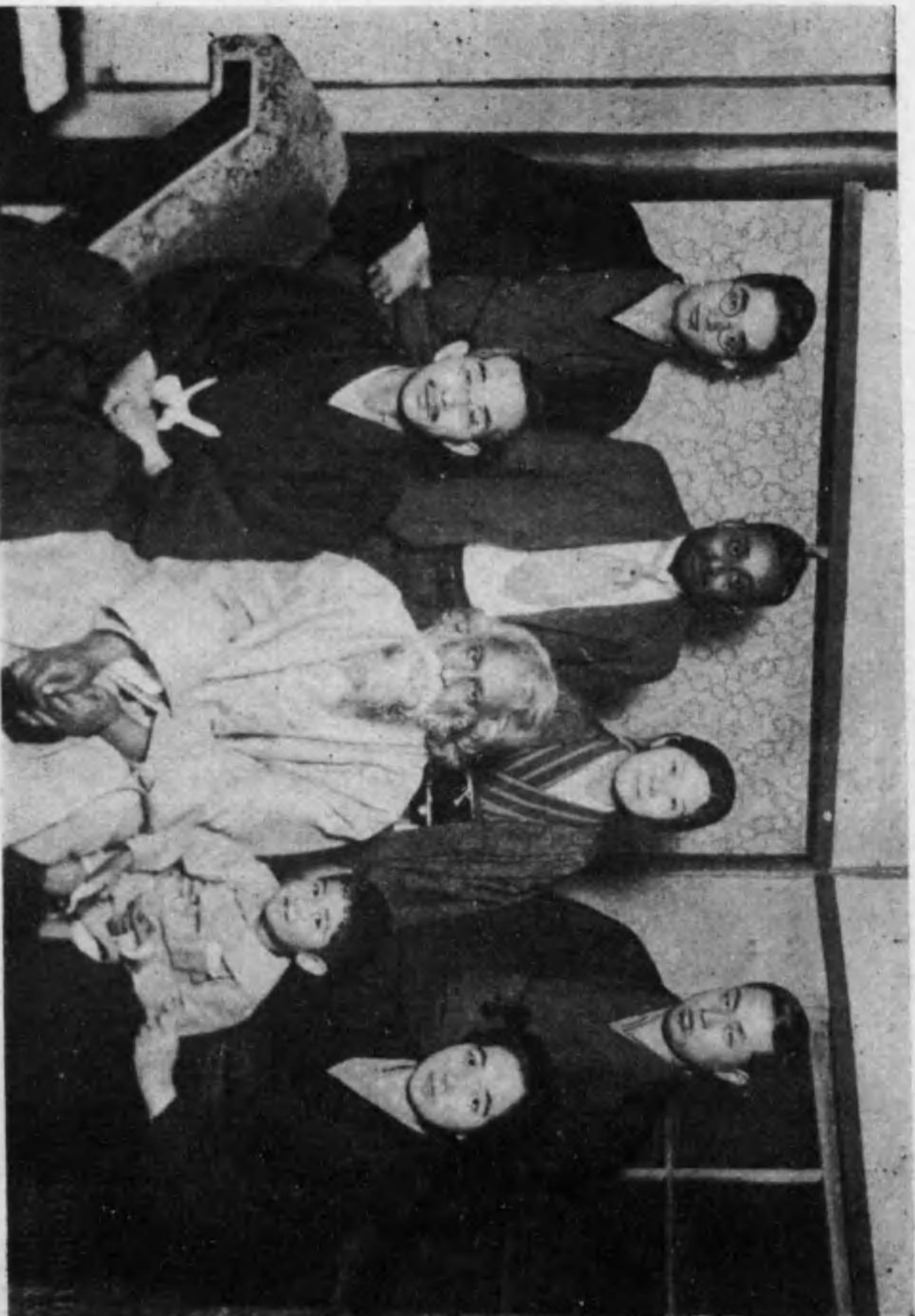
112 號の扉
→



▲
112 號



旗令・人夫タゲア・軍將テルカリ・旗令
(アテに前エフカシハハリハ)



列後 氏スーホ・人夫スーホ・息令氏馬相
列前 氏藏愛馬相・翁ルーゴタ・息令氏スーホ・史女江黒人夫馬相

序

私は若い時から自分の生活を、人生の大目的たる眞善美の完成に役立つ方面の仕事に捧げやうと願ひ、幾分かその目的に添ふる様な生き方をなし得て來たのを悦しく思ふ。

政治の目的は國民の病氣を救ひ、生活難を和けて、人生を明るくするにあるが、此點に於て政治の目的は、醫學の目的に近似して居り、従つて良く醫家から政治家が出る所以である。

醫家から政治家が良く出るが、逆に政治家志望から醫家になる例は極めて乏しく、その乏しい例外に私は生きてゐる。——私の筆の生活は先づ詩作と藝術批評に始まり、私の熱情は直ぐに私をして、火のやうな社會改革運動やアジア主義者としての狂奔に赴かしめた。日本を血と劍によつて改革する事と、白人の支配からアジアを回復する事は、青年期の私の心に渦卷いた焰であつた。だが私は其學が幾分か進み、思慮が圓熟して來るにつれて、所謂政治運動や、改革運動などよりも更に根本的な大きな基礎的な仕事がある事を覺つた。それは醫道の廓正と云ふ事である。

今日、同胞が病苦に因はれてゐる最大な原因は、日本の古醫道が亡び、無能な西洋醫學が跋扈してゐるため、ドイツのフ・イト流の肉食衛生は、健康者をも病人にする惡魔衛生學であり、而して治療醫學は殆んど無能に近い詐欺醫學である。——つまり同胞は病氣になる様に教へ込まれ、一旦病氣になると之を救ふ事が出来ぬのが日本の醫學界の現状である。之では人を押しつけ、惡事をして病氣の時の用意をして置かねばならぬと云ふ、黄金萬能、個人主義が榮えるのは嫌とは云へない。誠に日本の國體を動搖せしめつゝあるものは、醫道の墮落に外ならぬ。

今日の貧民研究家の大部分は、貧困の原因が家長または家庭の一員が病氣にある事を結論として述べてゐる。稼ぐに追つく貧乏があり、永久に治癒の見込がない慢性の難病があり、窮迫と絶望と呪咀と權謀術策と暴力と詐欺と、まさに救ひなきの煉獄が日本に現出したのである。國民道義の頹廢と云ひ、病的思想の旺流と云ひ、一に醫道の頹廢に起因せぬものがない。

此時世に際して、最も大きな政治運動と、最も徹底したる社會運動は、醫道の廓正であらねばならぬ。この故に私は男性的な街頭馬上の運動から身を引いて、むしろ女性的と思はるる醫學界に身を投じた。

かくて衛生學の建直しを目的として『日本に適する衣食住』を著し、治療學の革命として『漢方醫學の新研究』を著し、幸に二著が動機をなして最近、漢方醫學の流行を現出し得たのは、私の悦びにたへぬ處である。

私は此二著で單に醫界廓正の指導原理を説述したに留つて、臨床家に非ざる事を言明して置いたにも係らず、周圍より治を乞はるゝ事が少なからず、遂に診療所を開いて診療に従ふ事となり、西洋醫學的に見て奇蹟的な成績をあぐるに従ひ、難病患者の訪ね來る者、漸く多く、何時しか専門の漢方醫視せらるゝ事になつた。

然しこの漢方醫視せらるる事は私としてむしろ迷惑である。キャベツの葉は、いくら剝いても葉である様に、幾皮むいても漢方醫學の研究家以外の何者でもない單調さに生きたくない。私は飽くまで多面的な存在でありたい。一皮むけば詩人であり、其下の皮をむけば美術批評家であり更にむけば社會運動家であつたり、愛國運動家であり、宗教運動家であると云ふ、本體の分らぬ火の圍りでありたい。

斯うした事を考へてゐた矢先に、中西書房の主人が見えられて、私の全人的な各種の光彩を一

序

目で見渡せる様な本を出したいから、従来の隨筆や感想や詩などを集めてくれぬかと依頼され、
まとめて見たのが本書である。堅つ苦しい論文や詩歌の全部を集めれば、更に三四冊の本になら
うが、それ等の緝録刊行は後日を待つ事とし、本書中では興味中心の讀物を主として集めた。ア
ジア主義者としての私が、二畏友の物語を小説的に書いた物を収録したのも此意味である。従つ
て本書はエタイが知れぬ本と云はれるかも知れぬが、むしろ中心のエタイが知れぬ處が本當であ
る様な本にしたくて編みなしたものである。

昭和四年十二月十日

著者識

目次

序

新日本醫學の建設

一、緒言

二、東西醫學の融合

漢方難病治療談

一、緒言

二、胃腸難病の治例

三、膽石病の治例

四、脱疽の治例

五、腎臟病と盲腸炎と糖尿病の治例

醫學と經濟學

目次

三、自然放任論の誤謬

四、醫學は地理的特質に従ふ

六、心臟病とバセトー氏病の治例

七、子宮後屈や不妊症の治例

八、其他を概略的に語る

九、語を寄す日本國民よ

一、經濟學と倫理學……………九

二、生産と消費と……………三三

三、最低生活費問題……………五五

四、砂糖輸入税……………五九

子宮後屈と不妊症の灸治……………六三

一、花の咲かぬ春……………七三

二、西洋醫は子宮の手術をすゝめる處……………七九

三、危険な子宮の手術……………八二

四、子宮後屈の原因は何か……………八二

五、腰椎の後彎屈による子宮後屈の
治療……………八六

六、病氣で後屈の場合……………七三

一、同情にたへぬ……………八九

二、淋病治療の漢藥……………九二

三、惡性淋の場合……………九二

四、睾丸炎の妙處方……………九三

淋病の漢方治療法……………八九

五、攝護腺炎の場合……………九六

六、淋病の灸治……………九七

淺田宗伯先生の話……………一〇三

漢方不老長壽談……………一〇〇

神經衰弱の漢方治療……………一六〇

一、原因と原因療法……………一〇六

二、灸による治療……………一〇三

三、漢藥による治療……………一〇四

自殺志願者の群……………一六八

一、はしがき……………一六八

二、一圓が来た……………一七〇

三、瀧で死ぬ人の色々……………一七二

四、中禪寺湖で死ぬ人……………一七五

五、死屍の話……………一七六

六、遺留品や遺書の話……………一八二

七、藤村操の話……………一八三

八、船頭から聞いた話……………一八六

九、警官から聞いた話……………一九四

一〇、和尚から聞いた話……………二〇〇

一一、死と模倣……………二〇六

一二、死と芝居……………二〇八

目次……………三

目次

一三、迷惑な情死自殺者……………	三〇	一五、センチメンタル時代……………	三三
一四、死神……………	三三	一六、車中探偵……………	三七
リカルテ將軍……………	三三		
一、淋しいカフェー……………	三四	四、祖國はアメリカに併呑……………	三六一
二、フィリッピン獨立の烽火……………	三四	五、獨木船の脱走……………	三六八
三、香港の假政府……………	三五	六、日本へ脱出……………	三七五
印度の志士ボース氏……………	三五		
一、獨立運動の家柄……………	三六一	七、日本へ逃亡……………	三七
二、印度自覺史のスケッチ……………	三六二	八、シンガポールの悲哀……………	三八
三、ボース君の生ひ立ち……………	三九〇	九、退去命令……………	三三四
四、逮捕を逃れて放浪……………	三九八	一〇、義人の出現……………	三三三
五、修行者に身をやつして……………	三九九	一一、インド人の失綜……………	三四〇
六、獨立陰謀のリーダーとして……………	三九九	一二、石井外相の感謝……………	三四四

詩

一三、日本へ歸化……………	三四八		
篇……………	三四八		
一、ボルガを廻りて……………	三五二	三、ダンヌンツイオ君……………	三六四
二、孟宗の藪……………	三五五		

目次

漢方醫學餘談

新日本醫學の建設

一、緒言

日本がこんなに病人だらけでは、國民の活動は殆んど疾病と戦ふ事のみで費されてゐて、高遠な民族理想の實現などは、夢にも及ばぬ事である。プラトーンは云ふた——醫者と辯護士の榮ゆる社會は、腐敗した社會であると。まさに現下の日本に對する最適の評言である。

余は若き頃、これ等の百鬼晝行の社會を怒つて社會革命によつて、國家を革正せんとし、其青春の燃ゆる様な情熱をそれに注いで來たものだが——然し年齢が長じ思考が圓熟して來るに従ひ國家の紊亂と國民的悲劇の防止は、單なる社會制度の改革によつてのみ達成し得ざる事を知つた。余は深く考へ廣く見、社會革命の如き暴力行爲によつて、流血の犠牲を拂はずとも、他により賢明にして、より基礎的な手段方法があるのを知つて、それに身を投ずる事にした。——それは

日本の醫學の改革である。余が皇漢醫學——即ち日本在來の古醫學——の復興を提唱したのは、これ醫學廓正の第一烽火であつて、幸に余の微衷は諸人の胸に徹したと見え、皇漢醫學復興の機運は隨所に動いて來た。昨日まで野蠻醫學の惡名に埋れてゐた寶玉は、今や新日本再建の旭光に燦爛と輝き出した。——一管の筆の望外の反響、それは筆を劍とする者の非常な悦びであると共に、責任のいよいよ重大なるを感ぜぬわけには行かぬ。

素問と云ふ支那最古の醫經に書いてある。むかし黃帝が岐伯に向つて『政治の要道は何であるか』と問ふと、岐伯はこれに答へて『民をして病むなからしむるに在り』と云ふた。これは實に千古不滅の名言である。——政治の究極の理想は、要するに國民をして、無病平和にその生を樂しましむるにある。

然るに西洋流の誤れる肉食衛生學が入つて來て、日本國民の健康をめちゃくちゃにし、而してそれを救ふべき西洋醫學は、殆んど無爲無能の甚だしきもの、時に多くの害毒をすら流してゐる。この惡魔的醫學の犠牲となつて、國民が多病となり絶望時代が現出したのである。

一朝病魔の囚ふる處とならば如何とするか——實に病氣のために幾萬圓の財産を棒に振つた者

がどれ程有つたであらうか。——かくて萬一の場合と云ふ用意に、人を押しつけ、人を犠牲にして病氣に備へねばならぬ必要が造られたのである。拜金主義と物質萬能と、救ひなき病弱者の渾沌たる絶望と、まことに國內の紊亂するは當然である。——然るに學いまだ至らざりし余は、これ等の社會悲劇の發生をば、淺墓にも社會制度の不合理に歸してゐた。

多くの社會的悲劇は、單に今日の誤れる醫界を正道にかへすだけで、其大部分は達成し得るのであつて、これこそ眞に社會を救ふ道である。余はこの事に目覺めた。而して醫界の廓正に身を投じた。——實に余にとつては醫界の廓正は、余の政治運動であり、宗教運動であり、社會運動である。——所謂社會運動を冷眼しつゝ、胸中更に熱火の萬丈たるものがある。

二、東西醫學の融合

皇漢醫學の復興などを提唱するから、定めし白髮の老翁と思つて余の茅屋を訪ねて下さる方があるが、思ひ掛けない白面の一書生であるに驚かるゝ向もある。余は若く學と技とは淺からざるを得ぬが、道を興すの大念力と何物をも焼き盡さんとするの熱情は、詩人たるが故に胸に燃ゆる

焰であると自ら信ずる。然り余は焰となりて日本の醫界の罪業を焼き盡さむ。——醫となりて技術的に人を救ふの名手は、自ら余に従つて現はれ來れよ。余は焰となりて、諸君等の進み來るべき道を開かう。醫界廓正の大業は我等青年にして始めて企及し得る處と信じてゐる。

故に余の念願は、人を醫するの醫ではなく、國を醫するの醫たらん事である。余の使命は徹頭徹尾、臨床家となる事ではなくて、漠然たる指導者となる事である。鞭をあげて彼方を指し、或は荆棘を拓く。余は後より來る者をして坦々の道を歩ましめん事を望んでゐる。——さもあれ先驅者たるの痛苦は多大である。たゞ殉難の快味があればこそである。毀譽褒貶こもこも來るべし。たゞ余は超然と月光に照されし山の脊を踏む。

然りと雖も皇漢醫學その物を、時代錯誤なりと云ふ新思想よりは斷じて許さぬ。時代錯誤と未開はむしろ西洋醫學の上に贈るべく、却つて皇漢醫學は新しい事を斷言する。少くとも白頭翁の古き言葉と異り、新しきが上にも新しき余が、復興を提唱するのであるから、西洋醫學とは比較する事の出來ぬ、新生命に充ちてゐる事を覺つてもらひたいと思ふ。

申すまでもなく、東西醫學の長短は相補はねばならぬ。余は皇漢醫學を完全無缺なりと云はぬ。

それは誠に不完全なものである。然し西洋醫學と不完全の程度が異り、西洋醫學は實に幼稚極まるものである。然しその幼稚な西洋醫學に於ても、なほ皇漢醫學よりも優れてゐる點が四五點はある。——而して此等の不完全は互ひに補つて、より良く進歩した物になさねばならぬ。皇漢醫學と西洋醫學が握手結合したからとて、まだ完全な醫學にはならぬ。人間のやる仕事は永久に不完全である。たゞどれ程その不完全さが補はれて、完全に近くなるかといふ事が問題なのである。目標は申すまでもなく、新日本醫學の建設である。醫學には西洋だとか東洋だとか、そんな區別があるべきでない。お互ひに良い點を補ひあへば良いのである。——然るにもかゝらず、敢て強いて自ら皇漢醫學の復興などと稱するのは何故であるかと云へば、今日の一般人士は申すに及ばず、専門の醫家すらも皇漢醫學をば、時代遅れの未開醫學であるかの如く輕蔑して、その實際價值を振りかへつて見やうとはせぬからである。これでは東西醫學の融合だとか、採長補短など云ふ事が出来るものでない。

今日、皇漢醫學は四五の篤志家に維持されてゐるのみで殆んど全く亡びてゐると云つても差支がないのである。——それで東西二つの醫學の融合などは望むべくもないのである。——二者を

結合して一新醫學を創造するには、皇漢醫學それ自身が純粹の形で復興せねばならぬ。而して復興してお互ひに其優秀を比較し合つて、茲に始めて採長補短が出来るのである。ヘーゲル的な云ひ分ではないが、西洋醫學と皇漢醫學が争つて、第三の新醫學が出来るには、先づ皇漢醫學が復興して、西洋醫學の缺點を突かねばダメなのである。

余は實は皇漢醫學とか西洋醫學とか云ふ區別を用ひたくなく、日本醫學と云ふ名の下に新生命の新内容の醫學を創造したく思ふが、現代醫學が全く、西洋流その物であつて、日本的色彩が少しもないから、余は敢て之に皇漢醫學の名に於て挑戦せんとするのである。

三、自然放任論の誤謬

西洋醫學者は云ふ——『現代醫學は行き詰つてゐるのだから何等かの方向に局面を展開せねばならぬ。漢方が良ければ自然に漢方の長を採用して来る』と。余はこの言葉に對して微笑を以て『否』と答へねばならぬ。何となれば皇漢醫學は二個の原因によつて、其復興が阻止されてゐるからである。

その原因の一は皇漢醫學の禁令であり、其二は皇漢醫學を野蠻なりとする誤解（この誤解を反對に云へば西洋醫學を文明視する迷信となる）である。

今日の醫家が現代醫學と自ら唱へてゐる處のものは、全くドイツ醫學の直譯であるが、このドイツ醫學は優秀なるがために、日本の醫界を風靡するに至つたと思つたら、飛んでもない間違ひである。若し其様に考へてゐる者があつたら、全く社會事情を知らぬ者の云ふ事である。

皇漢醫學は、明治十七年の第三十五號布告を以て禁止されたので、西洋醫學をやらねば醫者になれぬ事になつたからである。西洋醫學と皇漢醫學とが生存競争をして、劣者が負けて優者が勝つたのではなく、低能無類の暴力的愚法律によつて、日本従來の醫學が禁止されたのである。

その結果として皇漢醫學が亡び、日本人の健康が脅威される事になり、國內が病人だらけになつたのである。故に目下の状況を自由に放任して置いて、皇漢醫學が復興する筈がないのである。日本の醫學の正當なる發達は、外國盲拜の愚法律によつて蹂躪されてゐるのである。——故に醫學を廓正するの第一歩は、この惡魔法令の撤廢であらねばならぬ。而してこの惡魔法令は自由放任によつて、如何にして撤廢し得るか。——實にこれ國民の健康權と治病權によつて、輿論と力

によつて撤廢するより外なき物である。

この惡魔法律を發布するに至つた張本人は、現樞密院顧問の石黒忠惠氏と故長谷川泰氏の二人である。——然もこの惡魔法令の張本人であり、日本國民の健康の剝奪者である石黒忠惠氏は、國家の元勳として燦爛としてゐる。咄。

更にドイツ醫學の輸入と云ふ社會現象を、社會學的眼光によつて検討するに、ドイツ醫學は世界第一の醫學であつたから、日本に輸入されたのではない。それは全く盲目的な、頼まれもしない買かぶりの崇拜からである。盲人がアバタ女に惚れた様なものだつたのだ。——日本はさきに醫學をオランダに學び、次にイギリスに轉じ、最後にドイツを師とするに至つたが、この轉學の理由は醫家自らも知らず、劣れる物よりヨリ優れた醫學に轉じたのだと思つてゐるが、飛んでもない觀察違ひである。

醫學の輸入は交際關係に基くものである。始め幕府はオランダと通商をしてゐたので、オランダ醫學が輸入されたが、王政維新となり薩長が天下を取ると醫學の輸入先も自ら變つて來た。薩摩は舊幕時代にイギリスの後援を得て幕府に對抗したもので、従つて醫學もイギリス流であり、

海軍が先年までイギリス流であつたのは此關係である。長州は始めフランスの兵制を採用し、従つて醫學もフランス流であつたが、たまたま普佛戰爭が起きてドイツが大勝したので、俄かに兵制もドイツを見習ふ事になり、模倣の勢力はフランス醫學よりも遙かに劣等なるドイツ醫學をも偶像的に尊敬して輸入したのである。そして其劣等醫學をば日本に強制したのだからタマらぬ。ドイツは六百年前までは『森の野蠻人』である。文化經驗の淺い國である。そんな國に優等な醫學があつてたまるか。——現に論より證據に、ドイツ人自身が自國の醫學を優等だとも何とも思つてゐない。そして日本人が何故に自國へ留學にやつて來るのか不思議がつて笑ひ、またドイツ人自身は東洋の古醫學を崇拜して、本草綱本の如きは之をドイツ語に譯して王立圖書館に藏して、新藥や賣藥の種本としてゐるではないか。——實に日本はドイツから頼まれもしないのに、好きこのんで根據のないドイツの盲目的崇拜に自ら陥入つて行つたのである。

日本の醫家よ、余がドイツ醫學を罵倒するのを見て、自己が侮辱されし如く感ずる轉倒的錯覺はやめよ。余は科學的基礎に立ちて、祖國の醫學の偉大性を立證せんとしてゐる者、即ち日本人をして光輝あらしめんとしてゐるので、卿等の如き無反省に祖國を輕蔑して自己を賢明に見せん

などと云ふサモしき根性ではない。余は日本の過去の天才の業績を發揚して、日本文明の獨立を叫ばんとするのである。ドイツ奴隸醫學より、日本の祖宗の大業を解放せんとする使徒である。これ等の難業は、自由放任によつて成就し得るであらうか。否大なる勇氣と、大なる研究と大なる戦が入用である。——國家の病的現象を救ふには、醫界を廓正して醫界をして正道に復らしめ、以て國家の細胞たる國民の疾患を治し、よつてもつて一大生體たる國家社會を救はねばならぬ。國民の膏血を吸ひとる寄生蟲的醫學を撲滅するには、自ら偉大なる驅蟲劑を必要とする。余はその驅蟲劑たらんとして立つてゐるのである。

自由放任主義は無政府主義の原理である。——國家を救ふには賢明なる干涉主義——哲人專政的な力を要求する。余は日本のために力をもつて、日本の古醫學を禁止せし、かの惡魔法を撤去する賢人政治家の出現と、その出現を産むべき時代的空氣を作るために働いてゐるのである。

皇漢醫學の復興を阻止してゐる第二の要素は、皇漢醫學を未開醫學なりとし、現代醫學を科學的なりと迷信してゐる事である。現代醫學は科學の假面をこそかぶれ、決して科學的ではない。科學の名の下に、多くの非科學的事實が行はれてゐる。

例へて云ふならば、皇漢醫學の立場から見ると、容易に服藥や鍼灸で治し得るところの、盲腸炎や骨髓炎や膽石病や子宮後屈癒著などを手術して切開したり、或は瘰癧に指を切斷したり、脱疽に手足を切斷して不具者を作つたりしてゐる。

只さへ尿の排出の困難な腎臟病に、水分過多の牛乳をのませて利水を計つたり、胃酸過多を治すに人體を試験管と心得て重曹をもつて行つたり、睪丸炎を冷却して見たり、實に滑稽なほど『科學的？』面目を發揮してゐるのである。

皇漢醫學が草根木皮を使用するから未開だ、その純分を抽出して使ふ西洋醫學が文明的であると云ふ見解は、これまた素人的な意見である。諸君等は藥學者や化學者の意見を聞くがよい、彼等は皆異口同音に、草根木皮の有効成分は抽出できぬと云つてゐる。例へて云へばキナ皮はマラリヤに有効だが、キニネーになれば効果が少くて胃を悪くしてダメだ。吐根もエメチンを純粹にすればする程効果が少い事は知れてゐる。ヂウレチンの如き強力なる利尿劑が、純粹な有効成分となるほど、全く無効のものとなる事がある。

草根木皮の中から有効成分を抽出し得ると考へたのは、化學の夢であつたと云ふ事が、今や漸

く分りかけて来た。そして世界の醫學界は今や反對に昔の生藥主義に復歸せんとしてゐる。その第一歩として既にデキトキシシンがチガレンとなり、モルヒネはパントボンとなり復合主義が起りかけ、更にそれは一層進んで生藥主義に復歸せんとし、アメリカでは支那から醫者を招いて研究し出した。

人間は自然の約束から出れぬものである。生藥（草根木皮）から純分は取れぬと云ふ事が分つた。藥學上の化學主義は幻滅に終つた。——ところで此幻滅がある以上は、早く純分主義を棄て、本來の草根木皮にかへる方が、科學者としてのヨリ眞實の立場ではないか。

然るに皇漢醫學は草根木皮の故に、野蠻の惡名を蒙つてゐる。これを自由放任して置いて、如何にして一人立ちが出来るやうになるであらうか。——近來は余の論文がたまなく醫家の注目する處となり、やつと草根木皮を笑ふ習慣が破られ掛けたばかりではないか。

皇漢醫が奮起して、愚法律を破るためには、自ら西洋醫の治せぬ難病を、論より證據に治して見せねばダメである。そして皇漢醫方の偉大さを社會に知らせ、西洋醫學崇拜の迷信を打破せねばならぬ。——これを黙つて自由放任して置いて、何時になつたら皇漢醫道が復興し、西洋醫家

が皇漢醫學に頭を向けるであらうか。我々の處へ博士の肩書を持つ人達が教を乞ひに来るのも、論より證據に皇漢醫學の偉大を實證してゐるからではないか。我々は正義のため、同胞のために戦はねばならぬ。

四、醫學は地理的特質に従ふ

最後に醫學の如き純粹の學術上の事柄に於てまで、日本主義と云ふものを振りまはすのは、西洋崇拜の人達が思つてゐるやうな、神風連的な舊思想からでなくて、却つて余が科學的新人であるからである事を確實に説述して置く。余は反動思想家ではなく、新進歩的思想家なるが故に、醫學上の日本主義を鼓吹するので、これには科學的な根據があるのである。

西洋崇拜家の根本的迷信は、學術に國境がないと云ふ事である。——この迷信を打破するため、余は學術に國境がある事の主張から出發してゐる。西洋の學問が日本に其儘に持つて來られぬ理由がある。

疾病と云ふものは元來、一個の生物學的現象であつて、氣候風土の異なるに従つて、その態型を

異にするものなのである。醫學も亦この一個の生物學的現象を取扱ふ學問で、氣候風土と人種の體質が異なるに従つて自ら異らざるを得ぬのである。

地球の上は千差萬別で、甲所ではAなる病菌が繁榮し、Bなる病菌の繁殖し難い事情があり、乙所では反對にA菌の繁殖を困難にし、B菌の猛威を逞うする條件を具備してゐる處がある。

日本と西洋とは同じ北半球の温帶國であるから、氣候も定めし同じだらうと思つたら、飛んでもない間違ひだ。小生は本來の專攻が地理環境學であつたがために、西洋と日本の氣候が正反對である事を發見した。この論據から醫學界の改革の足場を得たのである。

西洋は冬が雨期で夏が乾期だ。——之に反し日本は冬が乾期で、夏が雨期だ。——それで概然的に云ふならば西洋は夏期の温度の高い時に、病菌の發生を盛ならしむる温度を缺いてゐるから健康地で、日本は高温と多濕とが相ひまつて、病菌發育に非常な好條件を與へてゐる。——かくて西洋と日本とは疾病の型が異つてゐる。

それにまた人種の體質が異つてゐる。ドイツではチブスにかかると微温湯浴を行はしめるが、日本人にそんな事をしたら、直ぐに悪化して死んでしまふ。ドイツに留學してゐる者は始めは此

方法で失敗したので、近頃はドイツでは日本人には此療法をやらぬと云ふ話だ。西洋人は重質大黃を用ひても差支がないが、日本人が之を使用する時は腹痛を伴つて使用できず、アンチヘブリン、ペロナール等の極量が日本人と西洋人と著しく異つてゐる。脚氣の如き現に西洋になく日本にだけあり、インフルエンザは日本では軽く、西洋では重い。

これ等の地理事情が、學問に國境をちやんと置いてゐるのである。日本は地理學的に見て、頗る西洋と異つて居る。日本に於ける必要な醫學は、西洋のものを其儘に持つて來たのではダメである。日本に必要な醫學は、日本と云ふ土地に於て我等日本人の手によつて、日本人の體質に基礎を置いて、我々で作るより外はないのである。直譯では通用せぬのである。此點に就てシーボルトは流石に偉かつた。彼はアジアの病はアジアの醫學でなければ治らぬと云ふたのである。

余は感情的に日本主義を振りまはすのではない。學問的な根據があつて、ドイツ醫學はドイツでは良いかも知れぬが、少くとも日本と云ふ土地では無効に近いと云ふ事を證明して主張するのである。ドイツ醫學崇拜の迷信が日本人をこんなに病弱にしたから、余はドイツ醫學から同胞を救済するために奮起したのである。

我々は日本人に必要な醫學を之から建設せねばならぬ。之には誰も異論はあるまい。——而してそれには日本古來の皇漢醫方を復興せねばならぬのである。そして西洋醫學の長所を之に加味して、新しい日本醫學を創造するのである。

之がためには先づ、皇漢醫學が、如何に偉大な文明的な醫學であるかと云ふ事を、十分に知らねばならぬが、此事は後論に於て、實驗を基礎として述べる事にする。皇漢醫方に對する盲目的批評は、止めてもらひたいと思ふ。

〔祖國〕昭和四年九月號

漢方難病治療談

一、緒言

余は前論に於て、日本が今日の如く病弱者をもつて充滿したのは、現代醫學の欠陥に起因するもので、現代醫學の欠陥は、それが日本醫學ではなくて、全くドイツ醫學の直譯に外ならぬ事——即ちそれは日本の風土的特質に立脚せず、日本人の體質に適合せぬ事を指摘した。而して余は更に進んで、日本人の疾病を救ふには、眞の日本醫學を創造せねばならぬのであり、それには東西醫學の長所を綜合して、一の新醫學を建設せねばならぬ譯であるが、それがためには先づ明治十七年の惡魔法令によつて禁止された、皇漢醫學を復興する事が急務である旨を理論的に説述して置いた。

醫學は理論の學であると同時に實際の學である。——否徹頭徹尾實際の學である。——凡そ理

論てふものは實際によつて裏書きされるに非ざれば、どこに理論の價值があるか。理論と云ふものは實際から派生したもので、實際あつての理論で、理論あつての實際ではない。この道理を今日の西洋醫家は忘れてゐる傾きはないであらうか。

理論だけが整然としてゐて、實際が無効であれば何にもならぬ。西洋醫學はなるほど理屈は一應は通つてゐる様に見える、然し實際は諸君の知つて居らるゝ通りである。これは其理論らしく見る處の理論は、實は理論其物ではなくて、理論の假面をかぶれる物に外ならぬのである。——理論と實際は盾の両面の如きものであらねばならぬ。理論が正しければ、必ず實際にも當てはまる可きである。理論が良いが實際はダメだと云ふ理論が世にあるものか。理論と實際とが喰ひ違ふならば、理論の方を訂正せねばならぬのである。西洋醫學の理論と云ふものは、實は此様にいゝ加減なもので、實際を無視する處に突飛な天才がある。

漢方は理論はなつて居らぬが、實際に良く効くとはよく耳にする事である。之も變な言葉であると云はねばならぬ。理論と實際は同一物の二面だから、實際に効くと云ふ事は、自然に理論に合してゐるのでなくて何であらうか。問題は漢方醫學者の理論の組立てが下手だからである。換

言すれば西洋醫學には事實を無視した空論が行はれ、漢方には事實を證明する學的基礎を欠いてゐる。

學術は事實が基本であるから、漢方が臨床的に偉大であると云ふ事實から出發すれば良い。而して其事實を説明するに際しては、西洋醫學のやうに雄辯にならねばならぬ。これが來るべき新日本醫學の立場である。余は漢方復興必要の理論的根據は、前論によつて述べたから、本論に於ては余は、如何に皇漢醫學が臨床的に偉大なものであるかを、實地の上から『論より證據』に説明せねばならぬ。

皇漢醫學の復興を提唱してから、余の茅屋へ西洋醫學で見離された難病患者が、毎日のやうに治療を乞ひに來るが、如何にそれ等の所謂難病患者の多くが、皇漢醫方によつて手輕に治るかと思ふ事を見ては、今更に西洋醫學の無能を痛感し、醫界廓正の急務を感じぬ譯にはゆかぬ。

余の研究所の診療日誌は、あだかも醫界の閻魔帳のやうである。來る患者はいづれも東京の三四の代表病院を歴訪して見離されたか、或は長い間かゝつてゐて、更に醫効を認める事が出來なかつた難病患者のみである。——それ等の難病患者が、甲の病院では斯く診斷し、斯く治療し、

乙の病院では斯く診断し斯く治療し、甲博士は斯く云ひ、乙院長はかく断じたと云ふ事を余に語る。余はそれ等の病歴を余の閻魔帳に誌してある。その閻魔帳は如何に甲醫と乙醫の診断が異なるか——而して診断ばかり、(ばかりの三字意味深長!)を喧ましく云ふ洋醫の診断が、矛盾を極めてゐるか、また其治療の経過が如何に有るかと云ふ事を知る、とても興味深い内幕記で、余は必要に應じて此等の一切を白晝の光の下に公開し、國民に訴ふる決心をもつてゐる。

余は戦ふのである。正義のために日本國民の保健のために、日本醫學の獨立建設のために戦ふのである。——故に余が語る業績を嫉視する前に、醫家は自らの良心に問ふて、眞に患者の病苦を救はんとするならば、翻然と似而非醫學より醒めて、余と共に皇漢醫學の復興を計り、やがては新日本醫學を建設する一本の柱となるが良からう。

さて之から閻魔帳から、興味ある治病の數個をぬきつゝ、皇漢醫學の偉効の一端を示さう。——たゞ省みて自ら悲しみに耐へぬ一事がある。それは皇漢醫學の偉効を示すと豪語する余自身が、餘りに淺學非才で且つ弱輩たる事である。皇漢醫學が例の惡魔法令によつて禁止さへされて居らなかつたならば、恐らく余の如きは古名醫の玄關子にも及ばぬ手腕であるに相違ない。——余は

此事を十分に自ら知つてゐる。然も玄關子的手腕を以て、なほ且つ博士や病院の如何ともする能はぬ難症(と稱するもの)をば、どしどし治してゐると云ふ事は、餘りと云へば醫道の墮落の甚だしきを證明するものではないか。

玄關子的にも及ばぬ余が、かく大言壯語し得るのも、烏なき里であればこそである。博士雲の如く、然も余は之を指して烏なき里と云ふ。餘りと云へば悲しい時世ではないか。眞の皇漢醫學は余の示し得る如き微力なものではない。余の如き企及し得ざる妙所があるものである。然も此玄關子的淺學と、蝙蝠的微力を以て、なほかく謙遜の辭を棄て、あだかも厚顔無恥なる如く、強いて勇氣を振ひ起して余の研究所に於てあげた成績を誇りがに説述せねばならぬのは、百年の惡名を覺悟して、醫界の人達に覺醒の刺戟を與へねばならぬ使命を痛感してゐる。

同胞の呻吟する聲は、巷から工場から家庭から、余の胸にひしひしと迫つて來る。朝夕にひもどく新聞を見よ、その活字の間から同胞の鮮血がポタリポタリと落ち、苦惱の聲がにじみ聞えて來るではないか。あゝ東洋の偽君子國よ。百鬼晝行の地獄よ。余は炎々の公憤に燃えて、一騎正義の大戦にのぼらんとするが、長鞭馬腹に及ばざるの數がある。——あゝ余の如き微力と淺學と

を以て、醫界の廓正のために働かねばならぬ間は、日本は遂に闇である。

余は同胞のために祈るのである。——願はくば一日も早く、余の如き戦士の不用なる時代よ來れと。余は日本を愛するが故に悲しみ、悲しむ故に怒り、怒るが故に戦ふのである。涙の戦であり、怒りの戦ひである。不動經に曰く『大悲徳の故に青黒形を現じ、大定徳の故に金剛石に座し大智慧の故に大火陷を現じ、大智の劍を執つて貪瞋癡を害し、三昧素を持して難伏者を縛す』とまさに余の朝な朝な靈前に座しての祈りである。

二、胃腸難病の治例

病氣の中で最も多いのは、何と云つても胃腸病であらう。癌腫となれば不治であるが、其他の胃腸病は漢方に於て最も容易なる物の一である。余の著書や論文や講演が主たる動機となつて、漢方熱が起りかけて來たのは、余の望外の光榮とする處であるが、同時に漢方醫を養成したり、漢方を近代醫學的に書きかへたりする仕事までが、余の小さな肩に乗せられてしまつた。どうかして余は漢方の醫學校を建てるなり、或は余の研究所を一段と充實整頓させるなりして、西洋か

ら留學生でも招き寄せて、漢方を未開視してゐる同胞の夢をさましてやりたく思つてゐるが、何分にも余は貧書生で困る。——(西洋人を漢方研究に招き寄せるなどは、良い研究をエスベラントか何かで、どしどし發表すれば出来る事と思ふ)。

正義の戦にも金がある。心臓ばかり火のやうに燃えてゐるだけではダメである。やはり軍資金が必要である。それで余は一方この資金を得る必要と、他方に於て漢藥の偉力を世に示し、漢方復興熱を早めやうと思つて、余は學研の書齋を出で、街頭に立つ事にし、その第一番に、漢方の胃腸藥を賣出す事に定めたが、此一藥だけでも如何に甚大な効果を治め得たか、其二三の例を話さう。

西洋醫學では消化不良にはヂアスターゼやペプシネを、胃酸過多には重曹をもつて行くが、之がそもその非學術的な間違ひである。人體は試験管でないから、試験管の化學現象から演繹した假説治療ではイカぬ。消化不良や胃酸過多は結果だから、それ等を引き起す原因を治療せねばならぬのである。胃酸過多に重曹などは以ての外だ。なるほど酸にアルカリを持て行けば、試験管的現象として一時は中和をする。然し過剰の重曹が如何に胃腸を害するか、西洋醫家は知つて

居らぬ。パンをふかしたり、豆を早く柔かに煮たりする時に重曹を入れる事は人も承知してゐる處で、重曹は組織を膨張させる性状をもつてゐる。胃腸病者が重曹劑を連用すると、必ず胃腸の組織が膨張弛緩する。胃腸の無力性アトニーは全く重曹の罪だ。——之に反し漢方は人體を試験的に見ない。試験管主義的の理屈は素人を欺く事が出来るかも知れぬが、實地の結果から理論を再吟味しやうと云ふ批判學徒には直ぐに正體を暴露する。

陸軍主計官の戸枝安太郎氏は二十年前、臺灣勤務の折、マラリヤにかゝつたが元で、爾來非常な胃腸の障害にかゝり、二十年間に天下の有名な病院や博士を歴訪して如何ともする事が出来なかつたが、最後に余の事を知つて來られ、二ヶ月の中にさしもの難症が治つて再生の恩を謝され、余のために從來かゝりし醫師病院の大部分や治療の經過を書いて紀念に贈られた。氏の報告書にある醫師の名だけでも十四名に達する。

東京日々新聞の元老係りの記者として知名な櫻井徹三氏は、胃腸の無力性アトニーとでも命名すべき難症にかゝり、親族の醫師すら匙をなげてしまつた。氏は余と共に勝海舟全集の編纂委員たる關係から知つて居り、迎へられて絶望の床に臨んだ。余は笑つてナンダこんな病かと、同藥

を投じ、一ヶ月後に床を擧げて活動するに至り、再生紀念として氏は余に秘藏の淺田宗伯先生の幅を贈られた。

千葉縣の小出醫師は余の『漢方醫學の新研究』を読んで漢方の偉大を知り、漢方入門を志してゐたが、たまたま氏に重症の胃腸瘍の患者があり、余は研究中であつた胃腸藥（即ち中山胃腸藥）を試みに贈ると、さしもの患者が驚くほどの短時日の中に治つたとて、今更の様に漢方に感心し、遂に自己の醫院を閉塞して専念に漢方研究に上京された。余は氏の大成を待ち、良い知己を得たと悦んでゐる。余の胃腸藥で胃腸瘍が治つた活例は十數あるが、中にも宮崎縣都城の野邊醫師は自身の胃腸瘍が之で治つたと云ふて、患者に對して之をすゝめて居られるが、此精神も見上げたものである。山口縣の正田政人醫學博士は余に手紙をよせて『先達の胃腸藥を早速實驗せし處、重曹、ヂアスターゼ等の藥の比に非ず、其効力には驚嘆いたし候、到底西洋醫術の追隨を許さざる長所ある者と存候』と云はれた。

馬場少將は某病院で十二指腸瘍と斷定され、林近衛師團長から余の事を聞いて來られたが、余は粥などを食せしめず、普通食をとらしめつゝ胃腸藥一罐で全治せしめた。此價二圓である。

それにつけても思ふが、西洋醫學による實費診療と漢方による治療とは、何れが患者にとつて福音であらうかと云ふ事である。

貴族院議員の南弘氏の夫人は長年、胃瘵瘵が持病で困つて居られたが、余の薬で胃瘵瘵が全く注射をせずに治まり、服薬を二週間つゞけてゐる間に、さしもの難疾がすっかり治つて、全く健康に復し、南弘氏は今年の正月、臺灣へ視察に行かれて御馳走攻めが祟つて、歸路船中で猛烈な胃腸カタルにかゝり、オモ湯しかとれなかつたが、歸宅して余の胃腸薬を二回のみで、直ぐに普通食をとる事が出来たと大悦びであり、日本新聞主筆、若宮卯之助氏も本薬の偉効を處々に宣傳して下さつてゐる。

この胃腸薬に就て一の珍談がある。齒科醫專の校長の中原市五郎氏は三十年來の胃腸の醗酵症で、友人の博士や何かに相談されても如何ともする事が出来なかつたのが、余の薬を飲んだ日から醗酵が止つたと悦ばれたが、余は此薬を賣薬とするに當つて、有力な人達の實驗例を記載したので承諾を乞ひに行くと、氏は『あれは胃酸過多には効かぬね』と云ふ話。余は變に思つてドウしてと尋ねると、氏の令嬢が支那大使の石置氏の令息の處へ嫁いで居られるが、それが腸結核

だと云ふので、夫君の親族のある醫學博士のすゝめで、某胃腸病院へ入院してゐるが、どうも経過が良くない、命も長い事はあるまいとの話で、その令嬢が酸っぱい水を吐くので、どうも胃酸過多も併發してゐるらしく、私の胃の薬をのませるが効かぬと云ふのである。——余は黙つてそれを聞き、更に細かに病人の様子を聞くと、食物に偏寄があり、嘔吐發熱胃痛を伴ひ、鹽鮭を食ふと治まると云ふのである。——そこで余は微笑して失禮ですが、それは胃酸過多でも腸結核でもない、必ず蛔蟲のセイだと斷定したが、果して余の直覺通りであり、病院も治療を改めたが依然として危険状態を脱せぬ。そこで氏は意を決して退院せしめて余を迎へられた。余は中原家の昔からの主治醫たる某博士と相談の結果、余にまかざるゝ事となり、余は即日解熱させ、二日目には食欲をつけさせ、十日目には床から起さしめた。死期二ヶ月かと醫師から危まれた人も、かくて全くの健康人になつてしまつた。

胃癌は治らぬと定つてをり、今世の名残りに漢方醫の手にかゝつて死にたいと云ふ希望で來られる方もあるが、これのみは如何ともする事が出来ぬ。たゞ食道癌と稱するものを一つ治した例がある。徳島縣勝浦郡の富永倫平氏が來られて母堂が大阪の醫大で噴門癌の斷定を下され如何と

も出来ぬが、薬をくれぬかとの話。余は患者を見ないで薬を投ずる事は出来ぬと断つたが、座つて動かす懇願されるので、利隔湯の處方をお教へして、こゝろみに此薬を自分で調合してのんで見て下さいと云ふたが、四ヶ月後の忘れた時分に氏が禮に來られて母がすつかり治り、徳島の古川博士は母堂を見て、今頃は死なれたと思つてゐたのに、コンナ例は一萬人に一人もあるまいと云はれたと舌を巻かれたと云ふ。余も實にうれしく思つた。

三、膽石病の治例

商學士、石原宇宙治氏は麴町の某病院で膽石病と云はれ、疼痛のため毎日注射をして骨と皮となり、手術も體の衰弱が甚だしいため出来ず、如何とも手の下しやうのなかつた患者であるが、余の所を聞いて訪ねて來られ、灸をすえると即座に疼痛がなくなり、今までにない樂になつたと云はれた。引續き自宅で灸を命じ、良根湯を用ひて行つたが十日ほど經過すると再び疼痛が起り、驚いて余の處へ來られた。余は膽石が排出するのであらうから糞をしらべて下さいと云ふたが、果して糞中に赤小豆大の膽石を見出し、爾後服藥と灸療二ヶ月で全快して再發しない。

日本齒科醫專の教授、稻見角次郎氏は昨年八月〇〇院の膽石病の名手として知られてゐる〇〇博士の手術によつて膽石を取り出したが、本年四月に入つて再發し、病院では此上は膽囊を除去せねばならぬと云つた。膽囊を除去するとは極めて妙案で、脱疽に手足を切斷すると好一對の笑話である。全くこれ以上の科學的！な方法はない筈である。氏はいよいよ再手術と決意し、中原校長の許に暇乞ひに行かれると、校長は先づ中山に相談せよと云ふので、入院する自働車で、余の家を訪ねられた。氏の尿には胆汁がまぢつて黒ビールの如く、悲惨な病狀であつた。毎日痛み通しの痛みが、余の所で灸をすえると直ぐに止り、解勞散に特殊な加味をして與へたが、五月五日には學校の遠足で箱根に行くこと云ふ元氣になつた。同月九日になると余の豫想通り猛烈な發作に迫はれ近所の醫者に注射してもらつたが、翌朝車で余の處へ來られた。余はいよいよ膽石が出来ますねと笑つたが、果して翌朝氏が持參されたのを見るとソラ豆大であつて、こんな大きなのが出たかと驚いた。爾後二ヶ月、灸と服藥をつゞけて全治し、今夏は東北大學に研究に出掛けられ、此暑さにも負けなかつたと大悦びであつた。

四、脱疽の治例

名優、澤村田之助は脱疽になつて、両手も両足も切断してしまい、胴だけになつて悲惨な死を遂げた事は有名な話であるが、西洋醫學では脱疽も難治の一つであつて、手や足を大根を切る如く心得て切断して不具者を製造し、文明開化を誇つてゐる。然し漢方と云ふ野蠻醫學にあつては、脱疽は極めて簡單なものである。

小田原の區裁判所の岸○信○氏は、昨年十一月上旬から脱疽にかゝり、東京の○○○病院で○○○博士の手術を受けたが、更によくならず、晝夜疼痛が甚だしくて眠る事が出来ず、ために身心が極度に疲労し居り、夜は足をかゝへたまゝ泣きあかしてゐた有様であつたが、七月二十七日に余の研究所に來られたが、足の骨が現はれてゐる氣の毒な有様であつた。それに紫雲と云ふ脱疽の膏藥をはると同時に痛みが取れてしまひ、歸路小田原急行に乗り、電車にのると同時に熟睡してしまひ、終點に著いて起されるまで知らざりしと云ふ、十一月以來始めての眠りであつたと、次に來られた時禮を云はれた。最近は過半は良く、此分ならば今年一ぱいの服藥で治するであらう。

余の研究所で取扱つた患者の中で、最も悲惨なのは茨城縣の大西某氏で、氏は大正七年に高木兼寛男の執刀で左足を切断し、大正十五年七月には同じく同男によつて右足を切断したが、本年に入つて右手の食指が脱疽状を呈して來て、また切断の外なきに至つた。五月二十一日が初診であつたが、同月二十五日で服藥五日目に早くも盗汗がなくなり、七月に入つて脱疽状が除去し、益々輕快して行つた。この外に脱疽の治療例は澤山にあり、漢方の偉効に驚かれてゐる。

五、腎臟病と盲腸炎と糖尿病の治例

腎臟炎は急性と慢性とにかゝはらず、西洋醫學では難治である事は誰でも知つてゐる。腎臟炎の症狀として最も明白なるは、尿中の蛋白質と外部症狀としては浮腫である。故に之を療するに身體より水液を驅逐して、尿中の蛋白質を消滅せしむるのであるが、西洋醫學では、全く非學術的な事をやつてゐる。それは藥劑療法よりも牛乳療法を專一とするので、患者の男女に拘らず一日七合から一升の牛乳を飲ませて、以て尿の排出を計り水腫を減退せしめんとするので、然も尿利が悪く水腫が甚だしくなる時は、劇烈なる下劑を投じて一日十數回から二十回も水瀉せしめて、

水腫を一時的に驅除せんとするのである。然し之は全く姑息的な治療で、また直ぐに浮腫を起さぬ譯にはゆかぬのである。腎臓炎は水腫の病である。それに更に水分の多い牛乳を與へるとは、頗る理屈にかなはぬ事で、西洋醫學の理づめにも似合はぬ事である。これ恰も排水の悪い溝に大雨が降る様なもので、理論的に見ても腎臓炎に對する西洋療法は間違つてゐる。

警視廳の防疫醫である北原氏が急性腎臓炎になり、友人の醫者達が手をつくしたが悪くなる一方、藥をのめば更に胸が苦しくなり。小便は一週間あまりも出ず、いよいよ絶望といふ事になり、親族の方々が床頭につめかけてゐると云ふ有様であつた。容體は時と共に悪くなつて行く中に、其お醫者さんはフト私が警察で食物養生の講演をしてゐた時に傍聴に行つてゐて、私が腎臓炎などは漢方ではワケもない病氣だと云ふた事を思ひ出して、直ぐに警察に電話をかけて警官を迎へによこしたのである。それで私も驚いて飛んで行くと、實にヒドイ有様で、聞くと五年ほど前に之より少し輕いのをやり、方法が盡きて鍼醫に助けてもらつた事があり、今度のは再發であるから一段と猛烈なのであると云ふ事であつた。體は手足ともに樽のやうに腫れあがり、目は腫れて閉ぢて居り、鼻からは鼻水が尿の代りに雨雫が落ちる様にぼたぼた落ち、呼吸困難が非常で喘息

の發作みたいであつた。之は私の見た患者の中で一番にヒドイ物であつた。私はとりあへず應急の手當として灸をすえ枇杷治療をすると、僅かに二三分の間に鼻汁の出が少くなり、呼吸も樂になつて話がどうにか出来るやうになつた。それから直ぐに此腎臓炎の妙藥を調査してのますると、翌日から排尿し始め、第二日目から非常に尿利が良くなり、一週間目からは病狀もぬぐつた如くなり、二週間たつか経たぬ中に出勤が出来るやうになつた。お逢ひすれば何時も再生の恩人だと御禮を云はれ、現に警視廳にお勤めである。私は此藥も賣藥の許可をとつてあり、漢方の偉効を世に示す一手段として賣る事に定めてゐる。

津市の館醫學博士は十數年來の慢性腎臓病で如何とも治方がなかつたのであるが、余に手紙をもつて治療の相談を乞はれたので、余は快諾して北原醫師を治したと同じ處方をお教へしたのであつたが、之を連用すること半ヶ月に及んで蛋白は殆んど無くなり、一ヶ月にして全治してしまつたので、上京の際はわざわざ禮に寄られた程で、氏は之より漢方の研究に心をむけ、現に盲腸炎の如きは漢方でやれば、全く手術が不用であつて、且つ治りも更に早いと驚いて居られる。余等の説の良い裏書人として悦んでゐる次第である。

それにしても思ひ出すのは寺内伯の令息などの病氣である。悪性の盲腸炎で手術をしても、手術をしても悪くなり、遂に悲惨な最後をとげ、美しい細君が夫君の後を追ふと云ふ悲劇を見るに至つたが、あれなども漢方でやれば譯はなかつたのだと思ふ。最近某宮殿下が盲腸炎の御手術を遊ばされたが、幸に経過が御良好で愁眉を開いた譯であるが、何故に余等の叫びが雲上に達せぬのであらうか。浅田宗伯先生は西洋醫家の如何ともする事が出来なかつた、大正天皇陛下の御幼時の御惱を治し奉つた事は、良く人の知つてゐる處である。余は早く漢方禁止の悪法が撤廢さるゝと共に、皇漢醫が宮中に入る事を希はぬ譯にはゆかぬ。——(侍醫として誰が適當であるかは御下問を待つて奉答を申す決心である。)

寺内伯の盲腸炎ほどの程度であつたか見ぬ以上は分らぬ譯であるが、それに似た程度と思はれるほどの、悪性の盲腸炎の治例を余は持つてゐる。急性盲腸炎は容易であり簡單であるから治例をあぐるにも當らぬ事である。東京市外杉並町の小林氏は東京の有名な〇〇病院で某博士の執刀で盲腸の手術をしたのであつたが、其結果が良くなり、盲腸部を中心に上下にわたつて長い硬い硬結があり、痛くて歩けなかつたものである。余の研究所に來られたのが本年七月十八日で、二

十三日には早くも硬結が少し小さくなり、ガスの發生がなくなつた。二十七日には夢をみなくなつたと云はれ、八月五日には餘り工合がよいので一里半も歩いて見たが、別に腫れも痛みもしなかつたと報告し、八月十日には痛みが殆んど無くなつてしまつた。九月六日に横須賀に行き親族の軍醫部長の内田軍醫が、氏を見るたびに再手術をすゝめてゐたのであるが、今度も氏を見てコレは良くなつてゐる、手術の必要は全くないと舌を巻いたと云ふ事である。九月二十三日には硬結は全くなつてしまつた。

西洋醫學では糖尿病の妙薬はインシュリンで、同薬の發見でノーベル賞金がもらへたので有名な話であるが、インシュリンの如きは我皇漢醫學の前では兒戯に等しいものである。それは實効が證明してゐる。インシュリンは血液の検査をやつてばかり居らねばならぬもので、その効果に就ては早くも無効に近いとの風評が出た程で、ノーベル賞が泣いて居るであらう。

麴町區の長谷川氏は五年前からの難症で、種々の病院を歴訪したが如何ともする事が出来ず、余の研究所へ來る前には軍醫學校でレントゲン治療を受けて居り、糖は百分の一を算したものである。糖尿病にX光線をかける様な滑稽では、帝國軍人の生命をあづかる軍醫を教育する資格だ

にないではないか。流石に漢方を禁止した張本の石黒忠恵閣下の門下に恥ぢぬものがある。余の研究所へ来たのが五月二十三日、灸に薬を併用し六月十四日には糖は皆無となり、八月に至つて服薬の必要がなくなつた。

北京の中日鑛前の社長白井氏も大正十三年以來の糖尿病で、前例と共に極症の一つであつたが、インシュリンの注射を何度やつてもダメであり、日本に治療に歸り、余の事を聞いてやつて來られたのが六月十四日で、七月二十六日に衛生試験所で檢糖の結果、余の處へ來る前は百分の一ありしものが千分の一に減じ、灸と服薬をつゞける事短時日で全治して、また渡支された。

六、心臓病とバセトー氏病の治例

肥大した心臓は再び縮少できぬとは、西洋醫學の通り相場で、之を縮少できると云へば西洋醫はきまつて嘘だと云ふ。余は嘘は云はぬ、澤山の治例をもつてゐる。心臓瓣膜閉塞不全でさへ、軽度のもは心臓を縮少する事によつて、一生涯役に立つ程に輕快せしめ得るものである。

杉並町の服部氏は大酒が禍して狭心症にかゝり、諸醫を歴訪して如何ともする事が出來ず、本

人も動脈硬化や狭心症は治せぬと諦め、フランス製のアルテロヂエンとか云ふ高價薬を飲んでゐるが、一向に効がないので胸を押へながら余の研究所へ來た。余の研究所では急を救ふために瀉血をなし、灸を補助として薬を主として治療を行つたが、此難症は百日に至つて灸を中止し、百四十日に至つて全快して薬も中止した。而して余の禁止もきかず、また酒をやり出したが、余は再發しても薬を與へずと云へど、薬をくれねば無理にもらつて見やうと大笑ひである。

甲府市の齋藤氏は中風が起きる前の血壓過多で、頭がグラグラして杖なしでは歩けなかつたが灸と薬とで半ヶ月目に杖なしで歩ける様になつた。こんな例はザラにある。——余の研究所に來て灸をおろしてもらふ人は、毎日通ふのでなく、灸をおろした日に歸つてよいので、それから自宅で自己治療をするのである。通はせる患者は、五十人に一人位の割合であらう。

この心臓を縮少させる薬で、バセトー氏病が治るのである。新潟縣の阿部といふ十八歳の少女が同病にかゝり、呼吸がつまる如く感じ、東京の大病院を歴訪したが如何ともする事が出來なかつた。帝大では一ヶ月以上もレントゲンをかけたが何の變化もなく難治だと云はれ、慶應では行くたびに薬が變つてゐる様で不安でならず、九州の別府とかに日本で只一人のバセトー氏病を手

術する人があると聞いてゐるが、貧窮で行くことが出来ぬ。もう此病のために金を使ひ果してしまつたと歎いてゐる有様で、余の研究所を聞いてやつて來たのである。初診が二月十三日であり心臓を治す薬に灸治と枇杷療法を傳授して、自宅でやらせたのである。余は櫻の花の咲く頃には櫻が美しく希望で見られる様になりませうと慰めて置いたが、治療一週間後には脈膊が百二十から九十に下り、三月十八日に初めて気分が良くなつたと云ひ、櫻の時分には晴々した気分となつて、余の言の如く櫻が美しく感じますと悦んだが、五月には全快して越後に歸り、楽しく暮らしてゐると度々手紙をくれるのである。

七、子宮後屈や不妊症の治例

子宮後屈はアレキサンダー手術と相場が定つてゐるが、之も漢方から見たらば笑ふべき野蠻極まる非學術的な方法である。子宮後屈は一は食養の間違ひから來る内臓器官の弛緩と、腰椎の後彎曲から來てゐる。それで此後屈を治するには腰椎を生理的に前方に彎曲するやうに、姿勢を改めると共に、此姿勢を改めるため灸をすえ、且つ腰椎の自己調整法をやり、食養を余の唱導す

る正しき方法に改めれば自ら治るものである。

この道理を無視して行ふところの後屈手術なる物は、余をして云はしむれば、強いて患者の無智に乗じて、人體に危害を與へて以て營利を行ふものか、或は無學にして子宮後屈の病理を知らぬ者である。——原因は他にある。子宮後屈は病の原因でなく、結果であり、子宮後屈による婦人病は二次的の疾病である。故にイクラ手術をしても更に後屈に起因すると云はれた病が治らぬのみか、取りかへしのかぬ事が屢々あるではないか。即ち手術をして直ぐに死んだり、手術後に腹や足の筋が釣つて歩けなくなつたり色んな害を生ずる。然も死亡の場合の如きは、手術に手落ちなしと云はれるが常で、これでは法律によつて殺人が公許されてゐるに等しい。

千葉縣の清水たま子夫人は、後屈の手術を受けてから、腹の中のスヂが引つばつて仰向けに寝る事が出来ず、布圍を丸く巻いて丁度水死人を蘇生させる様な姿勢をして臥してゐるので、西洋醫も不治と云つたが余の研究所で鍼をすると直ぐに、其スヂが伸びたと見えて仰向けにねる事が出来、自宅で灸をすえてゐる中に、常人と同じ様に寝れる様になり、併せて心臓病と腎臓病を持つてゐたのも良くなつて、愉快に働いて居られる。

子宮後屈は或は薬や灸で治るかも知れぬが、後屈して癒著してゐるものは必ず手術せねばならぬと思ふが、これまた灸と薬とで治るのである。駿河臺の某病院で癒著であつて必ず手術を要すと云はれた婦人が、四ヶ月の灸治で取れてしまつた例もあり、此類例は澤山にある。子宮後屈で笑話に似たものを云ふならば、日本橋の某婦人は淋毒性内膜炎で帯下が多く、且つ不感症に近い婦人であり〇〇病院に四ヶ月もかゝつて居るが更に良くならず、遂に後屈の手術をする事になつた。ところが病室が満員でベットがないから、もう三日待てと云はれ、その間に余の研究所の話を書いて尋ねて來、五月四日から灸をすえ出し、短時日の中に帯下も減じ不感症も治したので、不思議に思つて再び從來かゝつてゐた〇〇病院に行つて内診してもらつた處が、お医者さんがしきりに頭をひねつて「おかしいですねコンナ譯がないが後屈が治つてゐます、温泉へでも行つてゐたのですか」と云ふてゐたと云ふ事である。

或病院では卵巣腫と云はれ、或病院では肉腫であると云はれ、共に切開手術を要すと云はれた二十八歳の婦人が、灸をすえてから三ヶ月目に妊娠して安産をしたのや、十五年も前に卵巣腫で卵巣摘出手術をしたが、一年後に腎臓炎になり、五六年前には子宮出血を起し、卵巣部分が

痛み、眞夏の土用でも眞綿を巻いてゐたのが驚くべき短時日の間に全治し、帯下の丁字帯も不用になり、夏も巻かねばならなかつた腰のネルが不用になつたのや、二十歳の初婚以來妊娠せず、人工妊娠やオオホルミンの注射や何々と手を盡くしたが如何ともする事の出来なかつた婦人が、灸と服薬によつて三十七歳で始めて妊娠し、三十八歳で初産をした経験や、事實を語れば夜を徹して語れやう。

子宮下垂症で夫婦の交りが不自由であり、痛苦を伴つた軍人の夫人は、一ヶ月ほどの間に下垂症が治つて夫婦の間に春が再來し、某夫人は尿道の口にイボの如きものが出来、某醫院で手術したが其あとが痛んで十年以來歩いても苦痛であつたのが、一回の枇杷治療で僅かに三分間の間にケロリと痛みが治つてしまつた奇蹟、三十年來の陰門疼痛と痒さを如何ともする事が出来なく、諸醫を歴訪して手の盡しやうのなかつた人達が、同じく三分間ほどの短時間で、全く忘れる様に治つてしまつた様な奇蹟は、西洋醫家には語つても信ぜぬ程のウソの様な話であらう。

急性睪丸炎の如きも薬を用ひて、一週間もうなつてゐたのが、翌日は歩いて禮に來た話や、慢性的な睪丸炎で痛く、睪丸を握る事の出来なかつたのが、手首に灸をすえて直ちに睪丸を握つて

痛くなくなつた例が澤山にある。然も其灸治の時間は皆五分間を出でぬ！

八、其他を概略的に語る

與へられた紙數はもう盡きた。話は無限であるが、それは後日にゆづつて、茲では上記の外の病に就て飛行機的な記述をしやう。

早稻田大學教授の永井一孝氏は二十六年前からの三叉神経痛で、如何とも諸醫の手の盡しやうのなかつたものが、一ヶ月未滿の中に全快したのや、日露戦役の時に三笠に乗組んでゐて砲弾のために顔面神経痛を起し、これまた如何とも出来なかつたのが、同じく一ヶ月足らずで輕快したのや、急性の顔面神経痛で注射ばかりしてゐて、注射がさめると直ぐに痛み出し、殆んどモヒ中毒になりかけてゐたのが、一回の灸治で全快してしまつた例や、神経痛にも多くの業績をあげてゐる。

杉並警察の衛生部の警官の妻君が、本年の一月から産後で悪く、腰が全くぬけてしまつて如何とも出来なかつたのが、五月余に治を乞ひ服薬のみで僅か一週間で歩き出した様な事實、小田原

の小川夫人が十年以上の極度の神経衰弱で殆んど失神的な有様であつたのが、一週間の服薬と灸治で意識が回復して再生の恩を謝してくれたのや、同じく猛烈な神経衰弱で肩や背が凝つて、そこが凝つて來ると手でもんだり叩いたりしてもダメで、金槌で叩いた程であり、十年來の不眠症で病苦のあまり自殺を許り、未遂で出血のため極度に疲勞し且つ不眠の婦人が、余の處へ來て三日目から安眠が出來、一週間目には一人で通つて來て再生の恩人と云ふてゐるのや、實に限りなき事實がある。

芝の愛宕町の某婦人は、某胃腸病院で胃腸の下垂症で手術をせねばならぬと云ひ、慶應では子宮癌になる前のヒドイ子宮硬化だと云ひ、帝大では一種の精神病なりと云つた不思議な病で、體が全體黒く細く瘦せて居り、食慾は全くなく、少し怒ると呼吸がつかまつてしまふ様になり、唾が全く出なくなつてしまふ奇病で、病名もつかず治療の方法もないが、余の研究所に來て一ヶ月の中に殆んど常人と異らぬ健康を回復し得た事實の如きは、今日の醫家が如何と云ふであらうか。

肋膜炎の如きは洋方と漢方では治療が正反對である。洋方は蓄水を主として、漢方では蓄水を生ずる肋膜炎の炎症を主とする。而して漢方で治した肋膜炎は少しも痕跡が残らぬので、しばしば西

洋醫家を驚かすのである。

カリエスの如きは漢方で實に良く治る。田代義徳博士の本は『カリエス患者の心得』と云ふ名で、治療とは書いてない。結核性のカリエスでない限りは、貸すに半歳乃至一ケ年を以てするならば、十分に全快させ得る。——骨に畸形を生じたのは仕方がないが、病勢と排膿は全く除去し得るのである。

肺炎の如きは漢方の薬で二日分あれば足りる程である。これを大騒ぎするなどは全くお話になつたものではない。チブスや赤痢では人が死ぬものではない。蓄膿症の如きも非手術で治せる。扁桃腺を手術する如きも、原因無視の全く間違ひである。

九、語を寄す日本國民よ

與へられた紙数が超過してしまひ、之以上は語れないが、最後に余は心の底から日本同胞に訴ふるのである。

それはお互ひに健康になり、生活問題を解決して日本を理想の國になさうではないかと云ふ事

である。余は以上に於て、眼中人なきが如く、極めて傍若無人に言葉を吐いて來てゐるが、これは全く國を愛し同胞を思ふの赤誠に外ならぬのである。余は個々の人の病を治して、開業醫の眞似をしたくて研究所を開いてゐるのではない。醫界を刺戟して醫道を改革し、また同胞の夢をさましたいからである。——目的とする處は人の病を治すよりも、國の病を治すのである。故に漢方の復興は、余にとつては政治運動であり、社會運動であり、同時に宗教運動である。滿洲に於て日本海に於て幾萬の愛國者が生靈を犠牲にしてゐる。然し護國と愛國は戦時のみに限るまい。余は平時に於てそれと等しく、國を護るために戦つてゐるのである。

國に一人の諫臣なき時は、其國が亡ぶると云ふ、余は叫ばねばならぬ、戦はねばならぬ。

日本の醫家よ、余の叫びに耳を傾けて、どうか眞に人を助ける心掛けになつて下さい。どうか金儲けのために人命を犠牲にする精神はやめてほしい。——中には醫師としての良心のさゝやきに煩悶してゐる人達があるが、どうか漢方をやり出して下さい。

嗚呼何と云ふ惡が善を征服し、邪惡が正義を支配し、不合理が合理を蹂躪した日が永く續いて來たか。我等はこの状態をして早く歴史の中に葬つて、日本の國土に本當の平和と幸福が輝くや

うにせねばならぬ。日本の改造の前には幾多の問題が横つてゐる。社會改造、教育制度の改造等々と限りがないが、私は醫界の方面から日本を改革するために戦ふのである。

親や兄弟や友人達は、お前のやうに猪のやうに進んで、思ふ事をまつ直ぐに叫んでは暗殺されるであらうから、少しは穩健に柔かく振舞つては如何と云はれるが、余は不合理や不正義を黙つて見てゐる位なら死んだ方がよいのである。若し暗殺などされる事があれば、余はハルビン驛頭の兇刃の如く光榮に存する。

黒き翼よ余の上を飛べ。青き目よ余を呪へよ。及よ毒藥よ病菌よ余をとり巻けと。——月は冷かに地上を照す。何すれぞ地上はかく憂ひの深きや。(了)

〔祖國〕昭和五年正月號

醫學と經濟學

一、經濟學と倫理學

經濟學は西洋の學問で、まづアダム・スミスが元祖といふ事になつて居り、今日の大學などで教へる經濟學は、皆西洋のものばかりである。原書を譯讀してゐるので、經濟學の講義か英語の講義か分らぬものが多い。古くはミルあたりで、近頃はシガーとかシードとかセリグマンてな連中の本が講義に使はれてゐるらしい。

處で經濟學者はみな、この經濟學は西洋にのみあつたので、東洋にはなかつたかの如くいつてゐるが、こいつがすこぶる考へものだといふのである。

佐藤信淵や新井白石を經濟學者に見立て、日本にも經濟學者がゐた。グレシヤム法則の如きは、現に白石がいつてゐたと、強ひて日本にも經濟學があつた様にいつてゐるが、さういつてゐる

日本人も西洋人に學問的には劣らぬというて見るもよいが、私には別な考へ方があるのである。

人間の物質活動といふものは、要するに經濟活動なのであるから、人間社會のある處には、すべて經濟行爲が營まれ、従つて經濟眼的な考へ方はあつた筈である。ところが文化の起源において、西洋よりも數百年も先鞭をつけてゐる東洋にこれがなくて、文明の遅れてゐる西洋にばかりこの學が發達したのは不思議だといふ事になる。——これには何等かの譯があらねばならぬ。そこで西洋經濟學の檢討といふ事が始まる。

經濟學は要するに生産と消費の學問であるが、西洋の經濟に對してカツと目を見開いてこれを見る時に、それ等の中において、果して生産論と消費論が、完全に均一的に論究されてゐるであらうかといふ疑問が第一に起るのである。

余はこの氣持で經濟學をば、今一應に讀みかへして見ると、失望したことは、西洋の經濟學で取扱はれてゐる事は、ほとんど生産論のみといつても良いのである。

そこでハテナと頭がクルリと東洋の諸學の方へ向きがはり、西洋の經濟學に代るべきあるものがなければならぬと考へる。——ちつと東洋の學問を見詰めて考へて見る。有る有る經濟學と等

しいものが。

それは即ち倫理學であり、道德論である。——といふと東洋の倫理學を西洋の經濟學であるといふ斷定は少し變たといふ駁論が出るかも知れぬが、まあちよつと待つてほしい。經濟學の究極の目的は、より多くの剩餘を生むべき手段方法の學問である。ところでこの剩餘は如何にして得らるるか。いはく次の二つの中の何れかの方法によつて、即ち

- 1、生産の増加か
- 2、消費の節減か

である。處で西洋の經濟學なるものは、生産論の方へ片輪に發達して行つたもので、東洋の倫理は、消費論の片輪のまゝに止つてゐた處のものである。

よつて余は斷するのである。剩餘の研究を前面から見れば經濟學となり、背面から見れば倫理學となると。——二つは同じ問題を異なつた二つの立場から解決しようとしてゐたので、二つの學問はお互に盾の一面のみを見てゐたのである。

この二つの學問は二つとも片輪であることをまぬかれぬ。これからの日本は東西兩學術の粹を

綜合して、新しい眞理を創造する立場にある。生産論と消費論とを完全に融合せしめ、新しい經濟的眞理の建設は、今や日本の學者の光榮にゆだねられてゐる。何時までも西洋の糟粕ばかりなめずに、新學說の開発に努力を傾注するを要す。

二、生産と消費と

西洋の經濟學がなぜ生産本位になり、東洋の經濟學が何故に倫理的な消費論になつたか、この原因の討究も民族心理學的に考察したならば、随分と面白い研究にもならうと思ふ。これらの東西の傾向の分裂を、漠然と直覺的に暗示的に考へて語るならば、やはり氣候風土の支配による處が多いと思ふ。

西洋は同じ温帶國ではあるが、東洋とすこぶる事情が異なる。地球は西から東に向つて自轉運動をやつてゐるので、北半球の大陸塊の西方と東方では氣候がガラリと異つてゐるのである。東西氣候の分水嶺はインドの南のセイロン島である。

歐洲航路をドイツから發して、ジブラルタルからスキスを通り、紅海をぬけてセイロン島まで

來る海岸は木が生えて居らぬ。海岸はみな裸地である。バイロンが自然の宮殿と歌つたギリシヤの南の多島海すら、岩ばかりの島で峰に近いところに木が僅かばかりあるきりである。それが船がセイロンに入ると景色はガラリと變化してしまふ。セイロンから印度の東海岸は、木が海邊にまで根をおろして、夏なほ暗く繁つてゐる。マレー半島もボルネオもジャワも皆その通り。日本もしかりで瀬戸内海や松島の小岩の上に、松の如き巨木が生えてゐる風景は、西洋人がなかく想像出來ぬところである。余はセイロンから西を西洋的氣候と呼び、セイロンから東を東洋的氣候と呼んでゐる。

さて、海岸にまで木の生えてゐる處は、生命現象の盛んな處で、草木が繁殖し易ければ、自ら食物が豊富であつて人間その他の動物が繁殖しやすい。これに反し西洋の如き乾燥國は、海岸に木が生えぬとひとしく、内地にも自ら草木の繁殖が十分でなく、従つて動物の繁殖が容易ではなう。

東洋的氣候の下においては、動物は十分に食物に恵まれてゐる。しかし西洋的氣候の下においては、動物は十分に食物に恵まれて居らぬ。つまり東洋的氣候はブルジョアの氣候で、西洋的氣

候はプロレタリア的氣候だ。

そこで西洋的氣候の下に於ては、人類が繁殖するには、その繁殖すべき物質を得ることが問題で、西洋といふ自然的環境の下に於ては、人間の精神は常に生産といふ方面にのみ意識が働きかけてゐるのである。——これやがては能率増進の機械が西洋に發達し、また經濟學の如きものが生産論を基礎として構成されて行くのである。

これに反し東洋的氣候の下に於ては、物資が豊富であるから、その動物から人間までガクガクして居ない。自然に生えて來るものを取つて食へば良く、自ら生産に血眼になる必要がなく、機械的な文明よりも、森の文明と呼ばれるべき詩生活が發達した。

東洋的氣候の下においては、森林が海岸にまで繁殖し得ると同時に、それ等の氣候の生存的恩恵は下等動植物にまで及ぶわけで、東洋的氣候の下においては、病菌類が非常によく繁殖し得る譯である。——そこで消費の倫理が舞臺に出て來る。

人間は常に多くの場合、生存に必要な物資の三倍も四倍も勞費してゐる。物資の豊富な東洋氣候の下においては、わざ／＼骨を折つて生産を増加しなくても、同じ結果は、單に一寸した心掛

から消費の節約によつて得られるのである。そこで消費倫理が行はれる。

消費倫理が行はねばならぬ更に有力なる原因は、病菌と人間との關係においてある。各種の疾病は多くの場合、消費過多による胃腸の自家中毒が、第一次的あるひは二次的な病氣の原因になつてゐる。それで民族衛生や、個人的長命の必要から節約主義が主張されねばならぬ。東洋の消費倫理は一面に於て經濟學的であると共に、一面に於ては醫學的な理由をもつてゐる。

西洋は物資が欠乏してゐて、生産が常に生活の主題になつてゐると共に、此處は東洋に比べては乾燥帯で健康地であるから、たとひ消費が必要以上に多くても、東洋的氣候ほど害を感ぜぬ。そこでまた醫學的な理由から倫理節約主義が忘れられる事になる。

三、最低生活費問題

經濟學者はよく最低賃金だとか、最低生活費だとかいふ事をいふが、これもよい加減な推定から出發した説である。

文學的な比喻からならば、最低賃金など云ふ言葉を用ふことは出来るが、これを醫學的見地

から見ると、直ぐにその無根據は暴露するのである。

一體人間はいくらで生活し得るもので、いくらが最低の生活費であるか。——それ等の算出は如何にしてなしたのか。その算出の基礎がアイマイでは折角の議論が臺なしになつてしまふのである。

生活費は生命維持と、健康維持の費用であるから、これは純然たる醫學上の問題である。醫學に基礎をおかぬ議論はゼロである。

生きる方法は衣食住の三つに分類が出来、おの／＼これを醫學的に見ねばならぬが、それ等の一つ／＼に止つてゐる事は、とても暇も紙面も許さぬから、生きる條件の第一である處の食物について論ずる。

一體人間にどれ程の飯を食つて生きて居られるものか、どれ程の食事をするのが最も健康によいのか、これ等を經濟學者は知つてから議論を進めたであらうか。あるひは單に漠然たる推定に出發したか。

醫學的に見て人間の健康を維持し得る分量といふ物は、極く僅かであるもので、これを知つて

は驚くの外はないのである。

西洋でも舊思想になりつゝある。肉や卵を食はねば健康が維持されぬといふ、ドイツの古臭いフ・イト流の衛生學を信じてゐる、頭の古い醫學者達に最低生活費を計算せしむれば、食物費といふ物を彼等の理想とする程度に維持するには、随分と金がかかる物で、ある意味に於て經濟學上の最低賃金説に近いものにならう。

しかし今日では世界をあげて肉食衛生は衰へたので、デンマルクの營養學者のヒンドヘデーの説が、最新のものとして流行せんとしてゐる。この説は余の著書「日本に適する衣食住」の中に、かなり細かに紹介し、九州醫大の宮入慶之助博士も小冊子を出して紹介に努めて居られる。

このヒンドヘデー氏の説は、今や實驗的に眞理であることが證明され、世界に熱心な賛成共鳴者を得て、非常な勢ひで擴まりつゝあるから、日本の今日の醫界の肉食をすゝめる迷信も、遠からず姿をかくす事と信ずる。しかしこのヒンドヘデー氏の説も日本の天才、石塚左玄先生の説にはまだ達してゐない。

處で余等の計算によれば、普通人は一日に玄米が二杯に、味噌汁とゴマ鹽が最も適合にして、

且つ健康な食事で、朝食は玄米一杯に味噌汁と漬物ですまし、晝飯はぬきにして夕飯がまた玄米一杯に少量の野菜（副食物は飯の三分の一以下）でよく、これ以上は多ければ多いほど、悪い生活の部分へ入るのである。——この正しい説は、多くの読者の耳に入り難いかも知れぬ。（詳細は「日本に適する衣食住」を讀んでもらひたい。）

かくの如き食物で生命が維持できるかと思ふ人があらうが、これが一番の健康食なのである。さてかくの如き少量にして安價なる食物ですませるならば、如何に生活費は安いものになるか。貧困は多く自ら作つてゐる。浪費生活、特に肉食生活が多くの病氣の根本である。貧民統計によると、貧困に落ちた大部分の原因は自己または家族に病人のあることであるが、その病因は多くの場合、食物の間違ひによる自家中毒が原因である。

かく醫學的に社會的貧困や疾病の原因を研究して來ると、自ら今日の社會主義經濟學などいふ物が、成つて居らぬことが分る。社會制度の罪よりも、個人的無智が社會悲劇の原因たることが多い。

四、砂糖輸入税

要するに西洋の經濟學の分配論の如きは、少しも醫學的眞理に裏書されない、なつて居らぬものである。消費の方法だとか、消費の内容だとか、それらの消費が個人または社會に及ぼす影響などいふ事が、ほとんど考究されずに、實にボンヤリした假定の下に理論が組立てられてゐる。それ等の中で一番に代表的な間違ひの一つをあぐるならば、無産黨の政綱の一つである處の砂糖の關稅の撤廢である。

肉食の悪い習慣と共に、もう一つの近代人の誤りは、砂糖を過多にとる習慣である。安部磯雄氏の如きは禁酒論者である様であり、禁酒は理論において大賛成であるが、その安部さんが砂糖の害について知られぬのは、新しい時代の先覺者の爲に悲しむ次第である。

砂糖は色んな害をなす。間食にほり／＼菓子を食べて胃を悪くし、また腎臓をも悪くする。今日國民保健上からいへば、この砂糖を過分にとる事は、非常に悲しむべき大問題なのである。それで砂糖は關稅の撤廢どころか、出來得るならば輸入禁止にしたいと思つてゐる位である。

労働者の賃金を高めて、それで労働者が酒を飲んだり、肉食をしたり、あるひは菓子を食つて病氣になつて、それで労働者の幸福や自由問題が解決されるか。

學問と理性によつて制統されてゐない衆愚の、一般的収入が増加したからとて、決して民衆が幸福になれるものではない。

幸福といふ事や、健康といふことは明智によつて統制されて、始めて達し得るものである。プロレタリアの問題は収入過少の問題でなくて、消費の間違ひの問題である。

労働階級の解放といふことは、一つは今日の政府がもつと健全なものになつて、国内からファイト流の肉や卵や牛乳を全廢する法律を布き、彼等が病氣にかゝる第一の原因を除去せねばならぬ。而して彼等に多くの賃金を與へる代りに、それを國家の手によつて積立て、老後や或は怪俄の場合の手當金に残さねばならぬ。——つまり徹底的なビスマーキアン・ステート・ソシンリズムが醫學と握手して行かねばいかぬのである。

而してその醫學にしても今日の醫學ではいかぬ。西洋醫學では比較する事の出来ぬほど、臨床的に高等な漢方醫學を復興して、これに二三の西洋醫學の長所を加味して立派な醫學を作らねば

ならぬ。

病氣を治すことを知らぬ西洋醫學は、貧民製造の吸血醫學で、治國救民の醫學ではない。倫理的道義によつて支配される皇漢醫學こそ、新時代の醫學である。

醫學を國營にして見たところで、プロレタリアの醫學的福音は到來せぬのである。問題は名ばかりの醫學でなくて、眞に人を治せる醫學の創造である。余の研究所でよく病人に灸をするだけ、よく五千圓も一萬圓も棄てたといふ難病人を手輕に治してゐるが、灸の如き手輕であつて有効偉大な療法こそ、國民醫學の第一位に採用すべきものである。

要するに互に日本をよくするために働きたいもので、現政府の節約主義も大賛成であるが、自動車の節約みたいな末梢的節約はなつて居らん。もつと根本的な國民的な節約が必要である。

節約は倫理的内容を持つと共に醫學的な意義をもつてゐる。日本人は更に覺醒して、日本の新に展開する途を開かねばならぬ。世界をあげて生産經濟學を奉ずる時代は過ぎたのである。——世界の植民地が皆、白人の手に歸し、第一は原料の搾取、第二は機械を賣りつけることで白人國は資本的剩餘價値を得てゐた。それが植民地にも機械工業が發達し、かへつて母國と競争する様

になつてから、白人國の生産主義經濟は行きつまつたのである。しかしてやがては新消費經濟學が生れんとしてゐる。この機運に際し、この學を日本において創造するのは、日本經濟學者の責任ではないであらうか。

〔報知新聞〕昭和四年九月

子宮後屈と不妊症の灸治

一、花の咲かぬ春

結婚をしてから、數年たつても、子寶に恵まれないことは、誠に淋しいものであります。——それは丁度、春になつて木に花が咲かないと同じです。楽しみに樂み、待ちに待つてゐた花が咲かねば、如何に春も淋しいでせう。——如何に夫婦の愛がこまやかでも、可愛い愛の結晶が、天使のやうに笑つて飛びついて来てくれぬなら、誠に家庭は淋しいものです。子供のない家庭は愛の牢獄であると、西洋の詩人が申しましたが全くです。

神は産み増へ榮へよと人類を祝福されたのです。地上にはもつともつと人類繁榮して、平和と愛の理想境が實現せねば嘘であります。然るに世には母になる光榮と、誇りとを奪はれてゐる人達があります。それ等の方の淋しいお氣持をお察しすると、全く同情にたへません。それで、ど

うかして其等の人々にも、母たるの誇りをさづけて差上げたく、それ等の方法を誰にでも分るやうに手軽に説明した物を作り、皆様が御自宅で治療が出来る様にと思ひ、この一章を公にする事にいたしました。

二、西洋醫は子宮の手術をすゝめる

結婚して數年たつても子寶に恵まれなかつたり、月經が不順であつたり、帶下があつたり、月經の時に腹が痛んだり、或は腰が痛かつたり足がしびれたり、肩が凝つたりして治らぬ場合に、婦人科の御醫者に相談をすると、申し合はせたやうに『子宮が悪いためだ』と云ひます。そしてその子宮の悪い原因が、花柳病から來て居らぬ限りは、大抵は子宮の發育が不完全であるとか、或は子宮の位置が屈つてゐるため——つまり、子宮が後屈だとか前屈だとか、或は左右に屈つてゐるためであると診斷されます。

そして治療法としては、先づ子宮發育不全の場合はオオホルミン其他の注射液や内服がすゝめられ、帶下がある場合は毎日洗滌をやられます。それから子宮が屈つてゐる場合は、先づ全く

時的に、患者をだまして病人の弱點につけ込んで金を巻き上げるとしか思はれぬやうな、子宮マツサージ術とか、子宮温湯灌注法とか、或は環狀ベツサリウム挿入法とかをやり、それから大分に日數を置いてから『どうもコンナ方法では中々治り難いから、子宮の手術をして子宮の位置を直せば、あなたの月經不順も月經痛も腰痛も治り、子寶が得られませう』と、最後の手段として手術をすゝめられるのが常であります。

子宮が屈つてゐるのを治す手術は、アレキサンダー・アダム氏手術と云ふもので、これは子宮を吊り上げてゐる紐(圓靱帶)を引きあげて、後に倒れてゐる子宮を起す方法なのであります。——一寸考へると此手術は非常に文明的なハイカラな理窟にかなつてゐる様に思はれますが、良く考へて見ると、實に幼稚な野蠻極まる方法と云はねばならぬのであります。

三、危険な子宮の手術

なぜ私は子宮の手術が野蠻であるとか、幼稚であるとか申すかと云ふに、その手段方法と其結果とが悪いからであります。——それ等の理由を申し上げる前に、私は皆様が子宮の手術をされ

た方に、その手術の結果がドンナであつたかと云ふ事を、御聞きになつて見るのが、先づ第一に必要であり賢明であると思ふのであります。

事實に徴して、いくら後屈の手術をしても苦痛がやはり元の通りで、少しも良くならぬと嘆いて居らるゝ婦人が非常に多いばかりでなく、専門醫の中に良心を持つて居る人達の中では、子宮後屈の手術は何にもならぬものである。手術をして半年や一年の間は良いが、一年半も二年もすれば、また後屈になつてしまふもので、殆んど無効なものであると云ふ事を公言して居らるゝ人も澤山にあります。

單に子宮後屈の手術が、全く一時的のものだと云ふだけならマダしもですが、手術なるものは如何にも危険であり、時には非常に悪結果を残しますから、私達は大聲に人々の夢を醒さうと働いてゐるのです。子宮後屈を手術で治すと云ふ事は、根本的に間違つた『科學』の假面をかぶつた迷信です。私達はこの世からこの迷信を一掃してしまつて、醫學の名の下に多くの人命を犠牲にしてゐる悪事から、人々をお救ひしたいのです。お灸や其他以下説明するやうな簡單な方法で少しも生命の危険を冒さずに、子宮後屈や何かを治つたら、その方法こそ却つて文明的ではあり

ませんか。お灸を野蠻と云ふのは、單に感情的に西洋カブレをしてゐる人に過ぎません。人の體をたち割つて、生命の危険を冒す手術こそ、實に野蠻も大野蠻な方法です。

子宮後屈の手術をして、その翌日死んでしまつたとか、一週間目に亡くなつたとか云ふ話はザラに聞かされる事でありませう。これ等は一々どの病院で何年の何月何日に誰某を手術して殺してしまつたなど云ふ實例を、わざ／＼引き合ひに出す必要もありません。これ等の例はずい分と、皆様のお耳に入つてゐる事であると思ひます。

腹をたち割る手術が、如何に危険なものであるかと云ふ事は、手術をする前に患者から取つて置く手術承諾書を御覧になればお分りになる筈で、それには手術の結果、死んでも致し方がないと云ふ、如何にも文句の云ひやうのない逃路をちやんと作つてある事でも分りませう。その危険な手術を冒さるゝ方は、よほどの冒険家で命のいらぬ方であると申すより外はないのであります。

まだよしんば命を棒に振らなかつたまでも、後屈の手術をしてから、足がピツコになつたとか、腹の筋が引きつって、仰けに臥す事が出来なくなり、腹匍ひに寝てゐるとか、却つて悪くなつたなど、云ふ例はザラに聞くと、私の研究所へは随分と手術のために片輪になつた方が治療

に來られ、澤山に治療した例がありますが、こんな手術失敗の話を開かされる毎に、何と云ふ情けない事であるかと、涙がこぼれるのであります。

また私のやうに漢方醫學の研究所を開いて、皆様の健康の御相談にあづかつてゐると、色々な面白い事を承りますが、とり分け面白いのは子宮が屈つてゐると云ふ診断について、種々な御醫者の見立てが大變に異なることであります。私の處へ参らるゝ方は、大抵は東京で指折りな代表的な病院を三つか四つは、訪ねられなかつた人がないと云ふても過言ではないのですが、それ等の方々の御話を聞くのは、すい分と面白いものであります。或患者は甲の病院に行くと、子宮の後屈であると云はれ、乙病院では前屈であると云はれ、丙病院では左屈であると云はれたと云ふのです。どうしたら甲病院で後屈と見たのが、乙病院では反對に前屈と見られるのでありませうか。そんな場合には私達は甲病院は後屈、乙病院では前屈と見られたのですから、子宮の位置には異常がなく丁度まん中ではある事を證明されてゐるのでは有りませんかと笑ふのが例です。

私は醫學界を廓正するのが目的でありますから、私の研究所の診察簿には、患者諸君がこれまで掛られた醫者が診断した事を、細かに控えてありますが、それは丁度闇魔帳のやうで、現代醫

學界の裏面の好縮少圖であります。どうしてコンナに診察がマチ／＼なのか、これでは診察を最も喧ましく云ふ西洋醫學の、診察その物が實にイ、加減なものである事を證明してゐるもので、西洋醫學の診断を怪まねばならぬのであります。

四、子宮後屈の原因は何か

子宮後屈やその他の子宮の位置が正しくないのを手術する事は、如何に危険な恐ろしい事であるか、また子宮の位置が悪いと云ふ事を断定する醫師の診察なるものが、如何にデタラメな無責任極まるものであるかは、以上の話でほゞお分りになつたと思ひますが、それでは子宮の位置が悪いと云ふ様な場合は無いかと申すに、大ありでありまして、それがために月經痛や帶下や、月經不順や不妊症を來してゐる事も澤山にあります。

それで婦人病を治す第一の要件として、是非とも子宮の位置を正しく直さねばならぬのであります。それが治す前に、子宮の位置が曲つて來た原因が何であるかと云ふ事を調べて見ねばなりません。そして先づ其根本から除かねばならぬのであります——根本の原因を確めないで、原

因の結果であるに外ならぬ子宮の位置異常を治さうとする、今日の外科手術なるものは、全く山に森林を作らないで、洪水の害をのみを防がうと云ふ類であると思ひます。

思ふに子宮の位置が正しくなく、曲つてゐるのは二つの原因から來てゐると思ふ。一は脊骨並びに腰椎が異常彎弓をしてゐるためで、二は子宮の後にある骨盤結締組織の萎縮、或は炎症、卵巢の腫瘍、子宮後壁の癒著、子宮實質炎、癌又は筋腫、貧血や便秘などが直接或は間接に影響して、子宮の位置の異常を來し、それがために足が痺れたり、月經がなかつたり、不妊であつたりするのである。以下順々にこの二つの場合の治療法について、説明して行くことにしよう。

五、腰椎の後彎屈による子宮後屈の治療

私は、私の研究所へ漢方やお灸で病氣を治したいと相談に來られる人々には、必ず先づ第一に一番良い治療法は薬も飲まず灸もせず、正しい生活と正しい姿勢によつて、無薬無灸の自己治療をするにありと云ふ事を、患者に聞かせてゐる。私は舌と筆で病氣を治すのが私の任務であります。私の研究所に來られる患者の總ての人に申し上げる言葉があります。それは今後『正しい

生活と正しい姿勢によつて病を治して、今後は醫者とは縁きりにしてほしく、また私とも縁切りにしてほしい、日本人が皆無病になつて生活難や思想問題を解決せねばならぬのです』と云ふ事です。日本國民が病氣で醫者が繁昌してゐる様では、人生は暗であります。——醫者の不用な世界を作る事が醫學の第一目的なので、私は人の病を治す醫者ではなく、醫界を廓正して國の病を治す醫者だと思つてゐます。

さてそれで子宮後屈の治療も、これと同じであつて、子宮後屈の大半は腰椎が後の方に彎曲してゐる事に原因してゐるのであるから、それ等は腰椎を正しく治すことによつて、自分で治して戴きたいのです。

腰椎と云ふものは、本來は生理的に前の方に彎曲してゐるのが正しいのですが、腹を凹めて折つて坐り、腰椎を後の方に曲げる様な悪い姿勢を取つて坐つてゐると、長年の中に自然にそれが習慣になつて、遂に腰椎が曲つてしまふのです。脊骨の間には軟骨があり、骨と骨を靱帯が結び合せてゐますが、長年の悪い姿勢はその軟骨の一方を薄め一方を厚くし、また靱帯の一方を收縮させて、なか／＼一寸では治らぬものになつてゐるのです。

それで此様な腰椎の彎曲のために、子宮後屈を起してゐる人には、私は第一に坐り方を喧ましく申します。即ち『俗に女のあぐら』と云つてゐる、足を兩ワキに開いてお尻を疊の上にベンヤンコと坐る女獨特の坐り方を嚴禁し、きちんと兩足の親指の先を合せて坐り、それからお尻を出来るだけ後の方へ押しやる様にして座ります。すると自然に腰椎が前に正しく曲る様になります。これは始めの中は中々苦しいもので長年の悪い姿勢の習慣で、骨のワキの靱帯の一方が收縮してゐて出来ぬ人がありますので、かゝる場合はその靱帯の收縮を伸すために、お灸をすえるのですが、そのお灸の力によつて靱帯が伸びて樂に坐れる様になります。

それから此の坐り方の補助として腰枕を使用いたします。それは婦人用の枕から枕木を除いて枕袋の處だけを取り、それを寝る時にまつ直ぐに仰けて寝て、それを腰椎の處にあてゝ寝るので、これを毎晩五分十分と時間を長くし、一時間二時間と増し、腰椎が正しくなつた時に廢すれば良いので、これが一番に手輕な方法です。これにお灸を使用すれば、治り方が早いのは申すまでもありません。

六、病氣て後屈の場合

前節で述べた様な子宮後屈は、決して手術の必要もなく、またお灸も藥も必要の程度が輕いので、私の研究所では『病氣』の部類に入れぬ事にして居ります。この治療はほんの『僅かの注意』さへあれば良いので、これ等は御自身でお治しになるのを望みます。

私の研究所で漢方的（お灸も漢方の中です）に取扱ひたいのは、子宮の後にある骨盤結締組織の萎縮だとか炎症だとか、卵巢の腫瘍だとか、子宮後壁の癒著だとか、子宮實質炎だとか、癌や筋腫だとか、貧血や便秘などや、或は淋疾などの花柳病から來る子宮内膜炎や外膜炎、ラツパ管炎や、卵巢炎等の難病であります。

右の中に骨盤結締組織の萎縮などは治り難いものですが、灸と服藥とで苦痛を輕くする事があります。子宮癌は難治でありまして、如何ともする事が出来ません。たとひ癌の苦痛だけは除去して死期を延長し得るに過ぎません。子宮筋腫は餘程大きくなつて居らぬ限りは、灸と服藥で治るものであつて、止むを得ぬ時の外は手術は不必要です。子宮の癒著の如きも手術をせずにお灸

と薬とで誠に手輕に治せるものであります。乳腺炎の如きも全く手術が不用です。その他の婦人病に至つては帶下はもとより、ヒステリーまで、すべて漢方の領分であります。花柳病に起因する婦人病などは勿論の事です。

七、子宮彎曲と不妊症を治す名灸

以上で子宮の位置が悪いのを治す、根本的な御注意を申し上げましたが、さて之から御灸の事です。前にも云ふた様に、子宮後屈の最も多くの原因は姿勢が悪く、腰椎が後の方に曲つてゐるためですから、姿勢を良くする癖をつけ、且つまた子宮の工合の悪いのを治す御灸として、第一に腰椎の御灸から申し上げます。

脊骨を上第一胸椎の棘状突起から數へて、第十四番目の棘状突起と、第十五番目の棘状突起の間の處、即ち第二と第三腰椎の間の處、此處を命門めいもん(*)と申しますこの命門めいもんから左右に一吋五分(*)の兩點を腎俞じんゆと申します。

* 命門の素人に分り易い場所の取り方は、本章の最後に書いてをきました。

** こゝに云ふ一吋五分と云ふのは、金尺や鯨尺ではありません。後段の「灸の數と寸法」と云ふ處をおよみ下さい。

さて此の『命門』と云ふ處は子宮疾患特に白帶下に効があり、男では精液の不足、女では卵巢の發育の不十分を治し、また月經痛を治します。それで此灸は子寶をさづかるのに大變に大切な場所であります。次に『腎俞』ですが、これは淋病消渴や腎臟病の名灸で、腰を正しく、男女の生殖力を大きくする處で、是非ともすえねばならぬ處であります。

第三に『上膠』と云ふ處にすえます。脊柱の第十八から尾骨に至るまでは、癒合して『薦骨』と云ふ一枚の骨板になつてゐます。さて此の薦骨には、この骨には一つづゝ別れてゐた痕跡として、左右に八つの穴があいてゐます。この穴の一番上の穴を上膠と申すのであります。こゝに灸をすえるので、この上膠は辜丸炎、卵巢膿腫、子宮筋腫、赤帶下、白帶下、子宮脱垂症にも効く灸である。

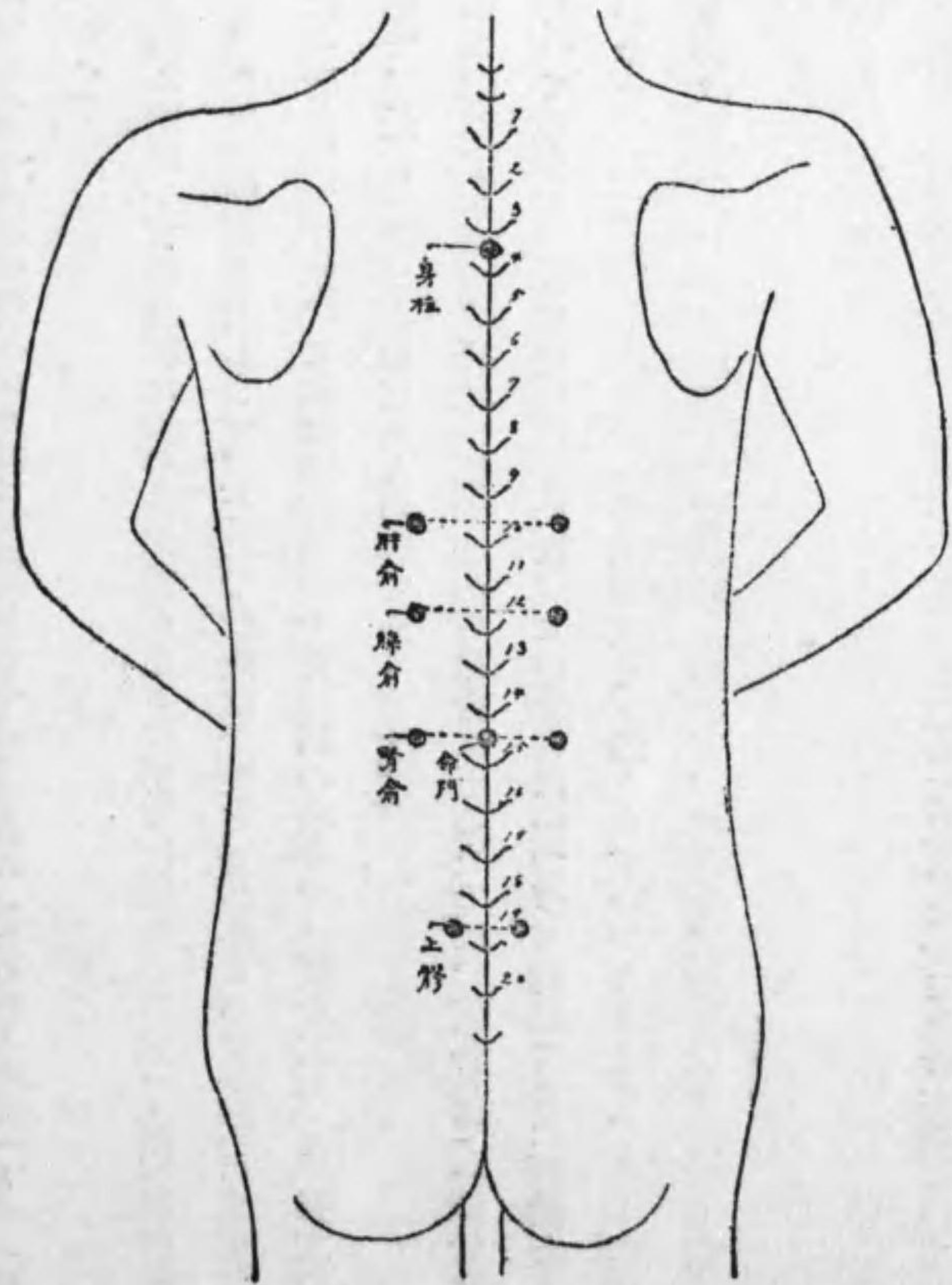
次に腹部の御灸を申し上げます。

胸のミゾオチの處に劍狀突起と云ふ骨があります、指でさはつて見ると小さな骨が突き出てゐ

子宮後屈と不妊症の灸治



第一圖



る處です、その骨の尖端と臍を一直線につなぎ合せた、その中央の處を『中脘』と申します。これがまた後屈と前屈を治すには、是非ともすえなくてはならぬ場所で、胃擴張や胃痙攣や消化不良や黃疸等に効のある處です。

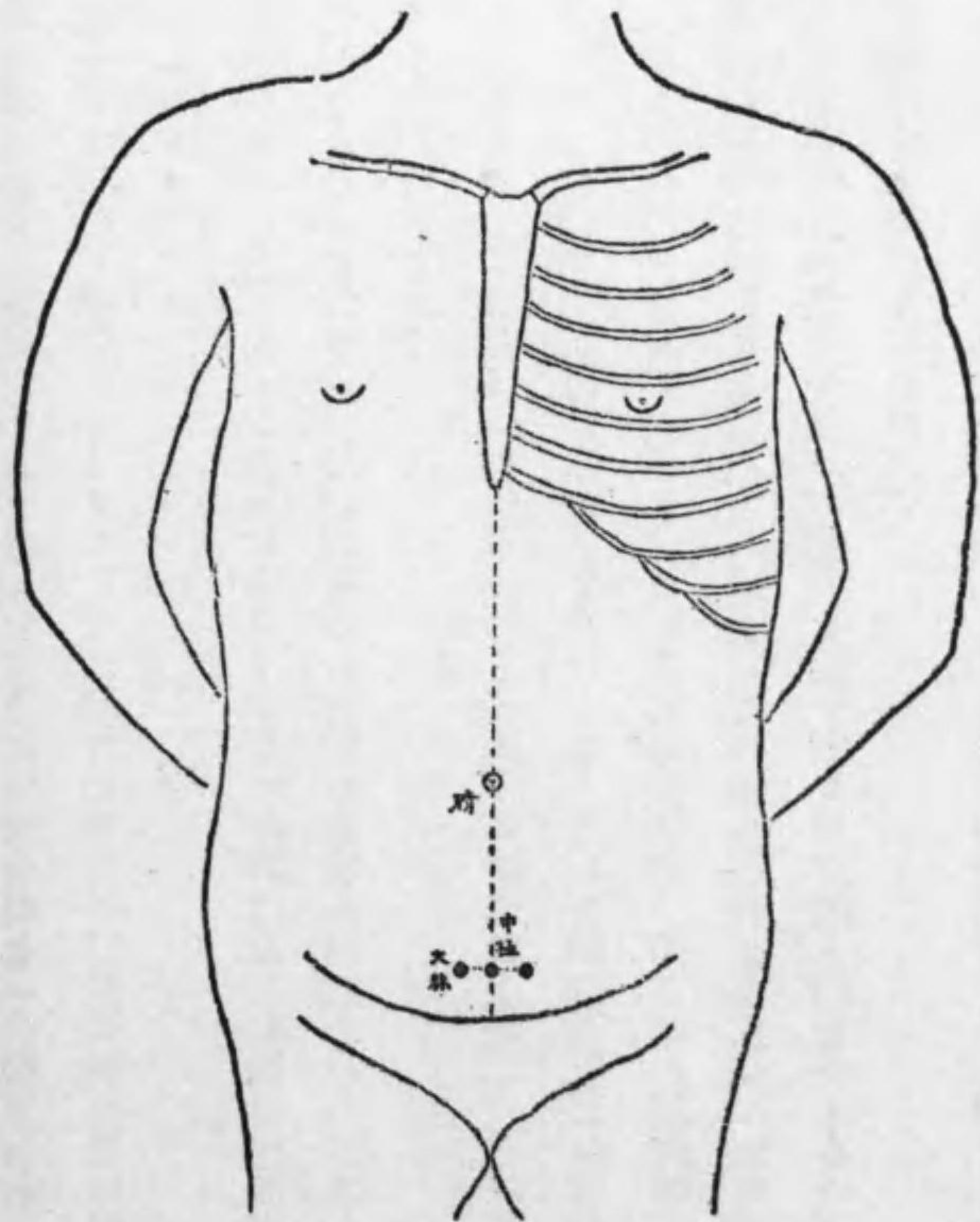
人によつては此劍狀突起が不明な人が往々にありますが、これは左右の肋骨がミゾオチの處で合つてゐる點を起點とし、これより一寸下の處を劍狀突起の尖端と假定しその假點と臍との間の中間を『中脘』とするのであります。

次は不妊症の名灸であります。これは『療治茶談』と云ふ本に出て居ります。その灸の場所の取り方は次の通りであります。婦人が仰げに寝て腹を出します。そして臍(甲)を三角形の頂點として灸をすえてもらふ婦人の口の長さを一邊とし、口の左右の長さで、第二圖の様に甲乙丙と云ふ三角形を作り、三角形の下の方の兩端を乙丙とします。この點へ毎日五十火づゝ灸をすえるのです。此處は子宮發育不全から、卵巢炎やラツパ管炎を治す名灸で、婦人病を治する一に大切な場所を置いておいても此處にすえねばならぬのです。

臍からまつ直ぐに下り、耻骨軟骨の接合の上際から一寸あがつた場所を『中極』と云ひます。

子宮後屈と不妊症の灸治

圖 二 第

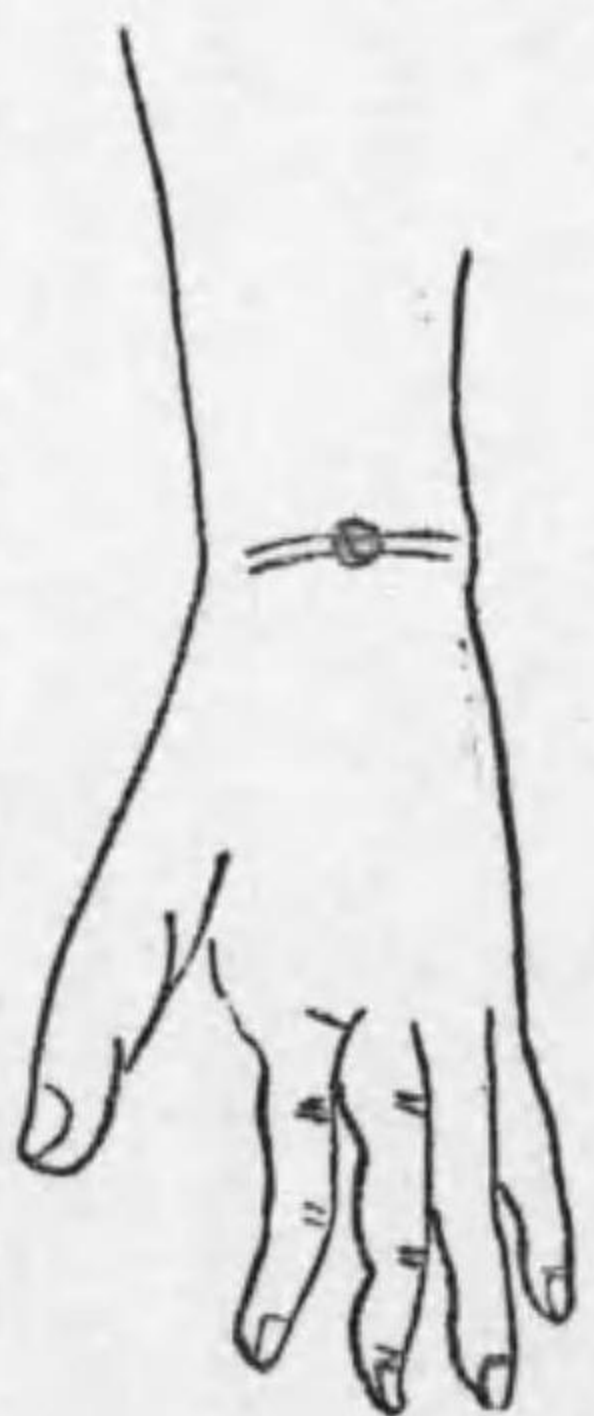


この點も妊娠の名灸であります。帶下のない人はすえなくてもよろしい。帶下のある人は、是非とも此處にすえねばなりません。

八、子宮左右屈の場合

子宮が左や右に屈つてゐる人は、どうしたら治るか云ふと、これ等の人もやつぱり脊柱が曲つてゐる事が主な原因ですから、先づ第一に脊骨を真直ぐにする治療をせねばなりません。これは平素から姿勢を正しくする様に心がけて下さらぬとイケませぬ。而してこの脊

圖 三 第



柱の曲りを治すために、私の流儀として腎俞の外に、身柱、肝俞、脾俞の五ヶ所に灸をすえる事にしてゐます。この灸は實に効く灸でありまして、人によつては墨で灸の場所の印をつけて、それから灸をすえてゐる中に、見る見る脊椎の彎曲がとれて、脊柱の左右に正しく灸をすえた筈のものが、ぐらりと動いて灸の場所が傾いて來る事があります。活動寫真にでも取ると定めし面白

子宮後屈と不妊症の灸治

からうと思ひます。此灸をすえて脊骨のワキの靱帯が收縮して居るのを伸し、それから再び脊椎が曲らぬ様に、良い姿勢の習慣をつけねばなりません。

私が脊柱をまつ直ぐにする灸點として、何故にこの場所を選ぶかと云ふと、大に理由があります。『身柱』と云ふ場所は、普通にチリケと云ひ、あらゆる灸の中で最も有効な灸所の一つで、如何なる人にでもすえねばならぬ處である。『肝愈』と云ふ處は肝臓病を治す主治灸、『脾愈』と云ふ處は脾臓の主治灸所である。人間は五臓を丈夫にさへすれば體が丈夫になるのであるから、この内臓器管の中の最も重大なものを治す灸所に灸をすえて、同時に脊柱を伸す法に利用するのが良いと云ふ論據からであつて、之によつて偉大な効果をあげてゐる。

これ等の灸によつて、子宮が左右の何れかに曲つてゐるのを治す根本治灸とするのであるが、更にこの補助として、餘り左屈が甚だしい時には第三圖にある手の甲の『陽池』と云ふ處にすえるのである。即ち子宮左屈の時は、左の手の陽池に、右屈の時は右手の陽池にすえるのであつて普通の灸の本には灸をしてはならぬ場所となつてゐる點であるが、決して害がないのである。

九、お灸の寸法と數

以上後屈と不妊症を治す御灸を説明いたしました。その説明の中で、一寸とか一寸五分とか云ふ寸法を申し上げましたがこれは鯨尺や金尺の寸法ではありません。これはお灸の方で云ふ特有な呼び方であります。

第四圖



第四圖のやうに、手の指を曲げ、中指の第一節と二節の間をイロと云ふ工合に計ります。これを一寸と云ふのです。それで體の長短に従ひ、その人その人で、その人の一寸が異なるわけであります。一寸五分と云へば、お灸を

すえてもらふ人の中指のまん中の骨の長さの一倍半に當るわけであります。

お灸は臍の下にある左右二ヶ所乙丙のみは一日に五十火づゝで、他の灸はみな七火づゝであります。腰の灸は腹ん匍ひになつてすえ、腹の灸は仰けに寝てすえます。座つて自分ですえてはイ

子宮後屈と不妊症の灸治

かませぬ。灸は米粒の大ききでよろしく、それより大きくは不必要であります。小さくても良く効きますから安心してすえて下さい。

これ等のお灸は少くとも二ヶ月はつゞけて下さい。妊娠する方は此の灸をすえて一二週間で、早くも子寶をさづかるのですが、此灸は妊娠中も差支がないのですから、月経が止つても妊娠と確定するまで、安心してすえつゞけて下さい。

十、治療の代表的の者を少し

以上の灸治法や、次節に述べる薬の併用などで、難症が治つたり子寶を授つた面白い例の四五を参考までに述べる事にしませう。

日本橋區濱町三丁目の石○種子夫人は、淋毒性膜炎で帯下が多く、且つ快感の薄い方であり、○町病院に四ヶ月もかゝつてゐたが更に良くなり、遂に後屈の手術をすると云ふ事になつたが満員でベットが無いから、もう数日待てと云はれ、その日に私の研究所の話を聞いて来られ、五月四日から灸をすえ出し、不感症も帯下も治して来て、體の調子がこれまでと異なるからと云つて

再び従來かゝつてゐた○町病院に行つて内診をしてもらつた處が、お醫者さんがしきりに頭をひねつて『不思議です、後屈が治つてゐる、温泉へでも行つて来たのですかね』と云はれ、お灸ですと云ふと『へーお灸がコンナに効くこともありませうかね』と云つて居られたとのこと。

品川三つ木八五七の左○縫子夫人(二十八歳)は五反田の○病院で卵巣腫瘍で手術を要すと云はれ、○病院では肉腫であると云はれたものが灸をすえて三月目に初めて妊娠し安産であり大變に感謝されてゐます。

入新井西沼の田○梅子夫人(三十七歳)は淋菌に原因せる子宮實質炎で、十五年前に卵巣腫瘍で○病院で右卵巣摘出手術をなし、一年後に腎臓炎となり、五六年前から子宮出血を起し、前に手術した卵巣部と腰痛み眞夏の土用中でも腰に眞綿を巻いてゐたのが、六月十八日に始めて灸をすえ出し、同月の二十八日に肩コリ頭痛や腰痛はもとより、子宮出血まで治し、常に帯下がひどくて丁字帯をしてゐたのが全く不用となつて再生の恩を謝した。麴町の待合の女將の高○ち○氏は淋菌に起因せる子宮實質炎で、半年以上も子宮出血が間斷なく、四肢冷却しきつてゐたのが、灸と薬を併用してゐると一週間に惡血の大出血を起し、それが出てしまふと、病氣がぬぐ

つた様に軽くなつて、どん／＼働き出し今ではめきめき肥え出して別人の様である。

瀧野川上中里の堀○な○夫人（二十八歳）は子宮後屈癒著、子宮周圍炎で、月經不順で月經痛を伴ひ四脚が冷却して便秘症であり、有名な○○病院で手術によるに非ざれば絶対に治せずと保證されたのであつたが、三月十七日から灸をすえ、腰冷と帶下がなくなつたので四月二十一日に之れまで掛つてゐた○○病院で見てもらつたら周圍炎は治つたと云はれ、五月十四日の月經時には少しも月經痛を知らなかつた。その後不感症がすっかり治り、人生の樂みを始めて知つたので再び○○病院で見てもらうと、さしもの難症の癒著が、完全にとれてゐると舌を卷かれた。この例に限らず、後屈癒著は十中の十までが、手術なしで治ると申しても過言ではない。若し治らぬ場合があれば、それは本人が指定通りの養生をせぬためであると申しても良い。

後屈と不妊症とが治つた例は、あまり澤山で一々は申し難いが、私の研究所で不妊症の治つた方で一番年をとられてゐる方は、大森町瀬島の森○さ子夫人で二十歳で結婚してから、やれ人工妊娠、やれ注射と方法を盡したが、全く妊娠しなかつたのが、私の研究所へ來られて始めて三十歳で妊娠し、翌年三月安産であつて、御良人は妊娠と聞いて、悦しくて飯が食へぬとの話であ

つた。この如きは私の知る限りでは稀な例であるが、この例によつて見ても三十五歳を過ぎた方でもお灸をすえて見られるが良いと思ふ。三十七歳で妊娠した人は二例あります。

千葉縣豊田村の清○た○子夫人（三十二歳）は子宮後屈の手術後、仰けに臥すると、胸から腹足にかけて引き釣つて、どうしても寝る事が出来なくなり、ために布團を圓く巻いて、腹の處へあて『へ』の字なりになつて、うつ伏せに寝てゐる有様で、東京中の代表的な有名な病院や代表的な有名な博士を歴訪して、如何ともすることが出来なかつたが、私の研究所へ來て鍼と灸をすえると、直ちに直腹筋の拘急がとれて、これなら治るといふ見込がついた、實に三十分間ほどの間に數年來の問題の解決の望みを得られたのであり、その日に郷里へ歸つて引きつゞきやつてゐると、二ヶ月ほどの間にさしもの難症も全く治つてしまつたのである。

例をのべてゐると、イクラあげても切りがないから、これ位でやめるが、どうか世の人々を本當に助けたいと思ふ醫者方は、漢方醫學と云ふ事に目をさまして、私の教ゆる方法を採用して人類愛のために働いてほしいものである。鍼や灸を野蠻だなどと思ふのは、昭和時代には却つて時代遅れの舊思想である。

十一、不妊症の治る御藥

不妊症のお灸の事を述べたついでに、子供の出来るお藥を御傳授いたしませう。

大正天皇陛下の御幼時に、西洋醫學ではどうにもならぬのを、淺田宗伯先生が御治しになつた事は、日本國民として誰知らぬ者のない有名な話ですが、その宗伯先生が不妊症の婦人に常に授けられた名藥であります。これは世に子寶藥として賣つてゐる賣藥や、何々の注射なんかより以上に効果があるものであります、私が編纂した『淺田宗伯處方全集』の第二八九號處方です。藥名を『溫經湯』と申します。

實に温まる良い藥でありまして、月經不順であつたり、常に腰が冷えたり腹が痛んだり、白帶下や長血がおりたり頭痛がしたりする、昔の言葉で云へば血の道一切の藥なのであります。

但しこの藥は卵巢炎や子宮實質炎や、淋毒性内膜炎などには効きませんから、そのつもりであつて下さい。これ等の他の婦人病の藥は他日別の本で公開します。溫經湯は御主人や御自身が花柳病にかゝられた事がなくて、然も不妊症の人が用ふる藥なのです。名の知れぬ賣藥と異つて、漢

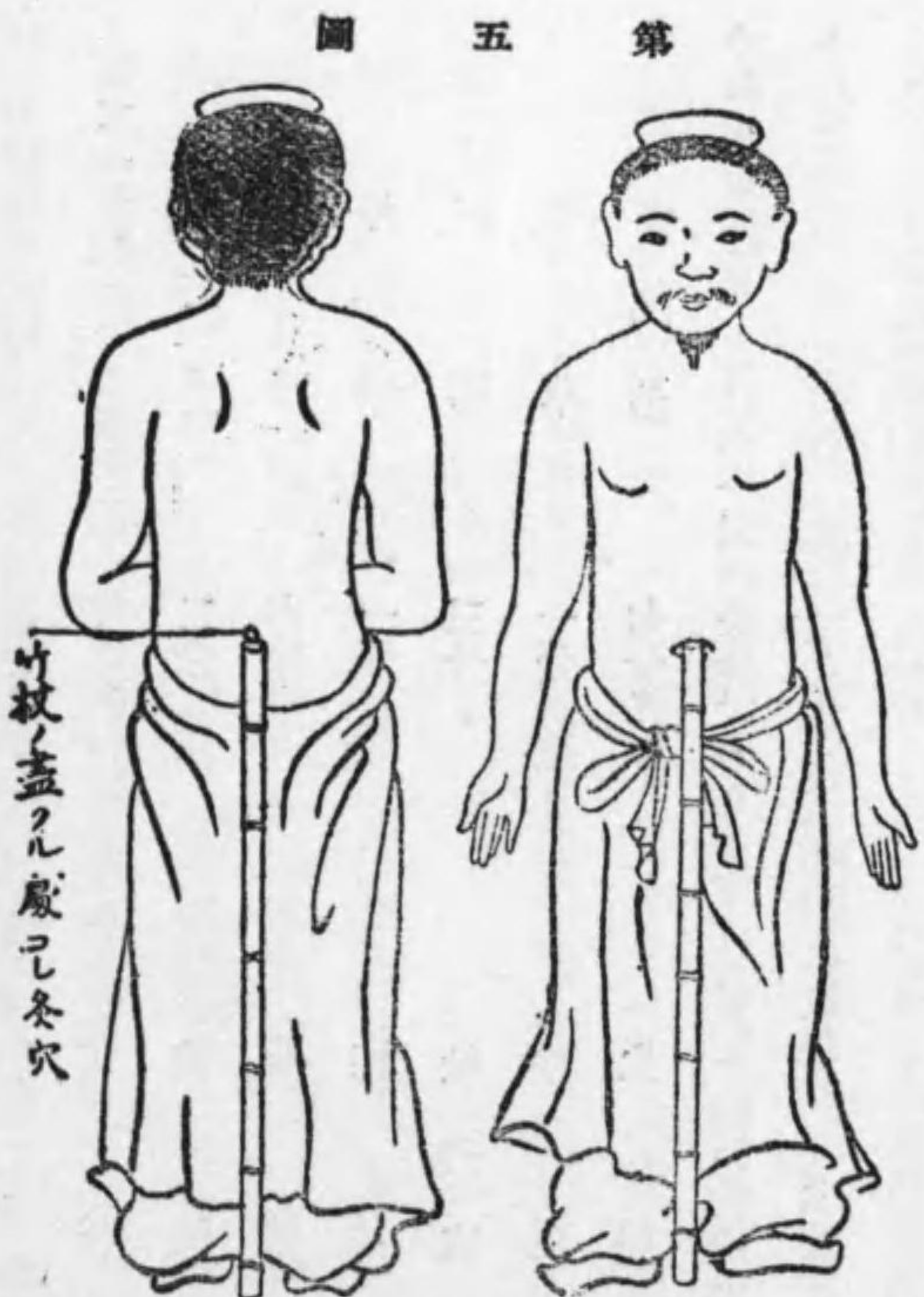
方の神醫たる淺田生先が好んで用ひられた名藥ですから、どうか御安心して御愛用下さい。

さて『溫經湯』の藥の組合せは次の通りであります。

吳 茱 萸	二 分 五 厘	當 歸	六 分
川 芎	六 分	芍 藥	四 分 五 厘
人 參	一 分 五 厘	桂 枝	四 分 五 厘
阿 膠	三 分	牡 丹 皮	四 分 五 厘
甘 草	一 分 五 厘	半 夏	七 分 五 厘
麥 門 冬	七 分 五 厘	生 姜	五 分

でありまして、これが一回の分量であります、これを瀬戸物の土瓶に入れ、水を一合四勺入れてそれを半分に煮じつめ、食前二十分乃至一時間に飲むのです。即ち一日二回であります。藥を煎する時は必ず炭火でトロ／＼と煎するので、決してガスや電熱器を使用してはならぬのであります。

十二、命門のとり方に就て



七十四頁で命門と云ふ灸の場所を申し上げましたが、單にあれだけでは素人方に場所がとり難い事を校正の時に考へつきましたので、この灸の場所を分る様にさぐり出す簡易な法を書き加へる事にします。先づ患者を直立させて、竹を持つて來て疊に立て、臍の處で切ります。それから其竹を後の方に立て、竹の高さの處に印をつけます。之が即ち命門で俗に『臍がへし』とも『竹杖の穴』とも申します。

淋病の漢方治療法

一、同情にたへぬ

西洋醫學は病氣を實際に治すと云ふ點になると、全く無能なものであると云ふても良いほど、呆れ果てた劣等な醫學である。今日の醫界を此儘にして置いたならば、日本國民は病氣のために減びてしまはねばならぬ。これを救ふには、どうしても世界で一番に高等な醫學である處の、漢方醫學を復興して、日本國民が病氣に悩んでゐるのを治して、國民全體が健康にならねばならぬのである。——かうした信念の下に、私は漢方醫學の復興を企て、これまで著書に新聞に雜誌に講演に、常に暇さへあれば漢方醫學の復興の筆と舌との戦ひを續けて來たのであり、微力な私の叫びが原動力となつて、漢方醫學が復興し始め、今では時代的流行を現出せんとしてゐるのは、私にとつて甚だ快心にたへぬ處である。

私の信念と活動がその様であるので、勢ひ難病の漢方治療に就て、全國から毎日五六十通の問合せに接し、私の事情の許す限りお答へして來たのであるが、その問合せの手紙の中で、一番多いのは淋病に關するものである。それに對する答への爲めに書いたものが本文である。恰度花柳病法案が出て間もないことでもあり、この方面の秘法や秘藥を公開することは、誠に時節が不適したことと思ふ。どうか私の御教へする方法が日本全國に廣まつて、淋病の患者が日本に一人もなくなつて、日本が明るい國になつてほしいと思ふ。

淋病になやむ人に對して、身から出た錆だと嘲りたがる、あの無理解な道學者先生の態度を私はとりたくない、むしろ其病に悩む人々には眞に心から同情にたへない。何となれば多くの人達が其病にかゝるのは、打ち勝ち難い人間性の深い深い本能に根ざしてゐるからで、一種の宿命病とでも云ひたいのであつて、この悩みから人々を救ふのが、我々の聖なる義務と考へてゐる。

ことに、私の研究所へ、病院で殆んど見離された長病ひの痛ましい婦人患者が、大勢涙ながらの相談に來られるが、その大半が良人の淋毒に原因してゐるのを思ふ時、何はさて置いても婦人病の原動者たる男子の淋病を自分で治療のできる秘法を、一刻も早く御教へするのが焦眉の急であると思ふ。

二、淋病治療の漢藥

淋病を治すに當つての養生法は、西洋醫學でも漢方でも同じであつて、急性の時は入浴や運動や酒をのむ事は嚴禁せねばならず、また房事をしてはならぬ事は勿論である。また食物でも玉ネギ、胡椒、ワサビの類の如き刺戟的な物や油こき物、茸類は決して食つてはならず、勉めて安靜にせねばならぬ。

さて藥であるが、これは例によつて私の奉じてゐる淺田宗伯先生の常用された物でこの處方は拙著『淺田宗伯處方全集』に掲げてあるものである。而して漢藥を飲む時は、決してワクチンの注射をしたり、洗滌したりする必要がないのであつて、たゞ内服一方にて事が足りるのである。

我淺田流に於て、最も一般的に用ふる淋病の藥は『小解毒湯』と云ふもので、處方全集の第六一號處方である。

遺 糧 八分 滑 石 四分五厘

淋病の漢方治療法

澤瀉	六分	阿膠	四分五厘
茯苓	一分五厘	木通	六分
忍冬	三分	大黃	七厘

右が一回の分量で、大便の通じの悪い人には大黃を一分五厘または二分に増加せしめねばならぬ。而してこの一回分を水一合半に入れ半分に煎じつめて、食前三十分毎に朝夕一日二回にのむのである。朝夕の煎じたカスを合せて、それに水二合を入れ、七勺に煎じつめて用ふれば更によい。(都合一日三回)この薬を少くとも先づ一ヶ月は飲まねばならぬ、急に治ることを求むるの

は、求むる者の無理である。毎日尿をコップか何かに取つて、自分で検査して見ると良い。薬を煎ずるに當つて必要な事は、必ず素焼の土瓶に入れて焚火で三十分かゝつてゆるゆると煎じつめる事で、決して金属性の物で電熱器やガスの火で、急激に煎じ出してはならぬ。

三、悪性淋の場合

普通の淋病は上記の處方で治るのであるが、悪性のものになると仲々に上記の處方では治らぬ。

而して普通悪性の淋病と云はれてゐる物の中には、實は淋病の病菌によらないで、軟性下疳が尿道に感染して起る場合もあるのであつて、これ等の治し難い淋病の場合には、次の處方を用ひねばならぬのである。これは處方全集の第三五一號處方の『解毒劑』の變方であつて、我流では『解毒劑淋加減』と呼んでゐる物である。

遺糧	八分	川芎	六分
大黃	一分乃至二分	茯苓	一分
木通	六分	忍冬	二分
甘草	二分	車前子	三分
滑石	四分五厘	阿膠	三分五厘

右が一回量であつて、服用法は『小解毒湯』と同じである。

四、睪丸炎の妙處方

淋病の治療に附隨して茲に公開申したいのは、睪丸炎に對する處方の妙處方であつて、これは

漢方醫の多くが門外不出の如く秘してゐる妙法であるが、私は同胞のために特にこの妙法を公開するのは、花柳病の専門醫諸君も速かに此處方を採用して、苦んでゐる人達を救つて戴きたいからである。

これは『騰龍湯』と申す名處方で、宗伯處方全集の第八三號の物で、日本に於て發見されし藥の組み合わせである事を知つてゐてほしい。漢方醫學は日本人の手によつて著しい進歩がなされたのであるが、この騰龍湯はその一例であつて、これを發見した人は竹内文輔先生であり、淺田先生も好んで使はれた妙法である。藥の按配は次の通りである。

大	黄	二分五厘	牡	丹	皮	六分
桃	仁	九分	冬	瓜	子	八分
芒	硝	七分	蒼	朮		五分
甘	草	二分	薏	苡	仁	一分

この藥の煎じ方は前の藥と同じであるが、この處方で博士や病院で如何ともすることの出來ぬ患者を救ふた例は澤山にある。千葉縣から或患者が辜丸を夏蜜柑の如く腫らし、手で支へながら

私の恩師の處へやつて來た。斯くなつてから四十餘日になるとの事で、三人の醫師にかゝつたが更に良くならず、二人は冷却せよと云ひ、一人は溫めよと云ふのみであつた。私の先生はこれを見て長くはかゝるが、三日目になれば樂にならうとて、この騰龍湯を投ぜられると、果して三日目には痛さが十中八九を減じ三週間で辜丸が原形に復して歸つたが、歸ると同時に其友人が急性辜丸炎で動けぬと乞ひに來た。よつて行つて見ると辜丸は赤色に硬腫し、惡感發熱して體を寸分も動かせず、うんうん呻つてゐる。よつて同じ藥を投ずると、翌日に輕快を覺え三日目には殆んど痛みがなくなつてしまつた。私も此方法によつて動けぬ辜丸炎の患者を、翌日は私の研究所に歩いて來させた例をもつてゐる。この藥は實に神品である。敢て全國の醫家諸氏の用ひられん事を、切に希望して止まぬものである。

漢方の淋病に對する處方は、まだまだ澤山あり、症狀によつて異なるが、先づ以上に掲げた三つの方法で、あらまし方がつくと思ふのである。

五、攝護腺炎の場合

淋菌が攝護腺を冒すと、實に治り難いもので、西洋醫學ではどうにも手の著けられぬものであり、肛門から指を入れて攝護腺マツサージとか、アルツベルグ氏冷却器と云ふ中に水を通す仕掛になつてゐる金屬性の棒を、肛門につき込んで攝護腺を冷すのが常であるが、なかなかコンナ對症療法では治るものでない。

私はヒドイ攝護腺炎を見た。それは攝護腺が腫れて小便が全く出なくなり、仕方がないので、カテテルを入れればなしにしてあり、小便がダラダラと流れ出してゐると云ふ有様で醫者も手を束ねてゐるの外はなかつたとの事である。

そこで私は前記の辜丸炎の藥である處の、騰龍湯を教へて早速に患者にのませると、さしもの難症が一服のんだだけで腫れが引いて、カテテルを入れて置く必要がなくなり、間もなく全快してしまつたのである。實にこの騰龍湯の良く効くには、流石に私も驚いた程である。

慢性の淋病患者は何時までも攝護腺の處がむづむづし、自動車で長道をしたりするとよく再發

するものであるが、これ等の人々は、早く此の騰龍湯によつて根治して置かれるが良いと思ふのである。

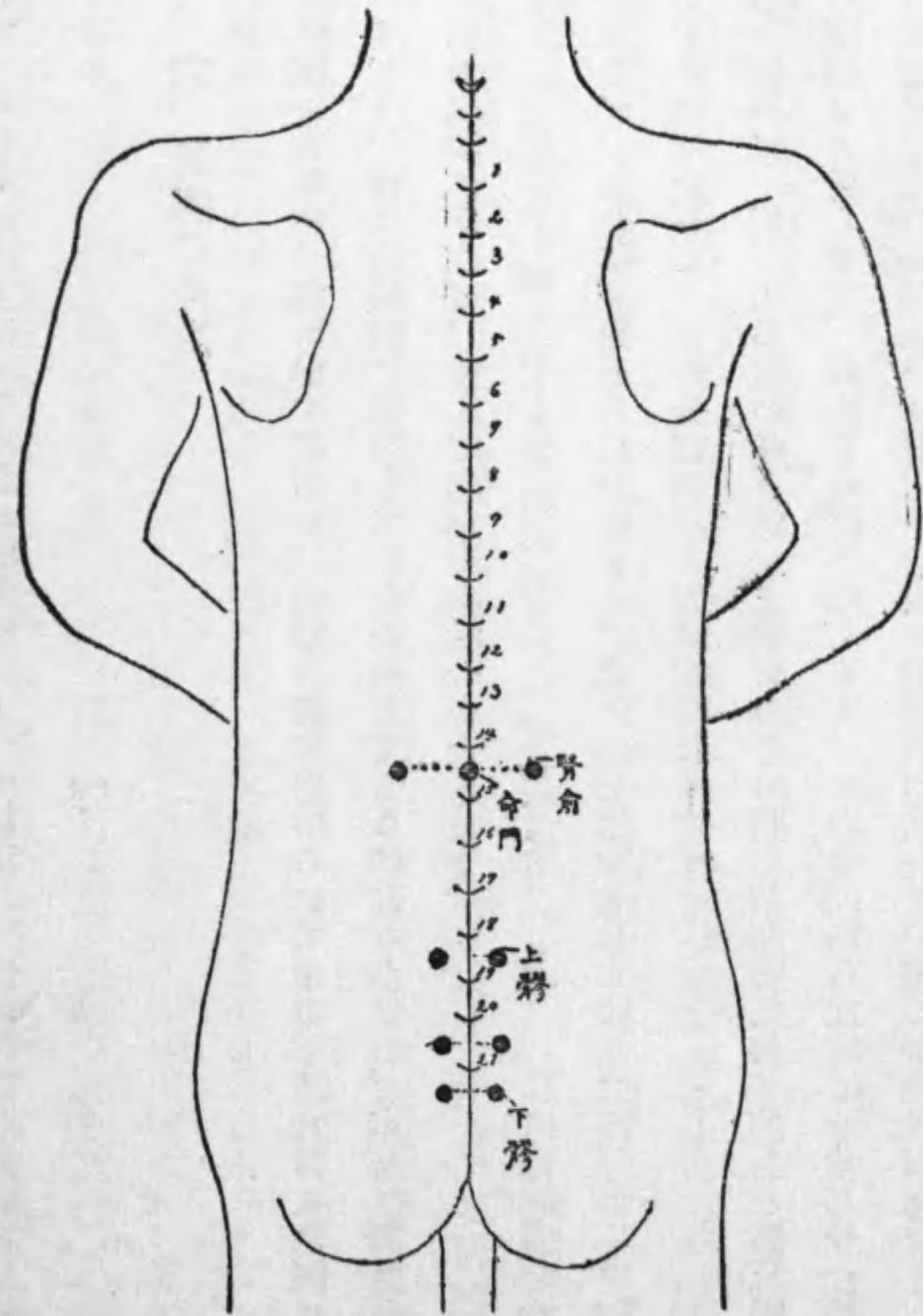
六、淋病の灸治

淋病を治す灸は種々あるが、圖に示す場所が、普通一般に用ひられてゐる。讀者はこの圖に就て自ら灸をおろすなり、或は灸點醫に依頼して灸をおろしてもらはれるが良い。東京に御出の方は、私の研究所にお出でになれば、悦んで場所を御教へいたします。

『腎俞』と云ふのは脊椎第十四と第十五の間の兩ツキ一寸五分ほどの處で、これは腎臟病を治す主治灸の場所であるが、これは是非とも第一にする、次に『上髎』もしくは『次髎』か『中髎』かのいづれにかすゑねばならぬ。その灸穴の取り方は次の通りです。

脊椎を大椎から數へて、第十四番目の骨と第十五番目の骨の間の凹みの處即ち第二と第三腰椎の間の處を第六圖のイと致します。此處を命門めいもんと申します。この命門めいもんから左右に一寸五分(註)の兩點を腎俞と申します。この『腎俞』は淋病や消渴や腎臟病の名炎で、體の新陳代謝をよくし、

第六圖



體が病菌を殺す力を大きくするために、第一にすえねばならぬ處であります。

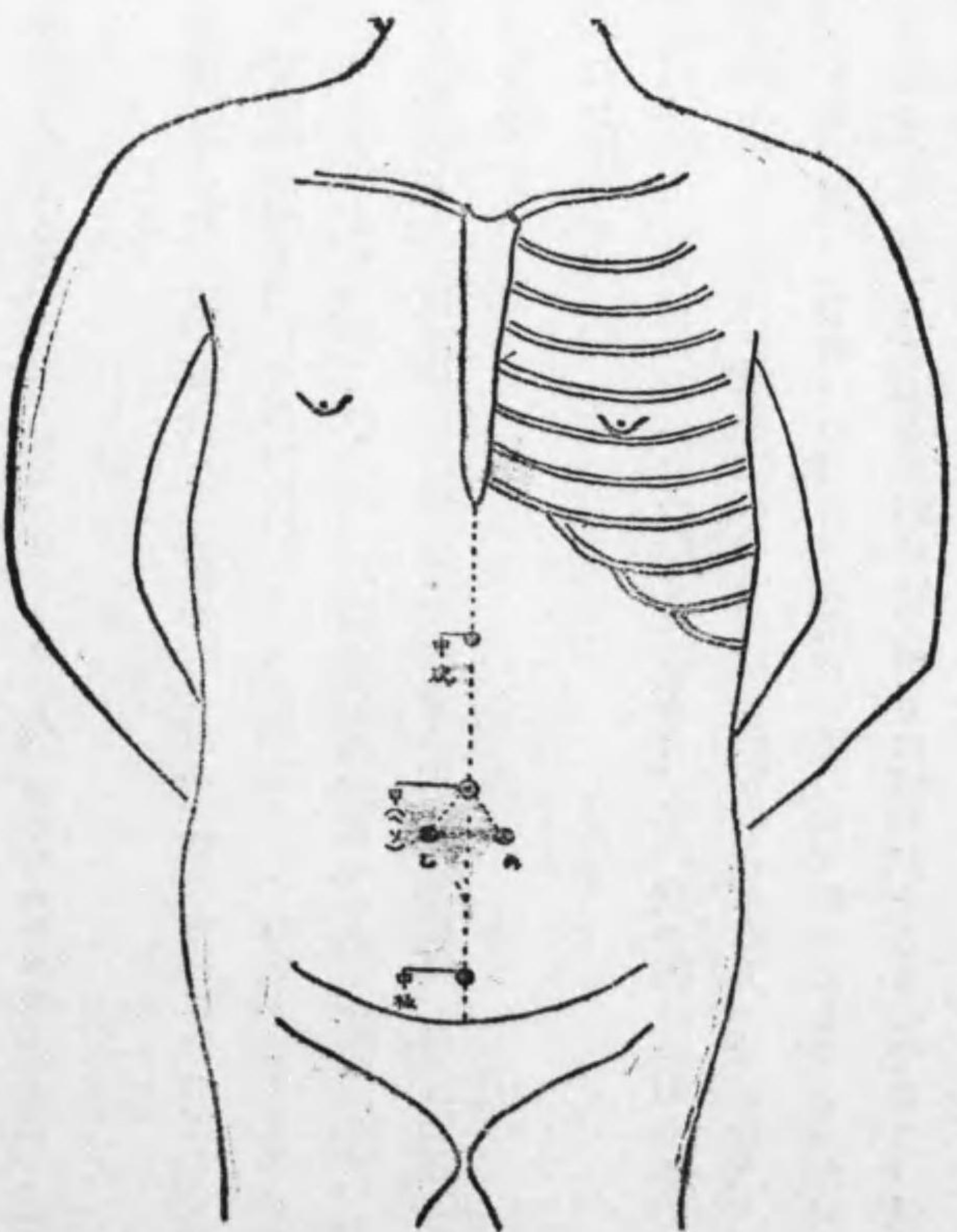
註 こゝに云ふ一寸五分と云ふのは、金尺や鯨尺ではありません。前章の「灸の數と寸法」と云ふ處をおよみ下さい。

脊柱の第十八から尾骨に至るまでは、癒合して『薦骨』と云ふ一個の骨板になつてゐます。さて此の薦骨には、この骨が一つづゝ別れてゐた痕跡として、左右に八つの穴があいてゐます。この穴の一番上の穴を上髎と申します。第二の穴が『次髎』第三の穴が『中髎』第四の髎が『下髎』となつてゐます。こゝに灸をすえるので、これ等の灸穴は睾丸炎、卵巣膿腫、子宮筋腫、赤帶下、白帶下、子宮脱垂症の名灸です。

次に腹部の御灸を申し上げます。

次に腹部の灸であるが、臍から陰莖の方へまっ直ぐに下ると、毛の生へ際に骨があるその骨の一寸程上の處を中極と云ふが——これを學術的に云へば耻骨軟骨接合上の方一寸五分上りの處である——其處にも灸をすゑ、更に『中極』の左右五分ほどの處の『大赫』にもすゑるが良い。副睾丸炎の場合には、直接に副睾丸の上にするが良い。直ぐに痛みが止るものである。但し此場

第七圖



合には辜丸が腹の中へ入らぬ様に辜丸の根元を握つて居らねばならぬ。

また足を曲げると膝の内側の處にシワが出来るとそのシワの尖端を『曲泉』といふが、其處にすゑると良い。尿道が痛んでならぬ人は、足の親指の内側の爪の一分ほど上の『隱白』といふ場所にすゑるが良い。灸と薬と併用すれば効果の早い事は申すまでもない。

以上お教へした處方は、私が責任をもつて申し上げる名薬であり、みな淺田宗伯處方全集の中に光つてゐる名處方でありまして、私は西洋に對しても十分に誇つて良いと思つてゐます。

而して若し以上の處方によつて、各自が治療して治らぬ時は、何か特殊な疾患であらうから、私の處へ相談の手紙をよこしてほしいものであると思ふ。それ等の人の體質は普通でないので、或は他の淋病の處方が効くかも知れぬから、それをお教へするつもりである。と云つて私は茲に公開するのは第二流第三流の處方でなく、第一流の處方であつて、此後お教へする方法と、兄たり難く弟たり難い處方であるのであり、それ等の處方が人々の體質によりて、意外に効を奏する事があるかも知れぬ事を豫想しての話である。特に注意せねばならぬのは、各自が薬店で調合する場合に薬が悪いために効かぬ事で、私は自分で調合して効かなかつたと云つて尋ねて來られた

方に、私の研究所の同じ薬をさしあげて全快してゐる。漢方が盛になりかけると共に良い加減の薬が横行して困る。それで御自身で薬を御調合の場合は、どうか十分に信用の出来る店から、優良な薬を選んで御買ひ求め下さい。

淺田宗伯先生の話

淺田先生は、皇漢醫界が生んだ最後の偉人で、この世に遺した業跡は實に大きいものがあつた。業跡ばかりでなく、その人と爲りもまた一世の讃仰する所であつた。凋落の極頂に達した皇漢醫方が、近時に至り急流奔馳の勢を以つて、復興の途程に歩み出したことは、良い物は終に亡びないといふ、道理に因るとはいへ、先生が潜蓄しておかれた、人と業との力が、その多きにあることは、何人もこれを否定し得ない所であらう。時を異にして世に生れた吾等は、親しく薫陶の恵に浴することを得ないけれども、道を同うして、その後を遂ふ者は、平生深く先生の學徳を敬慕して止まないものである。今こゝに先生が數十年間の心血を傾け盡して成つた、處方全集を編譯してこれを世に問ふの機會に於て、先生の傳記を草することは、最も愉快なる義務であると思ふ。しかし他人の品評に聞くよりも、先生自らの告白に採ることが、却つて眞を得るに近いとも考へられる。よつて自叙傳——橋窓書影の巻頭に見ゆる栗園自序と題する原漢文に聊か自由譯を試み

て——まづ紹介する。

X

余の祖先は源頼光の第五子、乙葉三郎頼季である。始め攝津に住み、後信濃に移りさらに孫子の時代になり、筑摩郡内田郷淺田莊に住して以來、淺田を以つて家名とすることになった。世々木會氏に仕へ、木會氏が亡んだ後は、同じく信濃源氏の一族である小笠原氏の配下になった。ところが先祖某が、桔梗が原の役に武田氏と戦つて斃れ、遺孤は乳母に抱れて、家臣従者僅か四人と共に漸く逃れ、小笠原氏の封邑栗林の里に引込み、その後は再び主を取つて食祿に附くことはなかつた。その後徳川氏が覇業を成し遂げて、天下を治めるに及び、余の家系を考慮されて宅地五區を賜はり、主従はそこに住し、世々農業を營んでゐた。

余の祖父は名を式藏と言ひ、東齊と號し、幼い時から才氣が勝れ、文筆を善くするばかりでなく醫藥のことにも深く通じてゐたので、里人から非常に敬愛された。妻女は百瀬氏の女で、その間に四男一女があつた。長男は即ち余の父で、名を惟諧、字を惇篤と言つたが、多くは字の方で呼び慣れてゐた。號を濟庵と言つて、幼い時から松本の儒者木澤天童に従つて經義を學び、後に

堀内桂仙に就いて醫術を修めたが、醫業は郷土民の間に大に褒め稱へられた。横山氏の女を娶つて、その間に四男三女を擧げた。余は文化十二年乙亥五月十三日、栗林村に生れ、幼名を直民と呼ばれ、後に惟常と改めた。字は識此、栗園はその號である。これは人々が生れた栗林村の名をとつて呼んでゐたが、遂に號となつてしまつたのである。

余は生れつき非常に健康ではあつたが、たゞ性質が愚鈍の方で、幼少の時は、孝經、論語、詩書の句讀等を父に教はり、また左氏文選を木澤天倪に學んだが、どうしてもその義を解すことが出来なかつた。師匠もこれには閉口して、見下げてゐたやうである。十五歳の時、物茂卿の徂徠集を手にしたので讀まうと思つたが、その文が難解で讀みづらく、大變苦しんだことがあつた。また友達と一緒になつて、戰國策を讀んだことがあつたが、これもまた解しがたく、遂ひに史記列傳と照し合せ、その評林の説明によつて、漸く理解することが出来たこともあつた。讀書はこんな具合であつたが、志氣の方は、一般の兒童とは多少變つてゐた。暇さへあれば、古の英雄豪傑の傳記を讀んでその人物を慕ひ、同じ氣持になつて、今に見ると常に心の中に絶叫したものである。祖母もまた常に余の側に來られて、厳しく監督をしてくれた。

然しながら、これだけでは到底志を得ることが出来なかつたので、さらに高遠藩の中村仲餘に就いて醫術を學び、引續いて京都に上つた。京都では、吉益川越二家の門生と共に、中西深齋に就いて傷寒論を研究し、また餘暇には熱心になつて、當時の名醫と稱せられた人々を訪問し、その意見を聞いて、ほど醫術の大義を知ることが出来たのである。

さて郷里に歸つて、いよ／＼醫者として一家をなさうとしたが、どうも田舎は思はしくなかつた。それで東遊を決心し、父の許可を得て今度は江戸へ出た。

江戸で初めて業を開いた頃は、その經營に實に苦辛慘憺したものである。然も三年過ぎても、世人は一人として知つてくれる者がなかつた。たま／＼一知人が、醫官本康宗圓君を紹介してくれたので、余は面會に出かけた。同君は余を一見して

「君の眉宇には、篤志が充ち溢れてゐる。先づその人を選んで、益を受けたらよいであらう。」と言はれ、多紀菫庭、小島學古、喜多村栲窓の三先生を紹介してくれた。余はその後これら師友の助力を得て、漸く業務の方も少しは榮えるやうになつた。

ちやうどこの頃、田舎にゐた父が傷寒にかゝり、病が次第に重くなつて、遂に危篤といふ通知

が余の許に達した。余はこれを知つて非常に驚き、取るものも取りあへず故郷に飛んで歸つたが、悲しいかな、父は既に一日前に逝かれてしまつてゐた。余はたゞ涙のみ湧き出で、如何にすべきか途方にくれた。するとそこへ母が來て、泣きながら言はれるには

「父の病が最早や望もなくなつた時、親戚の人の中にお前のことを質ねた者があつた。すると父は、あれは志のある者である。あれに就いては今更何も言ふことがない、と答へられ、この言葉を出されると共に急に病氣も重くなり、遂にそのまゝ逝かれてしまつた。兄弟は皆、一人では何事も出来ない者ばかりであるから、お前だけでも、早く一人立ちの出来る身分になりなさい。弟達を激勵するためにも、先づお前自身が勤勉刻苦して、立身出世しなければなりません。」とお諭しになつた。余はこれ聞いてます／＼悲歎が加はり、肝腸も裂くる想ひであつた。かうして數句の間裏に服してゐたが、或る日余は、余の將來に就て斷然として言ふところがあつた。

「余は立身出世し、人間としての道を行はうと努力して、然も今日のやうな状態を招かうとは、實に言葉にも現せぬ悲しみである。余は今後子としての孝行を逆に行はう。先づ名を揚げ親を顯し、亡父と地下で遇ふ時、恥入らぬやうな人格を作らねばならない。」

そこで祖母や、慈母及び二弟三妹を親戚に預け、余は再び江戸に歸つた、その後は殆ど晝夜の別もなく勉勵し、また業務をきりつめ、浪費を省くことを心掛け、餘分の金子はみな郷里に送つて、老母を慰めることに力を盡した。數年後弟妹達もそれ／＼落着く先を得、また墳墓の地をも得た。

さて余は都に居て、當時世に迎へられる醫者として、一家を構へてゐる人に就いてその状態を見ると、學問を講義してゐる者は、たゞ先人の教の解釋とか、或は古文の讀み方等のみを主として、一向に實際上の治療の術に就いては心を入れてゐない。またこれに反し治療に従事してゐる者は、學問を積むことが少なく、たゞ術を誇つて世の中に媚びやうとしてゐる。不仁もまた甚しいのである。余は慨嘆し深く心に誓つた。

「醫家たる者が、眞の醫道を失つたことは實に久しい。古からの漢の醫經々方といふやうなものはだん／＼廢れ、趙宋以來の脉病症治の學は全く講ぜられなくなつた。そのために後世醫道を志す者はその方針に迷ひ、誤つた學び方をするので、自然に學と、術とが分離し、この状態では全く相反するものになつてしまふ。これを改めるには少なくとも正しい醫の道を盛んならし

め相反して行く學と、術とを統一するより外に方法はない。」

余はかく決心し、その後間もなく「陳無擇嚴用和」と「大醫局程文」との兩書に倣ひ先づ「脉法私言」を著した。この書は、氣血の先機、疾病の進退、死生の辨を明細にしたものである。この書に次いで「傷寒辨要」と「雜病辨要」を著し、病情、病機及び病の原因理由を論じた。また次に「傷寒雜病」並びに「險症百問」を著して、病症の陰陽、表裏、虛實、寒熱、眞假、合併を論じ、さらに「傷寒翼方」「雜病翼方」及び「古方藥議」を著して、詳かに治方の運用化裁と、藥性の合和効用を論じた。

以上の著述によつて、治療法の正規も一定し、また、課業にも階梯が出来て、門人も大に進歩し、業を成すことが出来たのである。また余は、醫道の壊滅して行くのは要するに異端の侵入によるものであつて、今日我が國の醫道に於て、楊墨の位置に立つてゐるものは、西洋の醫道に外ならぬと思ひ、「原醫警醫紀事」「西醫摘要」「内科闡微私評」等を著して、洋方に對する論駁を試みた。また當時は幕府の末期で、しば／＼所々に征伐が行はれた時であつたから「行軍備要」を著して、治療上洋醫の知らない點を補つたのである。またその頃瘟疫が非常に流行し、當時の醫

者は、これをたゞ霍亂と思つて治療を試みたので、夥しく死者のあつたことがある。余はこれに對して「治瘟論」を著し、それは霍亂ではなく熱厥であることを主張し、それに對する療法を施して、病者を回復することが多かつた。この病はその後毎年流行するので、洋方の醫者は溫度器で病人の體溫を測つて見て、始めてそれが熱毒によるものであることを知り、大に余の意見に感服したのである。また前々から皇國醫傳の不備なことを慨かはしく思つてゐたので、術業の眞精、治績の美事、性靈の崇高といふやうな方面の事柄を集めて、冊子を作りあげた。それが「醫傳前後編」「先哲醫話」「杏林風月」と名づけた書物であるが、後に官からの命令で、「醫傳」はアメリカの學校に寄贈した。また「醫話」の方も、支那の使節張斯桂が持ち歸つて、かの地の四庫文庫中に收めた。世人はこのことに就いて、國の譽であると讚賞してくれた。

さてこれに先だつこと十餘年、余の醫術が非常に擴まつたので、その名聲を聞いて諸侯が余を招聘しやうとしたことがある。その時余は、たゞ醫學に對して奮勵するのが、余の唯一の任務であると考へてゐたので、諸侯からの希望は一切斷つてしまつた。然しそれにも拘らず、笠間侯と巖邑田侯からは、學資の一端とするやうにとのことと扶持米を賜つた。

安政二年のこと、幕府では「醫心方」を躋壽館で校正することを余に命じ、白銀二錠を賜つた。また越えて三年には、閣老の一人關宿侯から昭徳公に謁見するやう申傳へられ、のみならず徵士の稱號を賜つた。四年八月には、當時駐節のフランス公使の病氣に關し、數ある醫者の中誰一人としてよく診察する者がなく、幕府では余に名醫の周旋を依頼した。幕府では衆議の結果、遂に余をして診察させることに一決し、參政官敦賀侯に伴はれて伺候した。これは間もなく治療することが出來、それに對し官では余に白銀二十錠を賜つて賞せられた。また當時のフランス皇帝も自鳴鐘と羶羯を贈られて、余に感謝された。

慶應二年、昭徳公が大阪で病氣に侵され、殊の外悪くあらせられたので、急に余を拔擢して侍醫とし、上診を命じた。余は早速參上して診察したところ、それは脚氣腫滿で、將に上攻衝心しやうとする状態であつた。そこで余は衝心の兆候五ヶ條を陳述して閣老に呈上した。はたしてその言葉の通りであつたのである。江戸に歸つて後は天璋、晴光、本壽三夫人のためにヒを執るやうに命ぜられ、世傳二十人口と扶持米二百苞を賜はり、法眼の位に叙せられた。また幕府傾頹の日に當つて、和宮と天璋夫人との命を奉じて總督宮に拜謁し、江戸城下の鎮靜を願ひ出で、許を

得て城下の民を安んぜしめることが出来た。その功勞によつて章衣一襲を賜つた。

余は元來學識には乏しかつたが、然し常に世を憂ふる念に驅られ、幕府末路の頃は執政の諸士と共に、しばし時代の思潮を論じ、互に腕を扼し卓を叩いたものである。殊に親交の深かつたのは、厩橋侯、川越侯、吉井侯、川路左衛門、水野筑後、小栗上野、黒川近江、井上信濃、佐々木信濃の諸君であつた。この他に藤森天山、羽倉外記、林鶴梁、佐田介石等、國家を憂ふるの士とは、出家處士の別なく、親交を續けたのである。これらの多くの献言は、今は「贅談」一篇を残してゐる。

明治四年、余は住居を牛込に定め、匕を執るのを止めて隠居し、餘世を樂しまうとした。然し治療を乞ふ者は絶える日もなく、玄關には常に履物が數多く並んでゐた。また支那や朝鮮の使節が我が國へ來ると、先づ余を尋ねて診察を受けるやうな状態であつた。

明治十二年、早蕨典侍御妊娠の際は、余にその診察を命ぜられ、皇子明宮御降誕後その經過が御順調に亘らせなかつた故、更に余に命じて調藥をなさしめ、金一千圓及び官絹四匹を賜り、從六位に叙せられた、これに續いて花松典侍御妊娠、滋宮御降誕更に一年を経て増宮御降誕あらせ

られ、兩回共に余に調藥を命ぜられた。

明治十六年八月、兩宮同時に胎癘にお罹り遊ばされ、余は余の力を以てしては、如何ともお手當を盡すことの出来ないことを知り、御辭退申上げたが、果して兩宮はおかくれ遊ばされた。余は直ちに辭表を奉呈した處、上はその誠實をお憐みになつたがお許しはなかつた。余はこのことあつて以來、悲しみは深く心に潜み、遂に老年の身も考へず、毎月一回同僚と會して、保嬰治法の研究を初めた。そして間もなく「養幼新編」を著したのである。

余は元來片田舎に生れた者であるから、良師友には乏しかつた。のみならず學識は薄く淺い者であつたから、經義なども深く研究して見ることも出来ず、たゞ實踐躬行といふことばかりを心掛けてゐた。故に門人に對しても、日常は論語を讀ませ、醫書の方では主として傷寒論を讀ませた。傷寒論もまた、事實を本として研究したもので論語とその主旨がよく似てゐるためである。余は文辭などは刀圭の餘暇、深く學ぶことも出来なかつたが、感慨に襲はるゝまゝに筆を執り、己の言はうと思ふことをそのまま書き上げた。少くとも意達して止むことを本領とした。世人が笑つてその著を非難し、或は大に嘲罵することがあつても、それと共にますます喜び、自負して

省みやうともしなかつた。また詩に至つては、格調整律さへも學んでゐない。もし酒席に列し、たけなはとなつて興味が湧いて來ると、天真爛漫たる氣持で、口から出て來るままに詩を賦した。そして風中の竹、石間の泉、風行けば鐸は鳴り、みな自然に音響をなしてゐる、何故に規模修飾の必要があるのかと獨り嘯いてゐた。然し實は昔少しばかり海鷗、嚶々の二社で詩を學んだことはある。人々は余を賞して、歡樂の最も至れるものと言つた。こんな風に少しも拘はることはなかつた。但し醫術に關することとなつては、寢ても醒めても心から離れることはなかつた。人が痼疾で悩んでゐるとさながら自身のことのやうに思はれて、心を潜め考へを深くして、その治療に極力盡すことを欲し、日も夜も書物を手にして、今までにない手當てを知り、月々にその新しく知つたところの手當てを行つた。これが余の志であつた。また斯道の衰微して行くことが如何にも慨かしく、府下或は諸縣下に病院を設け、門弟子をして、衆人を病苦から救ふことにとめさせた。近頃海内の志ある士が、この企てを聞いて同じやうに起つたといふことを耳にして、余の愉快は圖り知るべからざるものがある。

國內には余の業を受けた者が數百人あるが、その中の高弟とも云ふべき人々が、志を共にし力を合せて、明治十四年に余の壽藏を東台山の中に建てた。そして成田山の默堂師に依頼して、その顛末を書かせたが、それは寂然不動と名づけられたのである。これで余の爲すべきことは畢つたといふものであらう。然しながらなほ餘命もあることではあり、且つまた一介の書生の身を以つて、その名聲が海の内外に擴まり、曾つては幕府に拔擢せられ、更に宮中の恩寵を蒙つたといふことは、實に千載一遇のこと余の感激これに勝るものはない。余は自身の不文なることを愧ぢつゝも、こゝに聊か今日までの來歴を述べた次第である。またこれを年譜として、子孫のためにも示さうと思ふ。

明治乙酉春日栗園老人牛渚耕耘筆硯齋中に書す。時に年七十一歳

X

前掲の自叙傳を草せられてから、ちやうど十年の歲月は流れ、明治二十七年（西曆一八九四年）三月十六日、わが淺田先生は八十一歳の高齡を以つて、この世に於ける最後の呼吸をされた。

この十年間には、ことさらに目醒ましいといふやうな活動はされなかつたが、然しまた世務を避けて、悠々風月を友として楽しむといふやうな、隱居生活にも入らなかつた。毎朝鷄鳴を聞く

と、必ず床を離れて書齋に入り、燭を點じて書を読み、或は文を作つた。そして東方の白む頃には、顔を洗ひ體を淨め、寒氣酷烈の朝でもこれを怠ることはなかつた。それが終ると再び書齋に入り、筆を執つて日記を録した。朝飯がすみ午前九時になると、必ず診室に入つた。診療を請ひに来る者は、時によつて増減はあつたが、一日二百數十人を下らなかつた。午後二三時頃には診療を終へて往診に出かけ、十年一日のやうに、この恒例を破ることはなかつた。平素は、極めて健康で病氣といふものを自身では経験したこともない程であつた。長逝前一ヶ月、二月十五日に病床に就かれるまでは、平常と何ら變ることもなく、病者を診療して居られたといふことである。

先生は或る意味に於ては、君子型といふよりも豪傑型に屬する人であつた。随つて日常の言行にも、頗る常人とは異なるものがあつた。酒は最も好むところであつたけれども、亂れて細心の用意を失ふやうなことはなかつた。それは自ら藥室に勿誤の二字を命名して、誤まる勿れと、自ら深く戒めてゐたことに照しても、その一斑を知ることが出来るであらう。

病床に就かれた翌日、嗣子恭悦に墨をすらせ、門人に言ひつけて、自身の胸の上に寂然不動の四字を大書させ、傍の人々を顧み、自分の用意は既に整ふたと豪語したことなどは、一些事では

あるが、その人となりを眼前に彷彿せしめる。

先生は往診に出かけられる際は、常に輿こしを用ひられ、人力車や馬車等を用ひなかつた。これは先生が藥方に於ても、古方を愛し新方を愛さなかつたが、その反影とも見るべきものであつた。やゝ奇を好むのではなからうかと思はれる程、極端なものもあつた。家規などはその一つである。

一 華族にして新に請診の向は大抵謝絶すべし。何となれば、近來皆西洋に心酔しその餘唾を舐るもの多ければなり。

但し從來依頼の邸はこの限にあらず。

一 藥價を問ふ者あらば拒絶すべし。それ醫は仁術を旨とす。藥價を貪り、診料を採る者は、商賣に劣るが故なり。

但し病者志を以つて謝儀を致すものは、敢て拒むにあらず。

一 塾生洋書を読み、洋服を着する者は、速に放逐すべし。當家數十年、周の職を奉じ漢の術を用ふるなり。他書生と雖も、洋癖ある者は出入を許さず。

但しその職にありて洋服を着する者は、この限にあらず。

この家規などは随分極端ではあるが、要するに時勢の非なるに對する反激から出たものであらう。然しながら、先生は決して洋方の長所を知らないのではなかつた。またそれを容れる度量が缺けてゐたのでもなかつた。先生が一面に於て洋醫傳を著されたことから考へて見ても、ひそかに洋方に關しても、眞面目な検討を怠らなかつたことが、充分に窺はれるのである。

巨星一たび逝くとの報が喧傳せられると、世を擧げてこれを哀惜した。その葬儀に參列した者は凡そ七千人の多きに達したといふことは、生前先生の治療した患者の凡そ七割が、全く施療であつたといふ美蹟にもよるであらうが、また實に先生の偉大なる徳望の然らしめたものであらう。葬儀の日、牛込横寺町の本邸を出棺すると、近隣の商店は業を休み、店頭に香を焚いて吊意を表した、また道端には旅装をした老男老女が多く見受けられたが、それは日頃先生の恩澤を蒙つた近郷の農夫達が、遠路を踏んで見送りに來たのであつた。菩提寺は本郷丸山の本妙寺、遺骸は谷中天王寺の不動尊石像の下に葬られた。

久しき沈滞から目醒め、皇漢醫學が大なる聲を以つて復活し始めた今日、もし先生の靈が存するならば、その喜びはまたどんなであらうか。先生の如きは死して死せず、氣乾坤に充ちて、靈

氣なほ存するものといふべきであらう。左の一詩は、先生の志の尋常でなかつたことを知るに足る。

人心如面各不齊
 治術何同東與西
 物議紛々千歲後
 光風霽月待幽栖

漢方不老長壽談

私は新聞や雑誌の寄稿又は數種の著書によつて、誤つて虚名を博したと見えまして、色々な方面から講演の依頼を受けて、壇上に立たされますが、何時も先づ第一に聴衆諸君を失望せしむるのは、その虚名に關連して想像されてゐる中山忠直なる人物と、實物とに甚だしい懸隔がある點に存する様であります。諸君は何時も漢方醫學などをイヂつてゐる人間は、白鬚の威風堂々たる人物の様に思はれてゐる處へ、ひよつこり御覽の通りの小僧が現はれるのですから、失望を買ふのも無理はないと存じます。

然し私の立場は所謂、漢方醫者ではありません。漢方醫學に新しい生命を吹き込んで、その復興を企つる事は、人類特に日本人の幸福を増進する唯一の路であると信じまして、今や第一線に立つてゐる戰士でありますから、この年齢この容貌で少しも差支がないと存じます。——否我々青年にして、始めて企圖し、且つ完成し得る大事業であると確信してゐます。私はこの世から病

人を無くしたいと云ふのが其理想であります。だが私は元來、筆の人間でありまして、口の人間ではないのでシヤベル事には極めて不得手であります。友人は私の講演を評して、横板に飴を流した様だと申しますが、名講演に飽いて居られる皆様方には、却つてこうした若者の下手な話も御一興かと存じます。

さて私が漢方醫學の研究に志した動機を簡単に申し上げて置きたいと存じます。漢方に入る動機は極めて永いのですが、一番近い動機は私は非常に弱い母をもつた事からであります。母は若い時から非常なヒドイ貧血性の心臓病で、且つ腎臓も弱く顔も體も黄疸の患者の様な色で、イヤな水腫れでブヨブヨと肥つて居り、三十の時からリユーマチにかゝり、母の伯父や従弟や兄や弟も親族の殆んど全部が醫者である處から、手を盡し品をかへて治療をして見ましたが、益々悪くなる一方で、その中に肺炎をやつたり肋膜炎をやつたりし、とうとう四十五歳には手が殆んど動かなくなつてしまひました。子供として母のかうした不自由を黙つて見て居るに忍びないで、何とかして治したい物だと考へ、西洋醫學ではトテもダメだ、こりや一つ野蠻醫學として棄て、省られてゐない漢方にでも頼つて見やうかと思つた一心から學び始めたのが病みつきで、とうとう漢方

復興の烽火をあげる事になりました。御蔭で母のリウマチも全快し、久しぶりで逢ふ人は二十年は年が若くなつたと申します。

今回當クラブの光榮ある壇上に立たせて戴くことになりました、その中介者から『不老長壽』の漢方の秘法を公開しろと云ふ御註文でありましたから、私の蒐集しました文獻の中から、そうした方面の物を拾ひ出して、まづ之から先きに申し上げたいと存じます。元來不老長壽なるものは、我々人類の生活に醫學といふ物が芽をふいて以來、何千年もしくは何萬年の間、人間最大の希望として常に要求せられてゐた物であります、神様はそうそう人間の贅澤な慾求を充ててくれる物ではありません。一服の薬や、或は一回の手術によつて、白髪の老人が紅顔の美少年に變ずるとか、閨房の精氣が既に衰へた者が、青春の若さに返へると云つた様な奇蹟は、天意に逆ふ者で、今日までソナ発見が無いのみならず、恐らく未來永劫にソナ奇蹟は現はれやうとは信じられませぬ。

然らば不老長壽の秘法なるものは、未來永劫にわたつて発見されないかと云ふに、そうではありません。その方法は古人が既に研究して居り、諸君の努力によつては、青年にさまで劣らぬ元氣をもつて、百年の壽を保ち得ることが、必ずしも至難ではないと信じて居ります。それを之から順々にお話しする次第ですが、普通一般に元氣があるとか若いといふ事は、性慾を標準尺度にして云はれる様ですから、先づ第一に閨房の精力を増進する薬から申し上げます。この種の薬は總括して補腎薬と申さるゝ物で、印度のことは良くは知りませんが、温帯國としては支那から古くから研究された國はない様に思ひます。

第一に陰痿の薬を申し上げます。此陰痿が書物に出てゐる一番古い文獻は、素問であります。婦人の肌に觸れたのみで精液をもらし、房事を遂ぐる事が出来ぬのや、或は長年奉公か何かをしてゐて妻を娶つて、房事に臨んで陰痿状態を呈するのは、怯と云つて眞の陰痿ではなく、艶本を讀ましたり、同衾敷を重ねたりしてゐる中に、自ら治るものであります。眞の陰痿は陰莖が常に麻痺不遂の氣味があつて、陰事に臨んでわづかに勃起しても、直ぐに痿びてしまつて、心は矢竹にはやれどもとでも申す有様なので、男の陰痿は先づ何とか出事ぬ事もありませぬが、婦人の陰痿は房事に臨んで○○○○○○用に堪えず、難治であると云ふ事です。果して然るか否かは、私が申し上ぐるより、却つて老齡の令夫人を有せらるる方からお教を願はねばなりません。

陰痿の薬として、古來選ばれてゐる方法は澤山ありますが、その代表的なものをあげれば、柴胡龍骨牡蠣湯、八味地黄丸、烏苓通氣散、露蜂房などであります。——これ等の薬に就ては、私はまだ其必要を感じる様な年輩ではありませんから、自分で薬の効果をためして見た事がありませぬが、やつてゐる仕事は漢方の研究と云つた事なので、良くこれ等の薬の必要を感じられてゐる方から、御相談を受けるのであります。それで色んな古い本を引っぱり出して、薬の調合の仕方を御教へしてゐますが、どうも前に申し上げた様な薬が、最も効果があるらしいのであります。處方を知りたい御方は、後からイクラでもコツツリ御教へ致しますが、先づ第一に効果があると云はれてゐる『柴胡龍骨牡蠣湯』であります。この處方は

半夏四分	大棗三分	柴胡二分	生姜二分	人參一分
龍骨五分	鉛丹三分	桂枝三分	牡蠣三分	茯苓四分
大黃五厘				

と云ふ割合であります。この中に龍骨が主薬であります。この龍骨は前世紀に棲んでゐた象の骨であるとの事で支那の四川省の成都府、山東省の沂州府、山西省の大原府等が産地で追々土地

から掘り出される分量が減つて行きますから、せいぜい今の中に御飲みになつて置かるゝが良いと思ひます。この龍骨には昔面白い話があります。京都に住んでゐた或人の子供が五歳になつても陰莖が出て來ぬので、父母が清水觀音におまわりをして歸りに茶店へよつたところが、其處に一人の白髪の老人がゐて、どうしたのだと尋ねるので、實はコレコレであると話したところが、老人は私は良い薬を知つてゐる、上等な龍骨を粉にして、毎日のんだなら治ると云ふたので、早速それを試みたところが果して老人の言つた通り、局部が常人の通りになつたとの事です。此話は『方輿輓』といふ本に出て居り、其著者の有持桂里の隣家の出來事であると誌してあり、實話だと云ふ事であります。——この柴胡龍骨牡蠣湯を一寸加減すると神経衰弱の名薬になるのであります。——神経衰弱の患者で直腸筋が棒か板かを立てた様に拘急してゐる者が澤山にありますが、この患者には他の神経衰弱の薬では治らぬので、必ずこの柴胡龍骨牡蠣湯を用ひねばなりません。また癲癇も症によつては此薬で良く治るのであります。私は好んで患者に用ひて居り、良い成績をあげてゐます。

森立之の『遊相醫話』と云ふ本には、大柴胡湯を用ふる毎に、陰痿に神効があつたと記載して

わますが、この大柴胡湯は元來、癩性を治す主藥で、これを以て一時的なヨヒンピンの代りに使つた事は、面白い例であるとして御報告申し上げます。この外に陰痿をなほす藥の處方を一々、こんな席上で申し上げても仕方ありませんが、民間藥の如く、藥一品で興奮劑に使つてゐるものは、何首烏だとか淫羊藿^{カク}だとか陽起石だとかオットセイの男根、肉苁蓉^{ソウロウ}だとか露蜂房だとか鹿茸だとか澤山に色々あり、此方面の事は別に申し上げなくても、皆々様が御存じであらうと思ひます。淫羊藿はイカリ草と申し、羊がこれを食ふと淫慾が増進して一日に交尾を百回すると云ふ傳説があるので、何首烏は和名ツルドクダミで或老人が山へ行つた時、それが木にからみ附いてゐる處が、誠に男女交合の工合に似てゐるので、これを飲んだら定めし精力が強くなりはしないかと感じて、それを堀つて歸つて煎じて飲んだら、老夫婦ともに若返つて子供が出来たと云ふ御伽噺みたいな話から流行を來した物で、これを用ひた人の話には餘りキカヌと申しますし、餘りに連用すると腎臓を害しますので、若し何首烏を愛用されてゐる方がありましたら、何とか別の方法を御考へになつた方が良くと考へます。

肉苁蓉は富士山や日光等に産する菌類に入る寄生物で和名はキムタラゲと申します。茲に見本

を一つもつて來ましたが、補腎藥としてはオットセイの睾丸以上だと申します。どなたでも御入用な方は差上げますから、御持ち歸りになつて御用ひになつて見るのが良いと思ひます。オットセイの男根も茲にあります。これまた御入用な方に差し上げます。すべて陽起石にしても肉苁蓉にしても露蜂房にしても、みな酒でのむのが原則となつて居ります。酒の力とあひまつて、大に効力を發揮するものだと思ひます。

種々のピンの藥の中で、私が友人達に分けて最も効能がありましたのは、三四年前から私の友人である支那の或漢方醫が、秘かに送つて來てくれてゐる或丸藥でありまして、何首烏や陽起石やトツカピンなど云ふ物を愛用してゐる友人にすゝめて見ました處が、これは實に好評でありまして、一番に副作用がなくて、最も効果が適切であると云ふ評判です。現に茲に居られます林君などは此藥の禮讚者で、私よりも實際上の効果をよく御存じの筈です。この藥の處方も大略は見當がついてゐますが、未だ確實に御報告申しますまでには至つてゐません。

支那といふ國は楊子や墨子の如きアナクレオン以上の快樂主義者が生れた國だけあつて、實に肉慾には徹底した民族であります。上帝王から下苦力に至るまで、肉的快樂の追及をもつて人生

の目的としてゐるといふ有様で、帝王が戦に勝てば、先づ第一に要求するのは其國の美女佳人である事は、既に皆様方の御存じの事でありまして、佳人がそれらの肉慾のイケニエとなる事は阿房宮の賦か何かで人口に膾炙し、國よりも富よりも女を重んじたのでありますから、従つて閨房の慾望を満足せしむる方法は非常に發達したものと見えます。支那の帝王と云へば、皆張作霖の如きナリ上り者が多く、大理想、大信念の人道の戦士ではなく、單に權力をもつて慾望を満足せしむる事以外に人生を知らぬ者が、權力をもつて研究を強制した點が、特にこの方面の發達を助長したものだと思ひます。

然しこれ等の以上のべました事は、要するに我等の天壽、人類全體の幸福といふ事と餘り關係がない物で、むしろ或場合によつては天壽を害して、毒藥と變ずる場合が澤山あります。漢方の醫書には四十歳以下の者は、性慾を刺戟する藥を用ひてはならぬ、用ふれば必ず精がつきて若死をすると書いてあります。

性的方面の事はこれ位にして、一般的な長命法に就て申し上げますが、これもまた私の經驗談を申し上げるにしては、年が五十歳ばかりは若い様に思はれます。それでこれまた古人の説を請

賣するに過ぎません。經驗談の方は、清浦總裁の御元氣を拜して、そこに精進すべき何物かを、お伺ひしたいものだと思存する次第であります。

一般的な長命法としては、結論は頗る簡單でありまして、要するに元氣を五體に充満せしむると云ふ事に過ぎませんが、其方法としては種々の方法があります。

人間の生命といふ物は、宇宙に於ける物理現象に過ぎぬのでありますから、つまり最も合理的な生活方法といふ事が、最も長命の方法なのであります。——では最も合理的な方法とは何かと申しますと、要するに攝生、養生といふ事に過ぎぬのであります。日光の恩恵を十分に受け、清い空氣と新鮮と正しい食物と正しい運動といふ、極めて有りふれた道理に過ぎぬので、これが東洋醫學の大目標といふ事になつてゐます。

支那の醫學の最古の書で、醫學の經典と云はれてゐる本に『素問』と云ふ本があります。これは天地間の大道理から醫學の根本を説いた物でありまして、世界に於ける醫書の中で最も權威ある聖典でありまして、現代醫學に照して見ると、荒唐無稽の迷信説どころか、實にエライ物で古人は斯くの如く研究を積み、眞理を體得してゐたかと感心させられました、その中に含まれてゐ

る根本精神を、現代流行の新しい術語をもつて云ひ現はすと、現代醫學者の想像だにつかぬ卓抜の眞理があるので、私の説が現代醫學の方向を指導する、何等かの新鮮さと力があるとすれば、この古い書物を現代化してゐる處に私の生命がある様に思ひます。此書物は黄帝内經と云はれませんが、黄帝とは黄色の帝と書くのであります。これは非常な古い本と云はれてゐますが、後代の研究によると、實は餘り古いものでなく淮南子あたりの文體であると云はれてゐますが、まあ後代の人が上古の人に名を借つて、黄帝に假託した本であるか否やと云ふセンサクは止めまして、とにかく其本の中に書いてある事は、非常な眞理であります。其本の第一卷の冒頭にある章が、有名な『上古天真論』であります。これに此様な事が書いてあります。

『余れ開く上古の人は春秋皆百歳を度て動作衰へず。今時の人は年半百にして而して動作皆衰ふる者は時世異なるか、人はた之を失へるか。岐伯對へて曰く上古の人は其道を知る者は陰陽に法り術數に和ふ。食飲節あり起居常あり、妄りに勞をなさず、故に能く形と神と俱にして而して盡く其天年を終へ百歳を度て乃ち去る。今時の人は然らず、酒を以て漿と爲し妄を以て常と爲す。醉ふて房に入り欲を以て其精を竭て以て其眞を耗散す。滿を持する事を知らず、神を御する時な

らず、務めて其心を快にし生樂に逆ひ、起居節なし。故に半百にして而して衰ふるなり。』と書いてあります。醫學最古の本に、醉ふて房に入る事を戒めてゐる處を見ると、どうも人間といふ物は昔かはらぬ動物だと云つて良いと思ひます。當今のやうに醉ふて房に入る待合流行は、天壽を害する事が多いのであります。要するに長命の法は攝生を主とする大自然にある事を道破したに外ならぬのであつて、現代人が多病で短命なのは、攝生といふ事をなさず、不自然な生活をなすからであります。

古書を見ますと、長命養生の第一法として必ず心を平かにする事を説いてゐます。即ち名利權勢に超然としてゐる事が非常に必要なのでありまして、餘りに心配したり、餘りに悦んだり、心を餘りに使ふのは良くないのでありまして、近頃流行の神經衰弱などいふ物は、心配ごとをしたり物を思ひつめたり、或は精神的な打撃を受けたりした事が、なかなか大きな原因をなしてゐるのでありますから、長命をするには、大に呑氣になつて暮すことが必要であります。つまり人間を超越する事が必要であります。甲斐の徳本と云へば日本一の名醫でギバ、ヘンヂャクの再來と云はれた人ですが、此人は牛にまたがつて、藥一貼十八文と招んで歩いた方です。三代將

軍家光が重病で他の名醫が如何ともする事が出来ぬ時、徳本を招きましたが、其時徳本は百十歳でありました。御殿醫連が薬を尋ねると、大變に激烈な處方であるので殿様の體が大切だから用ひる譯にゆかぬと云ふ、すると徳本はソソなら勝手にするが良からう自分は歸ると仕度を始めるので、困つてしまつて此事を將軍に申し上げると、將軍は體を徳本にまかせやうと云はれた。それで徳本が改めて薬を盛つて、直ちに御治し申したのであります。ホービをやらうと將軍から申されると、俺の薬は一貼十八文だから、それ以上は戴かぬと云つて、十八文をもらつて瓢然と歸つて行つたと申しますが、此徳本が死んだのが百十八歳で信州のスワ湖畔に墓があります。權勢や富貴に超然たるがために長命をした好い例と思ひます。

然しこんな精神的修養や悟りの方面からの長命法は、申し上げた處が實行がなかなか困難であります。我々凡人はどうしても物質的な方法によらねばなりません。物質的方法と申すのは、體操をするとか、呼吸法をするとか、薬を飲むとか、要するに肉體を強健にして行く方法であります。これからの等の方法を簡単に申し述べたいと思ひます。

ちかごろ色々な體操法や運動法が盛んで、新発見だとか新發明だとか云つて、しきりに流行し

てゐますが、何れも皆結構な物でありまして、ことにペンネット式の自己按摩法などは、是非とも皆様におすゝめしたいのであります。これ等は皆、新発見の如く吹聴してゐますが、ドレーツとして新発見の物はないのであります。ドレーツもコレも古書に見えてゐるのであります。體操法の一つや二つを発見したとてエラさうに云ふのは、醫學の歴史に暗い事を自白してゐるのであるか、或は誇大妄想であると思ひます。體操法には新発見は一つもないと申しても過言でなく、問題はその體操をやるとやらぬとの點にあるものであります。ペンネット式の如きは千金方と云ふ古書の第八十一卷の按摩法の篇に出てゐます。白隠禪師の『ひとり按摩』などは皆、これです。井上哲次郎さんに聞いた話ですが、イギリスのケンブリッヂ大學の教授のダクラスは長い間、支那に居た人で Kong-tu と云ふ本を書いて居り (この Kong-tu は支那の工夫といふ事をモチつて云ふたもの)、支那人の發明や発見に就て記載してゐるとの事でありまして、此中に體操の事を書いてあるとの事です。それによれば世界には二つの運動方法があり、一はオリンピック式のもので、他はスエーデン式體操で、このスエーデン式の體操は支那から輸入されたものであると書いてあるとの事です。支那の古書にはこの按摩法は印度のバラモンから傳つたと書いて

てあります。漢方の古い運動法に就ては、方法を一々申し上げるには及びません。何となれば現在ある體操法は、どれもこれも取りもなほさず古い方法であるからでありまして、どの體操法でもよろしい、これを御實行になれば即ち長命の健康にかなふのであります。

呼吸法の事も調息法だとか何とか云ふて、これ等の事も殆んど常識的に皆様が御存じの事でありまして、別に申し上げる必要がないかと存じます。

長壽健康の法として、古醫書には必ず房中の術を行へといふ事が書いてありますが、この房中の術とはドンナ事かと云ひますと、盛んに若い女を御して精を保つてもらさぬ方法であります。この事も定めし皆様方も常識の如く御存じかと思ひます。こゝに御出席の御方々の中には既にこの方法を御實行の方も、相當にある様に拜せられるので、この方法は四十歳を過ぎてからやれと云ふ事になつて居ます。この房中の術を行ふのは、つとめて若い女が必要で、月經がやつと起つたばかりの女がことによく、美人よりもたゞ體が柔かく肌が細かで、聲の良い女を選べと書いてあります。黄帝は女を御すること一千二百人にして登仙したが、皆房中の術を用ひたからであると書いてあります。若い女を御して精氣をもらさぬ事は、これを現代醫學の上から見ますと、色

々説のある事でありまして、良いと云ふ説と悪いといふ説と二つあります。どちらが本當であるか小生はまだ四十歳には、だい分間がありますから、批評の資格がありません。

補腎の方から長命をする薬として、最も一般的に使はれてゐる處方があります。これは日本の神道の方面にある處方で、御書きとりになつても良いと思ひます。

黒胡麻、 黒大豆、 山藥（自然薯）、 玄米、 蓮

等を粉にして用ふるので、大變に元氣が出て來て白髪が黒くなると申されてゐます。長壽藥として『石楠木』の葉もまた用ひられてゐますが、どこか赤阪見附に賣つてゐる店があるとの事です。此石楠木は武内宿彌の家の秘薬でありまして、海拔三千尺以上の物が良いとの事で、婦人は長く飲んでではならず、男子に限ると書いてあります。用法は一回に五分から一匁五分を用ひます。

さて今まで申し上げた事は、漢方の古醫書にある事を、漫談的に請賣りをして申し上げたに過ぎませぬが、これから私の研究に涉る方面を申し上げたいと思ひます。この研究は私の此後の生涯を通じて、この思想の普及宣傳に勉める考で、人類の悩みを救ふ第一の手段であると考へてゐるものであります。

人間は萬物の靈長と云はれてゐますが、それは單に知識の上の事のみでありまして、健康といふ點から見ると、決して人間は萬物の靈長ではないのであります。私は青空の上をはるばると飛んだり、或は木間に樂しげに轉つてゐる鳥を見る時や、山や野原を活潑に飛びまはつてゐる動物を見る時、清らかな流れを泳いでゐる魚を見る時、どれ一つとして生命の悦びに潑刺としてゐない物を見ぬのであります。之に反し人間だけが、何時も病氣にかゝつて悩んでゐる様に思はれます。これはドウした譯であらうか、何時に人間はこんなに病にかゝり易いのかと云ふ事を考へ、私はこれは主として食物の爲であると云ふ事に氣が附いたのであります。

即ち人間が病氣になる原因の大部分は、殆んど食物の間違ひに基くものでありまして、正しい物を食つて居れば、めつたに病氣になるものでなく、病氣にならず壯健であれば、従つて長命が出来ること云ふものであります。ではドウ様な食物が人類の食物たるに適し、ドウ様な食物が不適當であるかと申しますと人間は本來、穀物を主とし野菜を副食物にすべきもので、肉、魚、卵つまり動物蛋白質をとつてはならぬと云ふ結論になるのであります。何故に肉類を攝取すると病氣になるかと云ふ病理は追々にし申上げる事に致しまして、先づ肉食と云ふ事は動物に對して如何

なる影響があるかと云ふ事を、動物學の全般の背景からながめて見る事に致します。

肉や魚や卵の如きものは、甚だ滋養物であると考へられてゐますが、決して滋養物ではなく、むしろ毒物と申しても過言でないのでありまして、肉食動物は弱いと云ふ原則があるのであります。獅子は百獸の王と云はれ、虎は千里を走ると云はれ、實に剛健なる物の代表物の如く云はれてゐますが、これは全くの錯覺で事實は全くこれと異なるのであります。獅子も虎も物陰にかくれてゐて、獲物の不意を襲ふて飛びかゝるのでありまして、一時の糞力はありますが、耐久力になると全くないのであります。獅子も虎も一時に數里とは走れぬとの事で、猫も數百間も追ひつめると心臓が爆發して死ぬと申す人があります。獅子も虎も豹も猫も、平素はゴロリと横になつて臥てゐるので、全く耐久力がないのであります。これに反し肉食動物は實に壯健でありまして馬にしても牛にしても終日勞働に服し得るのであります。野菜ばかりでは營養がとれぬと云ふ考は、根本的に間違ひである事は、馬や牛や象が何を食つて生きてゐるか云ふ事を御考へになれば、直きに分る事でありまして。

今から申し上げる話は少しばかり堅くるしくて、或は御期待に反するかも知れませぬが、どう

かお許しが願ひたいものだと思ひます。私のやつてゐる仕事は、本當の日本醫學と本當の日本衛生學の建設でありまして、今日の間違つた醫學と間違つた衛生學の建て直しであります。今日の所謂醫學は全くドイツの直譯でありまして、日本の風土と日本人の體質に適しませぬ。こんな間違つた醫學が横行してゐるので、國民の病氣が治せぬどころか、病人が益々増へて思想界の悪化混亂を來すのであります。

むかし黃帝が岐伯に『政治の要道は何であるか』と尋ねたところが、岐伯が答へて云ふには『民をして病む勿らしむるに在り』と云つたとの事で、眞に千古の名言であると思ひます。國民が病氣にならず、たとへ病氣になつても直ぐに治す事が出来、醫は仁術なりと云ふ實をあげ得るなら生活難などいふ物もなく、従つて思想の悪化など云ふ事もないのであります。私は今日の國家の危機と思想界の悪化は、醫學が墮落して國民の病弱を救ふ事が出来なくなつた事が、最も大なる原因と思ひます。

本當の日本醫學、本當の日本衛生學を建設するのだと申しますと、或人からは學問に國境はない、西洋醫學だとか日本醫學だとか云ふソナ區別は有るべき物ではないと申されるかも知れませんが、それは間違つてゐます。そう云ふ區別を認めぬのは今では古い考でありまして、學問にもやつぱり國境があるのであります。こゝ五六年前までの世界の學界は世界の科學界を通貫した一個のプリンシプルを求める事にありましたが、今や世界の學界は學術のナショナルイゼーションと云ふ事になつて參りました。

なぜ斯くなつたかと申しますと、世界の事情は複雑千差萬別で、變化が自然の状態であつて、單一の原則で押し通す事が出来ぬと云ふ事に、學者達が氣づいたからであります。私は日本主義者であります。老人連に良くある様な、何でも日本の事は世界で一番よいと云ふ頑迷固陋の日本主義ではありません。あんな日本主義は過去に於ても日本の進歩の妨害物であつた様に、今後とても日本の眞の進歩の妨害物であります。日本といふ事を知らぬ盲目的な西洋崇拜も、同じく日本の進歩の妨害物で、頑迷である點に於て、神風連的な日本主義と兄たり難く弟たり難いものであります。私の日本主義は合理的日本主義であつて、日本と云ふ風土の特質の上に基礎を置いてゐるもので、西洋崇拜でもなければ、祖國の盲目的崇拜でもありません。たゞ日本と云ふ立場を忘れずに居ると云ふ點にあるのであります。

醫學にも衛生學にも國境があります。西洋と日本とは氣候風土が違つてゐるので、自ら病の種類も異り、また西洋人と日本人とは體質が異なりますので、治療の方法や薬の用ひ方にもそれぞれ差異があるのであります。

土地が異なるに従つて病氣が異なる例の二三を申しますれば、日本の夏期にある鬱熱性の下痢の如きはヨーロッパには全くなく、またヨーロッパの流行性感冒は非常に猛烈なもので、どんどん死亡者が出、日本人でもヨーロッパに於て流感にかゝるとヒドイ目に逢ふのですが、日本へ來ると流感の勢が大變に衰へるのであります。北部ノルウエーでは結核病患者は極めて稀であります。同一の緯度にあるカナダでは結核患者が澤山に居るのであります。ドイツへ留學が流行り出した當時、ドイツの病院で特に日本人を呼んで、今日は珍らしい眼病患者を見せると云つて引つぱつて行きましたが、それはトラホームでありまして、日本にはこの病人は澤山あると云つてドイツ人を驚かせたと云ふ事は今でも一つ話になつてゐます。

西洋人と日本人との體質が異つてゐる例は、いろんな實例によつて證明されます。ドイツではチブスに罹ると微温湯に入浴させるので、これは非常な好成绩をあげてゐるのですが日本人があらちらでチブスに罹つてこの微温湯浴をやらせられると、殆んど例外なしに死ぬのであります。今ではドイツ人もそれを知つてゐて日本人には其療法をせぬと云ふ話であります。西洋人と日本人とは薬の作用の仕方が異なるのも自ら當然でありまして、西洋人は下劑としてトルコ大黃といふ重々大黃を使ひますが、日本人があれを用ふると腹が痛んで耐えられぬのであります。日本人はやつぱり唐大黃を用ひねばならぬ。其他アンチヘプリンだとかフェナセチンだとかアンチピリンだとかベロナールなど云ふ薬の極量が、西洋人と日本人とは著しく異つてゐて、日本人はすつと少いのであります。

この薬の分量の相違に就ては、日本人と支那人との間にも甚だしい相違があります。淺田宗伯の『先哲醫話』の中に北山友松の説として次の言葉があります。

歸化醫某、始療病、每服藥重七八錢、甘草分兩尤多、而無効、人皆爲庸工。某曰吾過、國人比之於唐山、腹力頗弱、故不能中肯綮、便減其分量、殺甘味以爲之、無不百中。此これと同じ事は後藤良山も書いて居ります。

日本の醫者がドイツ留學してゐると持病の喘息の發作が治り、歸國すると再び發作が再發しま

す。世界一の健康な氣候はサワラ砂漠の冬でありまして、其處では腎臟病は一滴の薬も用ひなく
て治ると云ふ事であります。

氣候の異なるに従つて、病氣の異なる例は同じ日本でも山岳地方には恐るべき傳染病が少いの
に徴しても明かで、高山や砂漠に於ては、日光の殺菌力が平地の三倍から四倍であると測定されて居
ります。結核病の死亡率は一地方の健康状態を知る尺度と云はれて居りますがその死亡率は土地
の海拔と反比例をなすのが原則で、海拔二千尺以上の土地では結核が跡を絶ちまして、所謂結核
の免疫地帯を作ります。その適例はメキシコの首府のメキシコ市で同市は海拔二千二百米突あり、
住民が三十五萬を有して居りますが、結核が殆んどないとの事です。此事實から押しまして、私
は紡績工場の如きものは、すべからく信州か飛彈にあたりりの結核免疫地帯に持つて行かねばなら
ぬと思つてゐます。繊維工業などは低い平地に集中するのは民族衛生の上から、決して面白い事
ではないと思ひます。

私が肉食の害を説きますと、きまつて起る淺薄な反対は、西洋人も支那人も現に肉食をしてゐ
ても害がないではないかと云ふ事ではありますが、これは西洋と日本とは氣候も違へば人種の體質

も異なるからで、反対の論據にはならぬのであります。良く西洋に行つた人で、アチラでは毎日肉
を食つてゐて、少しも胸につかへなかつたが、日本へ歸つて來ると調子が違ふ。帝國ホテルあた
りの飯でさへ、毎日ほととも食へぬと云はれますが、これは氣候の關係で西洋や支那は、日本ほ
ど肉食の害が現はれぬ國柄であつて、従つて肉食が盛んになつたのであるが、印度だとか日本で
は肉食の害が直ちに現はれるから、昔から餘り肉食をせぬ習慣になつてゐたのである。西洋では
肉食が餘り害にならぬ處から、肉食が行はれその結果西洋人の體質にも變化が起きてゐる。それ
は腸の長さである。肉食動物の腸は身長三倍で草食動物は二十倍が原則で、人間のは十三倍の
長さがあると申します。西洋人は日本人より三尺短い、と申してゐる人があります。身長が長く
て腸が短かければ比例的に大變な差になります。

ラブランド人は肝油を飲み、厚い毛皮を着て健康であり、反対にアフリカの土人は眞黒な皮膚
をもつて裸體で暮し穀物と果實で生きて居り、西洋では日本よりも肉食が過ぎても害がありません。
要するに衣食住の法則も醫學も、風土といふ物と離るべからざる關係があるので、郷に入つ
ては郷に従ふ事が一番によいのであります。世界に一貫した理法といふ物は醫學だとか生活現象

の上に、絶対にないのであると申しても差支がないのでありまして、南洋に行くならば南洋の土人の生活を真似るのが一番に健康に適してゐるのでありますし、北極に行くならばエスキモーの生活を真似るのが一番良いのであります。今日の醫學や衛生學が間違つてゐるのは、氣候や風土の異なるドイツの醫學だとか衛生學を、其儘日本に持つて來たから悪いのであります。

これに就て面白い話があります。三四十年前にドイツに武者小路實篤みたいな新しがりの連中が居りまして、理想國を作るのだと云つて、同志七八十名と共に南洋の Papua 島に移住した事があります。新しがりですから頗る所謂文化的な生活をし、純ドイツの傳統を其熱帯にまで持つてゐたのですからたまりません。數年の中に其大部分は死にたへてしまつて、残つてゐる三四人の連中は、みな白髪になつて記憶すら十分に残つてゐなかつたと云ふ事でもあります。熱帯に於て白人が長く止つて居れず、強いて止つてゐる時には性格に變化を起し、人種の素質の低落を來すのは顯著な事實でありまして、その好適例として人類學や社會學に良く持ち出されるのは、ハバナ群島の低級白人即ち *Poor Whites* であります。其處の白人は能率や徳性に於ては、遙かに其處の黒人よりも以下なのであります。濠洲が白人の永住の地たるに適せぬのは、氣候風土の上から

止むを得ぬ次第で、やたらに日本人を入れまいとしてゐますが、日本人はアソコでは十分に健康を維持し得るので、やがては天の理法によつて英國はアソコを放棄せねばならぬと思ひます。

ヨーロッパ人は熱帯に居る時は非常に熱性病にかゝり易いので、マラリヤだとか黄熱病にちぎや黄熱病に殆んどやられぬので所謂人種免疫性をもつてゐるのであります。これに反し熱帯の土人がヨーロッパに來て永く滞在すると、多く急激に死亡するのであります。その死因は殆んど總て肺結核であります。これと同じ例は動物の間にも見られるのであります。動物園に收容せられてゐる猿類は、肺結核に襲はれて死なぬ者はないと云つても過言ではないのであります。

寒帯と温帯と熱帯とは、氣候が根本的に異なるから生活の様式も、また病氣の種類も違ふと云ふ事は、これは常識でも分る話であります。日本とヨーロッパは同じ温帯國でありますから、西洋の原理原則が日本では適用されぬと云つても、なかなか腑に落ち兼ねるのであります。また其様な説を立てる人で何故であるかを十分に説明し得た人がないのであります。然し事實に於て西洋で肉食をしても胸につかへず、日本へ來てそれをやればイカぬ。現に日本に來て健康を維持

してゐる西洋人は、純西洋の生活をして居てはドウも工合が悪いと云つて米を食つてゐる者が澤山にあるのであります。これは何か特別な氣候醫學的原因がなければならぬと云ふて、醫學上の宿題になつてゐたのであります。

私はかうした方面の研究は特に好きでありまして、若い中から色々と頭をひねつて見てゐるのであります。今から六年ほど前にフトこの理由を説明する原理を發見したのであります。この事を發見してから、私は學術に國境があると云ふ事を熱心に主張し出したのであります。日本といふ土地では肉食衛生はダメで、菜食でなければならぬし、また漢方醫學でなければならぬと主張し出したのであります。かうした主張は別に新しいものではなく、西洋醫學が入つて來た當時、日本の名醫は西洋醫學はダメであると批評をして居りますし、有名なシーボールドは、日本に向つて西洋醫學は東洋ではダメである、アジアの病はアジアの醫學でなければ直せぬのであると、日本人を警告してゐるので、流石はシーボールドであると感心せられるのであります。これは眞理であります。單に漠然とアジアの病はアジアでと云ふても、盲目的に感情的に歐米の醫學が優秀であると信じきつてゐる人達には、なかなか説伏が出來なかつたのであります。私の氣

付いた氣候の研究を示すと西洋醫學崇拜家もグーの音が出なくなつてしまつたのであります。

ここに西洋と日本との氣候を比較した圖面を掲げますが、點線は空氣の濕度で、眞線は溫度であります。西洋では濕度線と溫度線は蒸發皿を背中合せに重ねた様に逆になり、日本は蒸發皿を重ねさせた様に並行になります。これはヨーロッパは冬が雨期で、夏が晴期であるからであります。氣候がヨーロッパと日本とは反對でありますので、日本の夏はベラ棒に暑く、西洋の夏は涼しいのであります。而して反對に西洋の冬は比較的温かく、日本の冬は非常に寒いのであります。單に漫然と日本は冬は寒む過ぎ、夏は暑つ過ぎると申しても、その何故なるかを訝ぶかり、満足せぬ人が多くありませうから、なぜ日本にのみ斯る現象が起り、ヨーロッパもアメリカも之と反對に、冬は比較的に暖く、夏は比較的に涼しいのであるかを説明せねばなりません。——この説明には、そもそも寒暑の感とは何ぞと云ふ事から研究して掛らねばならぬのであります。

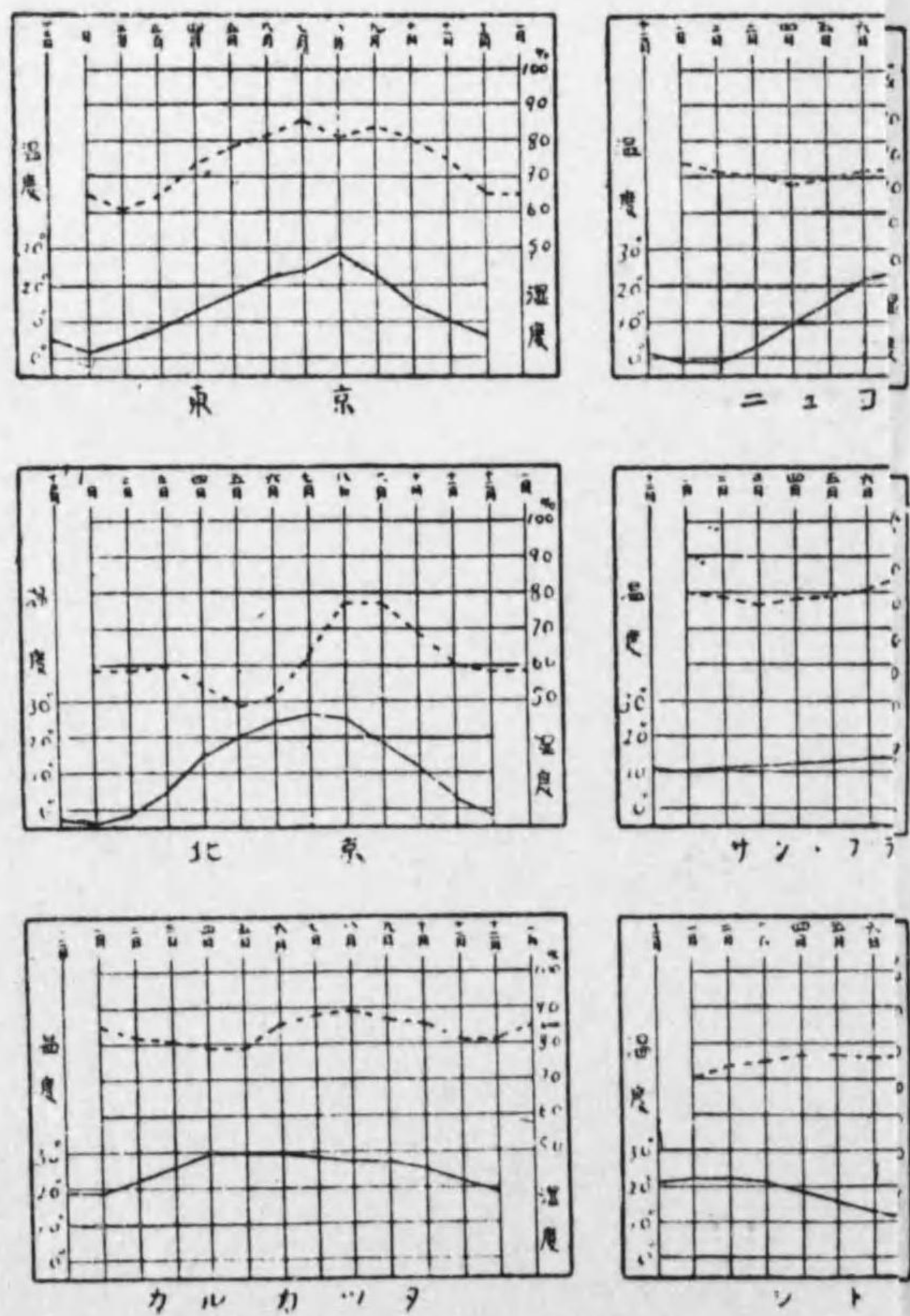
従來、人體の感ずる寒暑の感じは、世界を通じて學術的に乾球寒暖計と呼びなされる、普通の家々にあるあの寒暖計で計られてゐたのであります。この寒暖計をもつてしては、實は人體が感ずる寒暑が計られぬのであります。この乾球寒暖計の示す度合をもつてすれば、日本はまさに

氣候が頗る隠和な所となるのでありまして、然も事實と符合せぬのであります。日本の夏は寒暖計が餘り昇騰せぬ癖に暑くてたまらず、その冬は寒暖計が左程に下降せぬのに寒さが耐へ難いのであります。——反對にヨーロッパとかカリフォルニア州の如きは、冬は寒暖計が下降して居る割合にさ程の寒さを感じず、夏は寒暖計の昇騰してゐる割合にさ程の暑さを感じないのであります。かような譯で人體が感ずる寒暑の感覺は、普通の温度の昇降の外に、もう一つ他の要素がある事が氣附かれ出したのである。その要素とは何かと云ふと、空氣中の湿度であります。

アルコールで體を拭ふと涼しく感ずるのは、アルコールが蒸發する時、皮膚の熱を奪ふからであります、これを『氣化が潜熱を奪ふ』と物理学で云つてをります。この理を應用したのがアムモニヤ製氷機であります。——さて處でこの理論が、人體が感ずる寒暑の感じの説明として役立つのであります。

寒暖計の上昇が甚だしくとも、空氣の乾燥してゐる所では、體の毛穴から出る水分が汗とならずに、どしどし蒸發して行くから皮膚は『氣化の潜熱』を奪はれて、人體は低温の空氣中にあると同じ涼しさを感じるのであります。これに反し夏期に空氣の濕潤な處では、毛穴から出る水分

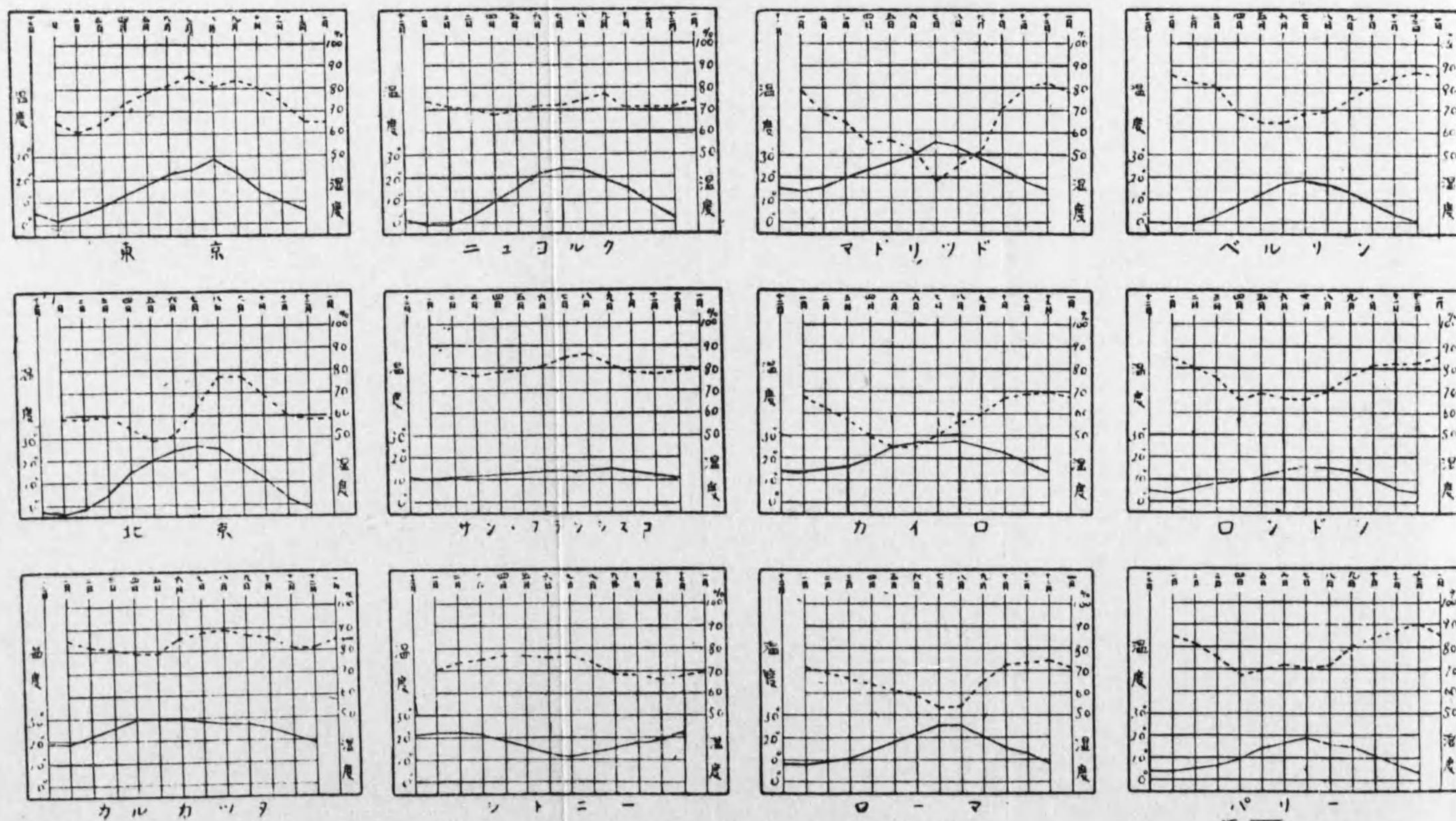
表 較



立つのであります。

寒暖計の上昇が甚だしくとも、空氣の乾燥してゐる所では、體の毛穴から出る水分が汗とならずに、どしどし蒸發して行くから皮膚は『氣化の潜熱』を奪はれて、人體は低溫の空氣中にあると同じ涼しさを感じるのであります。これに反し夏期に空氣の濕潤な處では、毛穴から出る水分

表 較 比 の 度 濕 と 度 温



が蒸發せず、汗となつて皮膚の上にたまり、氣化の潜熱を奪ふどころか、反對に汗の膜が毛穴を塞いで、そこから水分が出て來るのを防ぐのでありまして『蒸し暑い』といふ現象が起るのであります、而してこの蒸し暑い事は、大に身體の新陳代謝を妨げて、人體の生理的機能を害するものであります。

また反對に冬期に空氣の乾燥してゐる處は、體温が空氣中に奪はる事が多いので、所謂『底冷え』と云ふ現象が生じ、之に反し空氣の濕つてゐる所は比較的に温いのであります。遠藤吉三郎博士はノルウェーの事を誌し、溫度が攝氏零下二十五度にも下つてゐるのに、それが北海道あたりの同溫度と比較にならぬ暖かさである事を驚いて記述しておられます。

今日の地理學の教科書には、ヨーロッパの西海岸の暖かいのを、メキシコ暖流に温められるからだと記載してありますが、勿論それによつて溫度の高まつてゐるのも事實であります、その他に空氣の濕度に關係が有る事を見逃してゐるのは、重大なる誤りであります。

換言すれば、夏期に空氣中に濕度の多い處は、實際上の寒暖計の上昇よりも人體には暑く感ずるので、之に反して夏期に空氣の乾いた所は、寒暖計の上昇する割に暑くはないのである。日本

の夏は前者で、ヨーロッパの夏は後者であります。南洋が暑くないのも、南洋は夏が乾期で、冬がヨーロッパと同じく雨期だからで、日本の夏が世界で一番暑い處の一と云ふのはこの理由からであります。同じ理由は冬にも應用出來ます。冬期に空氣の乾燥してゐる處は、體温を奪はれる事が多いから寒暖計が示すより以上に寒く、空氣に濕度の多い處は、體温を奪ふことが少いから案外暖かなのである。——日本の冬は前者で、ヨーロッパの冬は即ち後者であります。

このやうに同じ温帯でありながらヨーロッパと日本では氣候の性質が正反對なのであります。これだけの簡単な事が今まで誰にも氣附かれなかつたのでありまして、この小さな發見によつて醫學上や社會學上の特殊な問題を説明し得る點が多々あるのであります。なぜ此様に日本とヨーロッパは同じ温帯でありながら、温度と濕度の關係が正反對であるかと云ふと、それは地球の自轉の關係であります。地球は御存じの通り西から東へグルグル廻つて居りますので、大陸の東と西とでは風の方向と暖流からの影響は全く異なるのであります。即ち大陸の東は夏期に雨が多いのが原則で、大陸の西は冬期に雨の多いのが原則であります。この東西の氣候の差異が、風俗や習慣や衣食住の原則を、すつかり異つたものにさせるのであります。

この表によつて西洋では肉食をしても餘り害にならぬが、日本では害になると云ふ事も良く説明が出来るのであります。御存じの通り生活現象は營養と酸化作用の二つによつて營まれるものですが、酸化作用による身體の不用な老廢物は肺臟と腎臟から排泄されますが、この外に皮膚の毛穴があります。この毛穴から水分其他が目に見えぬ氣體になつて排泄してゐるので、皮膚から排泄される新陳代謝の老廢物は腎臟よりも多いのではないかと云はれてゐます。——ところで日本の様に空氣が濕つてゐる所はこの皮膚から老廢物が發散する事が非常に妨げられるのでありますから、日本では誰でも腎臟病にかゝり易いのであります。つまり日本では新陳代謝の老廢物が容易に體外に排泄されずに、體の中にたまるのであります。この老廢物が體にたまつてゐると、色々の害をなすのでありまして、多くの病氣はこの老廢物が原因であります。日本の醫者がドイツに行つて喘息がなほり、歸つて來てまた發作が起るのは、あちらの空氣が乾いてゐるからであります。空氣が乾いてゐる事は健康上、大變に必要な事でありまして、白色人種は南洋だとかアフリカの東海岸の様な、暑くて濕つてゐる處では直ぐに病氣になるのであります。たゞエジプトに於てのみは烈々たる日光の下で働いても病氣にならぬのであります。

腎臓の働きが不十分である事は、殆んど萬病のもとで有ると云つても過言でないのであります。傳染病にかゝる者は殆んど間違つた食物を攝取してゐる者であります。病菌といふものはやはり一個の生物でありまして、食物がなくては生きて居れぬのであります。彼等病菌はドンナ物食ふて生きるかと申すと、有機物の腐つた物に寄生するのであります。決して人間の生きた體にちかに寄生が出来ぬのであります。それで間違つた食物をとつて、その分解物が體の中に澤山にたまつてゐるとか、腎臓が悪くて新陳代謝の働きが悪いために、體に排泄物がたまつてゐると、それに病菌が寄生するのであります。つまり體の中に病菌の食物になる物が澤山にあると病氣になるので、正しい食物を食つてゐて病菌の食物になる物が體に少いとか、或は腎臓が強く排泄機能が十分であると、病菌の食物が少くて健康を維持して居れるのであります。——それで不老長壽法の根本の結論は、要するに腎臓の負擔を軽くするといふ一事に歸着すると申しても過言でないのであります。腎臓の負擔を軽くするには、肉食をやめて菜食にし、良く咀嚼をしてなるだけ少食にする事が必要なのであります。肉食をやめるとか、減食する事によつて、決して性慾が衰へたりする心配がないのであります。私が菜食をすすめた結果、多くの人は性交の

快味が増したと申します。菜食によつて婦人の不感症を治した例を私は數件持つてゐるのであります。必しも肉食のみが性慾を刺戟すると限つたものではありません。動物質の食物を澤山にとると、神経がどうしても鈍くなり、従つて閨房の快味が減するのであります。眞に閨房の快味のデリケートな處が味ひたければ、菜食になさるのが良いと思ふのであります。

以上申し上げました様に、西洋は日本に比べて肉食の害が甚だしくない土地柄であるにも係らず、最近に至つて肉食を廢止せねばならぬといふ運動が盛になつて参りました。西洋のやうな土地ですら、肉食よりも穀食菜食の方が、比較にならぬほど健康のためになるのであります。いはんや日本の如き氣候の悪い處に於てをやであります。

西洋で新しい營養學を唱へ出した人はデンマルクの營養學者のヒンドヘデーと云ふ人で、最近はしきりに此人の説を紹介する事が流行して來ましたが、何もわざわざ此人を崇拜するにも當らぬ讀で、日本には昔からちゃんとヒンドヘデーの様な營養學があるのであります。貝原益軒先生の養生訓や茶根譚あたりの説は即ちそれで、近くは石塚左玄といふ大天才がありましたし、二木謙三博士もあります。とかく日本人は自分の國のエライ人達を輕蔑して、外國人だと云へば屁で

もない様な人を尊敬する悪い癖があります。こんな西洋を感情的に有難がる癖は止めねばならぬと思ひます。さてヒンドヘデーの説は我々日本人としては別に新説でもありませんが、肉食民族の中にどうしてコンナ革命兒が出たかと云ふ、ヒンドヘデーが新營養學を發見するに至つた動機を申し上げたいと思ひます。これは頗る面白い話であります。

ヒンドヘデーは醫者でありまして、農家に生れ黒パンと馬鈴薯を嚙つて育つた人ではありますが、大學に入つて生理學の講義を聞き、何でも健康で大に能率を發揮するには肉食をしなくてはダメだと教へられ、盛んに肉を食つたのであります。すると意外にも能率はトント加らないで、逆にどことなく體の工合が悪く以前のやうではない。これは不思議だと思ひながら。コリヤ馬鈴薯腹に食ひつけぬ肉などを無闇と詰め込んだセイでないかと心づき、肉の量を減じて見ると、どうやら具合がよろしい。

そこでもう一度突き込んで、全く肉を食はなかつたらドウか。イヤ待て全體食物はドコまで分量を減じて良いものかと自問し、自分の體について實驗して見やうと志したのであります。そして或夏、馬鈴薯の出盛りに、馬鈴薯と少々ばかりの牛乳と苺とだけで暮して見たのです。サア之

で命がイクラ續くであらうか、減多に命にさはる事もあるまい。もしそう云ふ事があるとしても、さう急には來まい。イヨイヨとなつたら何とか前徴があるであらう。そうなつたら早速ビフテキを頬張らうと度胸をきめて、馬鈴薯を續けて見たのであります。一週間ほど経つても何ともなく、二週間たつても何ともない、遂に三週間四週間、二ヶ月、三ヶ月とたつてしまつたのであります。やつぱり別に體が衰へたとも思はれぬ。それどころか反對に大に變つた事がある。それは坂路をのぼる時などに、我ながら不思議なほど身が軽いのに氣づいたのであります。茲に於てヒンドヘデーの心眼が豁然と開いたのであります。爾來二十年一日の如く實驗室の研究を重ね、聲をかちして此新知識の普及に努力し、この知識を土臺として世界の大戦中の困難なる封鎖中に食料品の分配を立案して、文字通りに國家を救ふたのであります。この大戦中にお隣りのドイツは、デスマルクよりも割合の多い食糧をもちながら、誤つた分配のために、即ち肉食を重んじたがために、人間の食べらるるものを豚や牛に與へ、人間が食つても益のない豚や牛を人間が食ひ、十の物を二にして使つた結果、餓死者が續出して、戦には勝つたが飢には勝たれず、遂に戦に破れたのであります。それでヒンドヘデーはドイツを負けさせたのはカイゼルでなくて、本當の營養學

を知らなかつたドイツの營養學者のルブナアであると公言してゐるのであります。これなどは日本の食糧政策の上に大變に參考になる事で、日本には今日食糧の不足は絶對にないのであります。即ち半搗米にして菜食にするならば、食物は有り餘るのであります。私がかく斷言する事に反對する人がありません。それは土地の生産力がドレ程あるかと云ふ事、即ち農業上の知識の全くない人です。日本の食糧不足は斷じて土地が狭いためではなく、食物の知識が不足してゐる事から來てゐる、全く愚かな事で、決してブラジルあたりへ移民に出る必要がないのであります。

ヒンドヘデー家ではドンナ物を食つてゐるか云ふと、大體次の様なコン立であります。

朝 挽割麥、牛乳、砂糖

晝 青菜スープ、馬鈴薯、パン、ケーキ、大根砂糖煮

晩 パン二種、馬鈴薯、マルガリーネ、砂糖を入れた茶と牛乳。

合計一日十三錢

ヒンドヘデー家は斯くの如き食事で暮して居て、男二人女二人の子供を健康に育て上げ、男は二人とも秀才で工學士になり、娘達は健康で舞踏などをして疲れを知らぬので、或席上で一つヒ

ンドヘデーの娘さんを疲れさせて見やうと三人の男が代る代るに攻めたてたが、へとへとに疲れしたのは三人の男であつたと云ふ事です。ヒンドヘデー家の健康に就ては色々の珍談がありますが、ヒンドヘデー夫妻と娘さん二人が連れ立つてノルウエーに旅行をして山の旅館に泊つた處が、クリスチアニヤから來た三人のノルウエー娘がありました。明日ノルウエーの有名な山に登るのだと云つて、すつかり男装をしてゐる女豪傑でドコの山、ココの山と山の面白さを吹聴します。さあヒンドヘデーの娘さん達は行きたくて仕方がなく、その女豪傑連に連れて行つてくれと頼むと、女豪傑連はヒンドヘデーの娘さんの服装を足の先から頭のテツペンまで見てゐて、そんな姿ではトテモ山の上まで行けません。まあ行ける處まで行つて休んでおいでなさい、私共が山から降りて來て一しよに降りませうと相談が一決しました。翌朝五人が打ちそろつて案内者を先に出掛けましたが、半分ほど登つた時にはヒンドヘデーの娘さんが先頭になり、豪傑連が遅れ勝ちになり、い／＼登るにつれてヒンドヘデーの娘さん達は案内者と共に女豪傑連の尻を押したり手を引いたりしてやつと山の上まで行き、降りる時にもヒンドヘデーの娘さんは案内者よりも先きはずんずん駆け下つたとの事で、案内者は永年人を案内してゐるが、アンナ達者な

娘さんは生れて始めて見たと驚いてゐたとの事であります。

今から三十年ほど前にドイツのボン大學の法學部にローマ法を講じてゐたパロインと云ふ教授がありました。その人が死んだ時に遺言をして六十萬マルクをもつて、親も保護者もない兒童のために救護所を設けたい、その救護所では第一に賄は一切肉を用ひないこと、第二に醫者を入れぬ事、第三に兒童の病氣に對しては自然治療家に依頼して、普通藥品は一切使用せざる事と云ふ條件で、伯林市とプレスラウと教授の郷里のフェステンベルヒとが遺産を受くる様に、指定されてあつたのであります。當時伯林では有名な醫學者で政治家で、市政の爲めにも殆んど決定的の聲望をもつてゐたウイルヒョー教授が、救護所の子供は筋肉労働者に仕立てねばならぬ、筋肉労働者は丈夫な筋肉を持たねばならぬ、それを育てるのに肉を食はせないとは無責任であると云つて終に六十萬マルクを受くる事を拒絶したのであります。然るにプレスロー市は何等の躊躇もなく、それを受けとつて遺言の通りやつたが、唯一つ醫者の一條だけはパロイン教授の遺言に反して、やはり大學出の小兒科醫を雇ふて、兒童の病氣に備へたのであります。その歴年の報告を見ると、實際に於ては醫者がゐなかつたと同じで、藥は少しも用ひられなかつたために、其處に雇ひ

入れられた醫者が却つて感化されてしまつて、却つて自然療法家が考へてゐるやうな思想を懐くに至つたと云ふ話であります。こんな例はまだまだ限りなくあります。

肉食が比較的害のないヨーロッパに於てすら、肉食をしてゐる人と菜食をしてゐる人とはコソナに體が異ふのであります。まして肉食の害が直ぐに現はれる日本では、肉や卵や魚を全廢しても少しも差支がないどころか却つて有益なのであります。日本人は半搗米と野菜さへ食へば無病健全であり、従つて生活難もなく煩悶もない譯で、人間が健康であれば従つて生活の快樂も大きい事になり、人生が更に明るい物になります。私は今日の間違つた食物衛生から日本人を呼びさますのが、私の一生の使命としてゐる處で、この運動が即ち私にとつての宗教運動でもあり、また政治運動でもあるのであります。皆様方の御力添への下に青年團だとか、全國の學校だとか、或は工場に働いてゐる人達のために正しい食物や生活の話を講演してまはる事が出来れば、ドンナにか悅しいかも知れぬのであります。どうかして此の微力をもつて國家に貢獻したいと考へてゐる次第であります。

神經衰弱の漢方治療

一、原因と原因療法

洪水の害を防ぐのに堤防ばかり立派にしてもダメだ。どうしても水源地から改良せねばならぬ。病氣を治すのもそれと同じで、いくら治療をしても養生が間違つてゐては何にもならぬ。養生は第一で治療は第二である。

神經衰弱の原因は西洋醫學では、心身の過度の疲労、殊に學生等に見るが如き過度の勉強や、或は非常な心配事が起きて、腦が疲労した爲めであるとしてゐる。漢方では此等の原因を認めてゐるが、西洋醫學のやうにそれ全部を原因としてゐない。神經衰弱の原因にはまた多くの要素がある事を主張してゐる。

西洋醫學が認めてゐる原因の外に、漢方が認めてゐる原因は、神經衰弱を自家中毒の現はれの一つであるとするのである。即ち神經衰弱は腦の組織に病因を有する、腦固有の病のみでなく、内臓器官の病弱に原因する續發的な現象と云ふのである。私は此方面の學說が知られて居らぬので、主として此方面から見た神經衰弱の療法を述べるのであるが、此等の療法たるや同時に、西洋醫學が認めてゐる原因による神經衰弱の療法としても、甚だ適當したもので、西洋醫學による治療法よりも優れてゐる事は言を待たぬ處である。

誰でも知つてゐる通り、人間の體は營養と酸化作用とで生命が維持されてゐるが、この二作用中のどれかに障害が起ると、所謂病氣といふ現象が起る。人間は正しい生活をして居れば、めつたに病にかゝらぬ様に出來てゐるが、間違つた生活をするると病にかゝる。而して其間違つた中で最も主なもの食物衛生の間違ひである。

凡そ日本人の食物としては、野菜は半搗米が最も適してゐるのであるが、西洋流の間違つた肉食衛生が入つて來てから、日本がコンナに病人だらけになつたのである。肉食の本場の西洋でもヒンドヘデーなどゝ云ふ人が出て、人間が肉食をするのが間違つてゐる、野菜と穀物にせねばならぬと云ひ出した。

肉や魚や卵や菓子などと云ふ間違つた物を過分に食ふと、それが胃腸の中で異常分解をなし有毒な成分になる。而してそれが体内に吸収されると、内臓器管が侵されたり、神経の働きがにぶる。ことに心臓は其毒成分のために運動神経の機能がにぶり、心臓肥大症を起し、血行が不完全になるのである。

心臓の機能が弱れば、従つて腦の中の小血管の血行に障害が起きる。且つ之に加ふるに其血液は食物が醇した毒物を含んでゐる處のものである。かくて腦質は營養不良になり、幾分の痲痺を呈する事になる。これが神経衰弱の漢方眼的觀察で、神経衰弱の原因は之が最も多いのである。

さて斯くの如く、神経衰弱の主な原因は消化系統から來てゐるので、内臓器管さへ丈夫ならば、少し位に過度の勉強をしても差支がないのである。また逆に過度の勉強や心配は、必ず肝臓と脾臓を弱める事を漢方醫學では教へてゐる。それで神経衰弱を治するには、第一に食物を半搗米にし、第二段の方として、肝臓と脾臓の虚弱を治する手當をせねばならぬ。それには薬を用ふると灸治とがある。

二、灸による治療

神経衰弱を最も簡単に治すには灸治に越したものは無い。薬をのむのも非常に良いが、灸は金が掛らぬ點に於て、一番に民衆的である。私は第一に灸をおすすめする。

ではどこに灸をすると良いかと云ふに、色々な流派もあるであらうが、私は神経衰弱は主として食物の間違ひによる自家中毒が原因であるといふ見地から、灸點の場所の中最も根本的な部位を選ぶもので現に卓抜の効果をあげてゐる。灸點の部位は全身に三百六十有餘あるが、其中で神経衰弱を治するには、是非とも肝俞、脾俞、腎俞を中心とせねばならぬ。而して此の補助灸として身柱、上膠、中腕、三里にすれば理想的である。これ等の灸の場所は、七十六頁に出てゐるから改めてのべる必要はあるまい。この場所へ各々米粒大の灸を、毎日一番便利な時間に七火づゝすれば良いので、月經中でも差支がなくなつてまた風呂に入つてもよろしい。たゞ三里の灸だけは前に掲げてないから、此灸は年寄りは大抵知つて居らるゝから聞かれるがよい。これは有名な長命の灸であり、健康な人でも月の始めに四五日づゝおすえになる事をおすゝめしたい。

三、漢藥による治療

わが淺田流の神經衰弱の治療に用ふる藥で、最も普通に用ふる藥は歸脾湯に柴胡と山梔子を加へた『加味歸脾湯』と呼ぶものである。これは普通に云ふ神經衰弱で、健忘であつたり、神經過敏であつたり、また心神が疲勞して、やたらに物事が氣になつたり、或は直ぐに事務に飽いたりする病症を治すもので、藥の割合は次の通りである。

當歸	五分	白朮	五分
茯苓	五分	黃耆	五分
龍眼肉	五分	酸棗仁	四分
遠志	三分	人參	二分
木香	二分	甘草	一分
柴胡	五分	山梔子	三分

右が一回量で之を一合半の水に入れ、半分に煎じつめ、食前三十分服用する。一日二服より

ろしい。なほ第一服と第二服の煎じかすを合せて、更にそれを煮出して、夜ねる前に服用すれば更によろしい。

次に非常に神經が過敏で氣がイライラして落ちつかず、或時は臉がピクピクと動いたり、手や足の筋肉がピクピク自然に動いたり、つまらぬ事にビクビクして動悸が高まつたりする神經衰弱がある。この種の症狀のある患者は、次に申す『柴胡龍骨牡蠣湯』に加減をした藥をのまねばならぬが、此際とくに必要な事は、患者の腹が堅く筋張つてゐる事に注意せねばならぬ。神經衰弱で症狀はどうあれ、腹が筋張つて居れば、直ぐに此藥を持つて行けば先づよい。藥味は次の通りである。

半夏	四分	大棗	三分
柴胡	四分	人參	二分
龍骨	五分	牡蠣	三分
桂枝	五分	茯苓	六分
芍藥	五分	釣藤	二分

羚羊角	五厘	甘草	二分
生薑	三分		

右が一回分で一日二回、煎じ方も加味歸脾湯と同じである。

序に申し添へるがこの「柴胡龍骨牡蠣湯」は、我淺田流に於ては癩癩(テンカン)の第一等の聖劑である。服用法も用量も前と同じで、此藥でテンカンが治らぬ時、改めて別處方を與ふる事になつてゐる。

神經衰弱で特に不眠症のもので、前記の藥をもつて行つても効かぬ時には、次の藥を與へる事にしてゐる。これは『酸棗仁湯』と呼ぶものである。藥味は次の通り

酸棗仁	二匁	甘草	二分
知母	七分	川芎	十分
茯苓	一匁二分		

右が一回量で服用法は前通りである。これは金匱の酸棗仁湯であるが、千金方の酸棗仁湯には、右の處方中から川芎を除き、その代りに人參、桂枝、生姜、石膏を加へてあるが、余は淺田先生

の例にならひ金匱の酸棗仁湯を用ひ、症に従つて加減してゐる。

神經衰弱の實症的のものであつて、首から脊が凝つて、ために神經衰弱を起してゐるものは『葛根芎石』を用ふる。

葛根	九分	麻黃	五分
桂枝	五分	芍藥	六分
甘草	二分	大棗	五分
川芎	六分	石膏	二分

右が一回量で、服用法は前通りであるが、此症で通じのない時は、更に大黃を一分乃至二分加へねばならぬ。葛根湯は感冒の藥であるが、此葛根湯に石膏と大黃を加味して神經衰弱の藥とする運用の妙は、興味深いものがある。先づ大體に於て神經衰弱の藥は右の通りで良いと思ふ。

備考、神經衰弱には特に余は最簡方として灸をすゝめる。藥のみでも良いが、灸と藥とを併用せらるゝ時は、更によいのである。

自殺志願者の群

一、はしがき

私の著書はすべて、山中に暑さを避けつゝ、山氣の静寂にひたりながら書いたものである。信州の山奥、福島山奥、栃木の山奥など、みな私にとってなつかしい著述の場所である。——著述に疲れると私は散歩をして、村の朴訥な人達から話を聞くのが楽しみであつた。

それ等の話の中で、私の胸の忘に忘れたい深い印象を止めてゐるものは、中禪寺湖畔に滞在してゐた時に見たり聞いたりしたものである。私は本誌の記者に、一寸その時の話をしたら、是非にもと云ふので思ひ出すまゝに、順序もなく、断片的に走り書きをして見たのが、この小篇である。

中禪寺湖畔ではよく『一圓が来た』と云ふ言葉がある。自殺未遂者を発見して警察に渡すと一

圓の褒美がもらへるので、『一圓が来た』と云ふ事は、自殺志願の人が来たと云ふ意味なのである。私は一人おらりと山へやつて来たので、始めの中は村の人達が私を見ては『一圓が来た』とよくさゝやいてゐるのを耳にはさんで、何のことか分らなかつたが、後になつて一圓君は自殺者であることを聞かされて苦笑した次第である。以下の話はそれ等の滞在の間に見聞した所の物である。松崎天民君は『偷落の女』を書いて有名になつたが、文士諸君は旅行好きであるから、何時かこれ等の悲劇を一まとめにして書かれる事と思つてゐたが、まだ此話に目をつけられた方がない。誰かに小説の種として差上げたかと思つてゐる中に、下手な筆を強要される様になつた。軟かい文章が極めて下手な私にとつては、定めし讀者にとつてお迷惑な事と御察しする。

中禪寺湖畔と華嚴の瀧へ死に行く者が年に八百人からあり、近頃は見張りが嚴重であるので、多くは未遂の中に捕へられ、實際に死ぬのは七八十人で、五月六月が最も多く、七月が之に次ぎ、八月は見物人が多いので自殺者が減り、九月には殆んどなく、冬は絶無との事である。死ぬにも冷たいのが嫌だと見える、面白い心理である。

死ぬ人間の八割は戀愛であつて、二割は單なる厭世や責任自殺とか貧のためとか云ふものであ

る。而してこの八割の戀愛自殺の中、病氣のために親が許さぬと云つたものが半分である。

私は醫學の研究者であり、今日の醫學から見て如何に難病であつても、我漢方醫學の立場から見れば、容易に治ることが多いのであるのを思ふと、特にこれ等の自ら死を選ぶ人達には、深く同情される次第である。

二、一圓が来た

前にも云つた様に、私もよく『一圓が来た』と云はれたものであるが、この一圓の懸賞はどこから出るかと云ふに『信仰會』から出るのであつて、役場から出るのではない。これは坊さんや警察の人達が發起になつて、寄附を集めて、その中から支辨されてゐるもので、觀光客で日光に金が落ちると云ふものゝ、自殺者のために村が費す金は年々積つては大變な額にならうと云ふものである。

村から出てゐる自殺者の死骸を片づけるための費用は、年額百五十圓が限度だそうで、そんな僅かな金ではとても足りぬ。一人の死體を引き上げるにも五圓や十圓はかゝるのであつて、遺族

達や何やの寄附で、どうにか支出してゐるものゝ、とても足らぬとの事である。それで一圓の懸賞を出す事にしてゐるのであるが、これだけで年に七百圓にものぼるとのこと、懸賞があるから自殺者を多く未然に防げるので、どんどん死なれたら大變なことになる。村の人達は『どうせ死ぬのなら淺間山みたいに手數のかゝらぬ處に行つてくれゝば』と云つてゐるのも無理はない。

三、瀧て死ぬ人の色々

自殺は華嚴の瀧が目的であるが、近頃は見張りが嚴重なものであるから、なかなか本場所死ねず、中禪寺湖畔を選ぶ者の方が多くなつたが、死んだ人達の遺留品をしらべて見ると、必ず皆死ぬ道具を四五種は用意してゐるとの事である。即ち猫イラズ、カルモチン、阿比酸、海軍ナイフ、紐類、カミソリ、ピストル、短刀、モルヒネ等が重なるものである。

本式の死に方は、何と云つても瀧に飛び込むのであるが、本當に巖頭から飛び込む者は極めて稀れであるとの事である。それは巖頭へ行くのに道が不明であり、且つ鐵條網があつたり、見張りが嚴重であるために、なかなか巖頭に行けぬのにもよるが、多くは瀧の壯嚴さに打たれてしま

つて、いざ巖頭に立つても恐怖心のために飛び込むことが出来ぬのであらうと云ふ事に、村の人達の話が一致してゐるやうである。

巖頭から飛び込む人達を瀧見茶屋から見てゐる婆さんの話によると、巖頭へ出て洋服の上着をぬいで木にかけ、それから機械體操の棚から飛びおりの様に、ゆつくり一三と手を振り足を曲げて、びよんと飛び込む人があるかと思ふと、一三の代りに萬歳と云つて死ぬ人があると云ふ。瀧の音で聲は聞えぬと思はれやうが、瀧は百雷の落つる程に大きくはあるが、單調であるためか萬歳の聲がよく聞えると云ふ。或はひよつとしたら谷の形が反響を強める共鳴箱の作用をしてゐるのではあるまいか。とにかく萬歳と叫ぶ人があるとの事で、死の勝利と云ふ氣持であらう。奇抜なのは洋傘を開いてパラシートの様にし、極めて漫遊的に落ちやうと云ふ人間もあるとの事である。巖頭に逆立をして飛び込む者もあるとの話は聞いたが、『お前は實際に見たか』と問ふて見ると、一人も實見者の出ぬ處を見るとヨタらしい。

投身實見者の話によると、華嚴の瀧の崖の岩が三段になつてゐるが、投身者は一段までは飛び込んだ姿勢で、頭を上にして落ちて来るが、二段目で一寸頭が下に傾きかけたと思ふと、急にゲ

ルリと回轉して、それから矢の様に眞さか様にすつと落ち込むとの事である。

合掌して死ぬ人達は巖頭から飛ぶ人ではなく瀧見茶屋から瀧壺の方へ降りて行つて、其處から入る人や、或は瀧の上流に身を投じて流されつゝ瀧に落ちる人達が多いとの事である。多くの男子の死に方はこれで、女の人達は大抵は瀧の上流から流れて行くのであるが、それも甚だ稀れであり、多く中禪寺湖畔の靜かな場所を選ぶとの事である。此處に動を愛する男性と、靜を愛する女性の分れ目がある様に思はれる。

華嚴の上流の中禪寺湖から流れて来る川は、川はゞが凡そ四間ほどあらうか、大岩小岩がごろごろしてゐる急流で、深さは人の身丈は十分にあるであらうが、底は澄み通つて見え、岩に激した水流は眞白な飛沫をあげてゐる。瀧に落ちる十五間ほど手前からは、實に物凄い奔流をなしてゐる、巖頭に立つ時の物凄さは、瀧よりも此落ち口の奔流の方に誘惑を感じるのである。

巖頭から飛び込んだ女は、昔から數へて二三人しかなく、その身許を洗つて見ると、勝氣な藝者と待合の女將と中性的な女ばかりであるとの事で、さも有るべき事である。

合掌して死にかゝつてゐる人で、良く流れの途中で、熊手に似たもので引き上げられる人達が